

3度目の人生は静かに暮らしたい

ルーニー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

- 1 度目の人生は普通の人生だった。
- 2 度目の人生は最悪の人生だった。
- 3 度目の人生は静かな人生にしたい。

作中はシリアスにしたいけど作者がバカなのでまえがきあとがきは好き放題書きますのでご注意ください。

いや、ほら、ずっとシリアスだと気が狂いそうになりますやん？だから息抜きをね？

という感じでまえがきあとがき書いてます。はい。

目次

I F

没案その1 | 1

無印12 if | 14

A's 0 (エイプリルフル) | 20

ステータス(簡易版) | 27

本編

保育園児1 | 30

保育園児2 | 36

保育園児3 | 41

小学生1 | 47

小学生2 | 52

小学生3 | 57

小学生4 | 61

小学生5 | 66

狂った男のそばにいる少女 | 71

無印0 | 79

無印1 | 85

無印2 | 92

無印3 | 99

無印4 | 109

無印5 | 113

無印6 | 121

無印7 | 133

無印8 | 138

A, s 1	A, s 0	こ ど も の に つ き	無 印 1 2	無 印 1 1	無 印 1 0	無 印 9
185	180	174	162	156	151	143

没案その1

「つ……。う……。こ。は……。？」

突然意識を失い、気が付けば少年は見知らぬ場所に拘束されていた。周りは暗くどうなっているかも見えず、腕は光る輪のようなものだけで縛られているはずなのにそこから動かすことができず、しかしそんな状況にあるにもかかわらず少年は慌てることなく辺りを確認するかのように見渡している。

「……また、か」

少年、久藤信也はこういったあたり得ないことに慣れていた。それこそ、他者の命どころか己の命の危険すらもままあることだった。だからこそ、信也は落ち着いて周りの状況を確認する。己の命の危険を察知するために、危険をいかに回避するかを探すために。

「……………」

軽く辺りを確認し終えた信也は、ただどこかの研究室のような場所だな、と感じた。部屋の暗さに目が慣れてきた信也の目にはうつすらと本のようなものが積み上げられた机や本棚のような形をしたものが壁際にあるのを見ることができた。

「……チツ。これ以上は見えないか」

しかし、それ以外を確認しようにも暗さでなにも見ることができず、これ以上は見ても無駄だと判断した信也はここからどうやって出るかを考え始める。

腕や足は鎖で繋がれているわけではない。しかし薄く光るナニかに手足を縛られ、ろくに移動することもできない。なんとか壊れないかと手足を動かしても壊れる気配もない。そもそもこの光っている物が何なのかがわからない。

ない。ない。ない。考えても似たようなものはあってもそうであるものは記憶がなく、しかし突然のことに狂うことなく信也はただどうやって逃げるかしか考えていなかった。

自身が傷ついても構わない。四肢が残っていれば、最悪死ななければそれで十分なのだ。過去の経歴前世からそう思いながらここからどうやって出るかを考えていると、部屋のドアらしき壁が突然開く。逆光でそれがどんな人間なのかはわからないが、逆光から見える女性特有のシルエットがそこに立っているのを信也は警戒しながら見る。

「起きたようね」

カツリ、カツリとゆっくり近づく女性。その声は威厳に満ちたようにも聞こえるし、しかしどこか期待を纏わせるようなものがあると信也は感じた。

「……誰だ？」

「私が誰かなんてどうでもいいわ。私はあなたに確認をするためにここに連れてきたの」

想定内の返答。むしろ姿を確認すると問答無用で襲いかかってくる正気を無くした狂人やいることを否定したくなる化け物よりも会話ができる人が出てきただけ幾分かマシなほうではあるだろう。

しかし、会話ができてでも成立するとは限らない、むしろ拉致されていることを考えれば会話は成立しないであろうことを経歴から感じ取った信也は静かに女性が何を言ってくるのかを聞くために耳を傾ける。

「あなたに聞くことはただ一つ。死者蘇生の知識を有しているか否か、よ」

それを聞いた信也は思わず思考が停止してしまった。だがすぐにそれも解け、女性が言ったことを頭を高速で動かしながら確認するように口に出す。

「死者蘇生の知識、だと？」

死者蘇生の知識。確かに目の前の女性はそういった。確かに自分には死者を死ぬ前に戻すことができることを知っている。さらにその方法も知っている。

だが、それは常識で考えればあり得ないことであると子供でも分かることだ。人は死んだら2度と起きることはない。それが普通であり、不変の現象である。だが、その常識など掃いて棄てる存在がある

ことを、それらがあり得ない現象を引き起こすことを、その方法すらも信也は知っている。

だからこそ、なぜ信也がそれを知っていることを知っているのか。それが信也は理解できずにいた。

身動きができない状態にもかかわらず、信也は目の前にいる女性を睨みつけている。

廊下からの光で照らされている女性は妙齢に見える顔立ちや姿は美しいものであったが、その顔立ちからくる鋭い視線は美しさの中に潜んでいる猛毒の棘のようなものを感じさせるものだった。

「ええ。あなたはアルハザードの知識を持っている。それならば死者の復活も可能でしょう?」

アルハザード。その言葉を聞いた信也は顔を歪める。確かに信也はある書物の原本を調べるためにその名を口にした。だが、知らぬ者からすればただの人の名前だ。だが、知っている者からすればそれは崇め称える者の名であり、忌み嫌う者の名でもあった。

アブドウル・アルハザード。古代アラビアに生きた、決して存在してはならない知識を記した狂人である。多くの旧支配者を信奉したこの狂人が記した書物、ネクロノミコンは口にするのも拒む知識が記されている。その知識を写した写本は多く、それですらも国が滅んでもおかしくないほどの情報がそれには載っているのだ。

その中でも信也はそこに記されている怪物や化け物、魔術の知識、およびそれらの対処法を知るためにその原本を求めていた。もちろん簡単にことが運ぶようなことはなく、得られるものも書物の一部分のみであることが多いが、それだけでも街が1つ滅んでもおかしくはない代物だ。

なぜその名前を知っていると云わんばかりに睨みつけるが、女性、プレシア・テスタロッサは何も感じていないのか涼しい顔で少年を見ていた。

「出来るのでしょうか? ねえ、外法の魔導師さん?」

バチバチと、手にしている杖から電気が迸る。脅しとして電気を発している杖を信也に向け、しかし信也は絶望で顔色を変えることはな

く、むしろ威嚇するかのようにさらに視線を強くした。

「……いつから俺を監視していたんだ」

睨み付けながら吐き出したその疑問は、当たり前のように出てくるものでありながらどこかずれたものだった。

通常ならば『どうやって監視した』、または『どこから見ていた』などといった質問が出てくるはずなのに、信也が出した疑問は『いつから』。監視されていたこと自体に驚きはたいしてなかった。

しかし、それも仕方のないことかもしれない。信也が今まで体験してきたことはまさに『ありえない』をこれでもかと詰め込んで煮詰めてドロドロにしたかのような、混沌とした非現実だ。いつ死んでもおかしくないどころかいつ世界が崩壊してもおかしくないような事件に何度も遭遇し、果てには神とすらも何度も遭っている。

そんな中、いくら完全だと思ったところでどんなものにもできる綻びはあるのだ。そこから知りたくもない真実を必死に手繰り寄せて事件を解決してきた信也からすれば、個人で隠してきたことが誰かしらにバレていたとしてもおかしくはないと理解できている。

「……どうでもいいわそんなこと。さあ、できるのかできないのか、ハッキリ言ってもらいましょうか」

しばらく信也とプレシアのにらみ合いが続いたが、信也がわずかに顔をしかめ、鼻を鳴らして渋々といったように口を開いた。

「……いいだろう。ただし、条件がある」

「条件？あなた、自分の状況がわかってるの？」

「自分の状況？なにをふざけたことを。条件を飲まなければ俺は2度と口を開かないだけだ」

通常ならば、両手を縛られろくに動くことも出来ない状態でそのようなことを言ってもこけおどしにもならないものには感じられないだろう。

だが、信也の言葉には覚悟を決めたような、圧力のようなものすら感じる。娘を生き返らせるために狂ったプレシアも、わずかに冷や汗を流すほどにそれは強いものだった。

「……ふん。アリシアが生き返るのならなんでもいいわ」

本来ならばそんな交渉に乗る必要はなかった。ただ脅しをかけて情報を引き出し、それでもしやべらなかつたら消す。それをするだけでよかったのだが、今回は情報が情報のために軽々しくそのようなことはできなかつた。

プレシアの求める情報、アルハザードの知識は今やほぼすべてが失われたと言っても過言でもない。一部の人間からはその知識だけでも兆の額を出してもよいといわれているほどに希少なものになっている。

今自身の目の前にいる少年はその知識を持っているとプレシアは確信していた。実際にプレシアのもつ知識にすら存在しない現象を引き起こしているのだから、少なくとも失われた知識の一端は持っていることは間違いない。

だからこそ、次にアルハザードの知識を持つ存在が出てくるかわからない現状千載一遇のこのチャンスを逃すわけにはいかないプレシアはある程度の条件を呑まざるを得ない。

いくら探せばあるとはいえアルハザードの知識を、邪神の知識を多く貯えている信也をここで逃せば再び長い時間をかけて探す必要が出てくるのだ。分の悪い賭けであったが、信也はなんとか多少の譲歩をつかみとることができて内心安堵していた。

「それで？何が望みななの？」

「蘇生させる肉体が完全であるという保証。貴様の持つ知識と伝承を記した書物。俺という存在の黙秘。そして痕跡を残さずに俺を元の世界に返すことだ」

それをしないのなら、俺は一切手を貸さない。

そう言った信也の目は、嘘など言うようなものではなかつた。ここをこれを飲まなければ間違いなく、死ぬようなことがあっても話すことはない。

少年のような見た目に合わない威圧感と異常さに、わずかに関わったことへの後悔すら覚えていた。

「……いいわ。それぐらいなんの痛手でもない。すぐに用意してあげるから、その間に準備をしなさい」

だが、プレシアも、自らの欲望のためにクローンを作り出す禁忌にすら手をつけるほどに狂ってしまったプレシアも普通ではなかった。わずかに感じたおぞましい狂気を気のせいだと思い、警戒をしなから信也の腕を解放する。急に体を支えていた物が消えたことで魔術師はその場に倒れこんだが、隙をなくすように一気に起き上がりプレシアを睨み付ける。

「こっちよ」

魔術師の視線を無視し、背中を向けて部屋から出ていくプレシア。魔術師はそれを警戒し、やや離れた位置を保ってプレシアを追いかける。プレシアは信也に背を向けていたが、しかしそれに信也は何かをすることもなくただついていく。

歩く音しか聞こえない通路をしばらく歩き、ある部屋の中の壁に手を置くプレシア。すると壁が音もなく開き、プレシアはその中へと入っていった。

信也は警戒をしながら部屋の前まで歩き、中を見てわずかにではあるが初めて動揺を露にした。

その部屋は真つ暗な空間だった。生活必需品もなく、家具もない。そんな殺風景な部屋の中に、まるで人工の大木のようなものがあった。

胴体はガラスでできた、生体ポッドというべき装置の中には目を閉じた少女が入っていた。中は液体で満ちており、少女は静かに、一切動くことなくそこに漂っていた。

それをプレシアは当たり前のように振る舞い、中にいる少女に嬉しそうに、恍惚としたと言える表情を浮かべている。

それを信也はわずかに恐怖のような感情が湧き出ていた。自分の理解が及ばない存在が目の前にいるという事実、過去の体験がふつふつと思ひ出させていたのだ。

「……肉体を、死体を出せ。そして一切の風と振動を起こすな」

だが、人智を越えた存在に幾度も対峙してきた信也はすぐに恐怖を振り払い、感情を凍らせる。恐怖するのはいい。それは五感を研ぎ澄まし、周りを警戒する最高の感情だ。だが、過度な恐怖は思考を停止

させ、身体を強張らせるだけのものとなる。そんなことでは対抗すべきである脅威に殺されたも同然である。

それに、信也はこう言った手合いには幾度も対峙してきた。だからこそ知っているし、ある程度の理解もある。

信也はプレシアの狂気を理解できない。だが、狂気は理解できないものだと理解している信也は表情を凍らせ、中へと入っていく。

信也の姿を確認したプレシアはわずかに顔を歪ませ、近くにあった機械を操作する。

ゴボリ、と大きな空気の入る音とともにポッドに大きな気泡が少女を包んだ。そして気泡は空間へと変わり、液体の無くなった中で少女は倒れるようにポッドに寄りかかった。

「……最終確認だ。この死体、本当に不備がないんだな？」

ポッドが開き、少女を抱き抱えたプレシアはゆっくりとその頭を撫で、どこからか取り出した毛布の上に寝かせる。まるで壊れ物を扱うように、同時に笑みを浮かべていたプレシアは、信也の声を聞くなり慈愛に満ちた笑みを忌々しげに歪めては信也を睨み付ける。

「当たり前よ。事故で死んでからすぐに肉体を回復させたの。肉体にはなんの不備もないわ」

「……いいだろう。終わったというまで一切の干渉をするな。それを破ったとき、こいつがどうなろうと知ったことじゃあない」

プレシアを少女から離し、信也は少女の前に立つ。何度か口を動かし、のどを慣らすように数回声を出して口を閉じる。

目を閉じて深呼吸をする。そして、ゆっくりとまぶたを開き、少女に視線を向け、ゆっくりと口を開いた。

「」

信也は呪文を唱える。いや、それは呪文なのか、言葉としてすら怪しい音を、人が出せるのかとすら恐怖するほどに怖気立つ音が部屋の中で木霊した。魔導士として優秀なプレシアも初めて聞く音に、こんな音が人から出るのかと、わずかに恐怖を感じた。同時に、これならばきつと娘を生き返らせることができるかと確信めいたものも感じていた。

何分経つただろうか。嫌悪感すら感じる音で絶え間なく唱え続ける信也に、プレシアはまだかまだかと苛立ちが沸いてくる。杖を持つ指で杖を叩き、今か今かと愛娘の蘇生を待っていると、それは突然訪れた。

アリシアの死体がわずかに発光し、次の瞬間には白い粉の山へと変わったのだ。

「~~~~~!!?」

声にもならない悲鳴をあげた。愛する娘が、なにかわからない粉へと変わったのだ。気が狂いそうなほどの痛みを感じ、今にも信也に襲いかかろうとした。

しかし、怒りと絶望の中でまだ終わっていないという、わずかに残った想いが信也を襲うことを引き留めた。まだ終わっていない。まだ、終わったと言っていない。

だが、それでも、失敗したなどと言うようであれば、目の前の信也には生きていることが苦痛となるほどの痛みを与えると、今にも消えそうな想いを繋ぎ止めるように別の怒りを沸かせていた。

そして、白い粉の山となったそれに対して信也は呪文を続ける。

人が出せるようなものではない、異常とすら言えるその音が部屋の中に響く。そして、全ての呪文を唱え終えて口を閉じた、その時だった。

白い粉が、まるで逆再生されたかのように肉体へと変化するように動き始めた。

粉は骨へと、肉へと、神経へと筋へと水へと爪へと皮へと体毛へと目玉へと歯へと変わっていき、そして、それは呪文を唱える前と寸分の狂いもなく変わった。

「……アリ、シア……?」

目の前の現象が信じられないのか、さっきまでの狂おしいほどの殺意と怒気の代わりに驚愕と信じられなさを露にする。よろよろと2人へと近づいていき、もう終わったのかを確認しようと口を開いた、その時だ。

「……ん……あ……?」

開く筈のない口がわずかに開き、そこから少女のか細い声が漏れた。

その声を聞いたプレシアは目を見開き、音もなくそこから涙が溢れ出している。

「……………」

ゆっくりと、しかし確実に開いていく瞼の下には、普通ならばありえない光を宿した目が顕れる。

顕れた目はゆっくりと辺りを見渡し、目の前の顔も見えない不気味な人間を見て、そしてそのままその後ろにいる存在へと移った。

「終わったぞ」

「アリシアー！」

着火した爆弾のごとくその言葉を聞いたプレシアは待ちきれないと言わんばかりに信也を除けて愛しい娘に抱きつく。そこから感じる心臓の鼓動が、呼吸が、体温が、愛してやまない娘が生きているということを実感させた。

「……………おかあ、さん？」

「ああ……………アリシア……………！本当にアリシアなのね……………！」

まるで懐かしむように、まるでですがるようにアリシアを抱きしめ、涙をこぼす。長年の夢が叶ったという現実を確かめるように頭をなで、頬を合わせ、身体を抱きしめる。

ああ。夢ではない。本当にアリシアは生き返ったのだ。

「どうしたの？ なにか、あったの？」

突然の母の行動に起きたばかりのアリシアは不思議そうな表情を浮かべる。だが、母が自分を抱きしめてくれているということに安心感が沸いたのか、すぐに嬉しそうに破顔した。

「……………契約通り、生き返らせた。そちらも契約通りにこの世界の知識と伝承を集めたもの、そして私を元の場所に戻してもらおうぞ」

感動すべき家族の対面を男の声が遮る。その声を聞いたプレシアは忌々しげに表情を歪めてその声が発せられた方を見る。

まるで人形のように表情の見えない、しかし確実にこちらを警戒している確信しているプレシアは恩人とも言える目の前の男に、忌々

しげな表情を浮かべる。

大きく鼻をならし、ついてきなさい、と一言告げるとアリシアを抱きながら歩き出す。それに信也はついていくとプレシアは一番奥の部屋へと入っていく。不意打ちを警戒して中を覗くと、そこは様々な機械が置いてある、一種の研究室のように見えた。その中でプレシアは部屋の中央にある機械を片手で操作しながら空いている手でタブレット端末を信也へ投げ渡した。

「魔法を使っていないからその手のサーチもできないわ。使い方は音声ガイドで覚えなさい。私の持つ知識と伝承を全てその中に入れておいたわ。もう1つはその端末の充電器よ。この世界でも使えるようにしてあるわ」

「……確かに受け取った」

タブレット端末とそれに付属しているものを確認した信也は口の中に入れて入れる。

本来ならこのようなことをする必要は全くない。むしろ自身に管理局の目が向く可能性を考えればこのようなことをしないほうがいい。すべてを終えたあとで、一瞬にして殺してしまえば全てが終わるのだ。

だが、それをして万が一復活させた愛娘に何かあったら、機嫌を損ねるようなことをしていなくなるようなことになれば、目の前の外道を殺してまたやり直さなければならなくなるのだ。仮にこの呪文を奪い取り、同じ事をしたとしても、同じように復活するかどうかすら危ういことを考えればこのまま機嫌を損ねないほうがまだマシであるとプレシアは判断した。

手を出せばまた愛娘を死なす。この可能性が信也を生かし、かつ情報を手に入れることができる。まさに自分の命を張った一か八かの賭けであったが、信也は分の悪すぎるその賭けに勝ったのだ。

「そこが転送システムよ。起動すればあなたが指定した場所に送れるようにしてあるわ」

「……転送後に私に関する情報の一切合切を消してもらおうぞ」

「構わないわ。アリシアと共にいられるのなら、ね」

装置の中に立ち、プレシアは装置の操作を始める。少しの間、かなりの早さでタイピングを続け、そしてすべてが終わったのかピタリと手を止める。そして視線を信也の方へ向け、信也とプレシアは同時に口を開いた。

「2度と俺の前に姿を現すな。イカれた魔術師」

「2度と私の前に姿を見せないことね。外法の魔導師」

奇しくも似た言葉を発した2人はそれ以上の言葉を出さず、カチリという音とともに信也の姿が消えた。

「アリシア、これからは私と一緒に生きていきましょうね……」

プレシアは、消えた信也のことをまるで忘れたかのように、記憶から排除したかのように装置から視線をはずして愛娘のアリシアを抱き締める。

人として生きていく温かさや心臓の鼓動、息をしている声はそこにいるはずのない、もう手に入ることはないのではないのかとわずかに感じた存在がいるんだと、安心すら覚えた。

「……………」

ただ抱き締められているアリシアは呆然と虚空を眺めていたが、だらんとぶら下がっていた手を母の背中に回し、弱々しく抱き締める。

「おかあさん」

「なに？アリシア」

愛娘からの呼び掛けにプレシアは喜びを隠せずにいられなかった。抱き締める強さを強め、ただただそこにいるということを感じたかった。

「のどがかわいたの。おなかがすいたの」

「そう。なら、ご飯にしないとね。なにがいい？あなたの大好きなハンバーグ？それとも久しぶりの食事だから消化にいいものがいいかしら？」

早速準備をしなくちゃ、と離れようとするプレシアだったが、アリシアはその腕を放そうとしなかった。まだ甘えたいのかな？と微笑ましい愛娘の様子に笑みを浮かべるプレシアに、アリシアは微笑みを浮かべて口を開いた。

「おかあさんをたべたい」

その言葉をプレシアが理解する前に、アリシアの歯がプレシアの首に突き刺さる。プレシアが自分の娘が何をしているのかを理解する前に皮と肉がちぎれ、水が落ちる音が部屋の中で響いた。

「……肉体が完璧？ 死んでから長い期間あの状態でいたのに、本当に何も欠けないでも思ったのか？ いや、おそらく作り物と自然治癒の違いを知らなかったから、それを知ることができなかったのか」

転移が終わり、被っていたローブを炎の精で燃やしている中、どこにいるかもわからないプレシアに向かって嘲笑うかのような笑みを浮かべていた信也がそこにいた。

信也は感覚的に解っていた。死後何年も経った死体に、それも肉体が損傷した結果死んだ死体がいかなる技術を以てしても完璧に修復できることなどないと。

肉体とは生きていた時に自分のものであると霊が認識していたもの。死んだあとに無くなった部分にクローンの肉を繋げてもそれは欠損部分を治したただけであり、霊がそれを肉体と認識していないために完全に修復できるわけではない。

例え『復活』の呪文で塩と化合物の山となっても、それは別の人間のそれと合わせたものに過ぎない。つまり、本来の人間の霊と別の人間の霊が合わさった化け物になる。それが死んだ人間の細胞を使って作った部分的なクローンの肉だとしても、霊が全く存在しないわけではないのだ。仮に死ぬ前からそれが自分の肉体であると認識していたのならば、本体の意思のある霊がクローン部分に宿る霊を排除して肉体的にも霊的にも1つになるのだが、それはあくまで仮定の話。ここでifを求めても無駄なことだ。

プレシアの話聞き、死体を塩と化合物の山と化したものを見て信

也は感じていた。あれは複数の肉体が1つになっているだけの肉の塊であることに。万全には程遠く必要な量が足りていないと、前世での経験から直感的に理解できていた。

だが、それを信也は言わなかった。言ったところで狂った人間に聞く耳など持つはずがないと、今までの経験で理解していた信也は逆に自身の手を汚さないで魔術を知る存在を処理できることに喜びすらあったのだから。

そして信也は『復活』の魔術を唱えた。クローンであったがゆえに肉体は完全なものとなったが、たましい霊は交ざった。混ざってしまった。

なかみ霊が増えてしまったから肉体が足りなくなつた。溢れそうになつたなかみ霊は溢れないように肉体を増やそうとする。成長するために食べ物を食べるのと同じように、足りない部分を摂取することで補おうとする。それしか考えられなくなる。

触れるべきではない知識を見た女性、プレシアは自ら望んだ存在に殺され、復活した少女のアリシアもなにも知らず、不完全であるがゆえに理解できずに自分の親を殺し、足りない肉体を補おうと人を食らう化け物としてまともな人間はそれを殺す。そこに魔術の存在を知る者の影はない。

「邪神の知識に触れた己の愚かしさを呪うことだな。触れてはならない知識を知った代償をその身をもって払うがいい、プレシア・テストアロツサ」

どこにあるかもわからない時空の箱庭を空に幻視して、信也は嘲笑うかのように顔を歪めていた。その言葉はとても軽く、とても冷たいものだった。

そして信也はこれで終えたと思っていた。自分に繋がることは消えて、一時の平穏が訪れたと感じていた。

それが、この出来事が日常を壊す決定的な瞬間であることを知らずに。わずかな期間の安堵を噛みしめていた。

「ジュエルシードよ！私の望みを！私をあの手まわしい事故があった時間へと連れていきなさい！」

ジュエルシードが妖しく光る。瞬間、空間が揺れたとすら感じる揺れをその場にいた全員が感じた。それは収まることなく、むしろ強さを増しながらジュエルシードから大量の魔力があふれでていく。

空間が歪む。大量の魔力が一点に集中していき、まるで空間をこじ開けようとしているかのごとく揺れが強くなる。

地面だけの揺れではない。空気が、その空間そのものが震えている今、魔法を使うことすらもできず、ただ立つことしかできない。このままでは空間が崩壊し、あつてはならない空間が開かれようとしている最中に、それは起きた。

まるで真ん中から切り開いたかのように、空間に鋭角の切れ目が入って左右に開かれる。鋭角しか存在していなかった開き口が一瞬にして曲線へと変わり、その中に映し出されている空間を見てその場を見ていた全員が言葉を失った。

フェイトと生き写しの少女。何事もなく楽しそうに笑みを浮かべている少女のいるその場所は、どこかの研究機関の研究所と思わしき機械がところ狭しと並んでいた。

「ああ……アリスア……！私の、かわいい娘……！」

その姿を見たプレシアは涙した。自分が求めて止まないその姿に、その存在に心を奪われている最中にそれは突然現れた。

「……ッ!？」

全員に悪寒が走る。すべての悪意を集めて煮詰めたような、あまりにも不気味で気持ちの悪いそれを、プレシアを除くそこにいる全員は知っていた。

「この、感じ……！」

「間違いない！これはあの……！」

いや、忘れるはずもない。悪意と憎悪と殺意をドロドロになるまで

煮詰めたような負の感情の集合を、友の未来を失ったあの屈辱を、なのはたちが忘れるはずがない。

どこから出てくる。人を常識外の手段で変わり果てた姿へと変える化け物に恐怖故か意識をそれへと向ける。だから自分達の前にいる存在の行動を見逃してしまった。

「ああ、アリシア……。今からあなたを助けるからね……」

人生を賭してでも待ち望んだ愛娘が目の前にいることに夢中になっているプレシアだけが何が起きているのかわかっていない。否、わかるうともしていない。

ただ娘を助けるために。ただ娘に会いたい一心に。ただこれから起きる惨劇を無くすために。プレシアは周りのことなど目に入れることなく、ただ目の前の映像へと興奮で震える足を運ぶ。

「ツ！母さん！ダメ！」

襲いかかってくるであろう化け物を知っているフェイトはその魔の手から母を助けるために手を伸ばす。機械人形をかわしての移動に、しかしその腕がプレシアに届く前に映像の中から3つのナニカがプレシアの胸に突き刺さった。

「えっ？？」

その光景に誰も動くことはできなかった。胸に突き刺さっているにも関わらず痛みも大してないそれがなんなのかをプレシアが理解する前に、粘性のあるものを吸いとるかのような汚い音が辺りに響いた。

「か……あ……!?!」

ジュルリ、ジュルリと3本の触手がプレシアの何かを吸いとる。液体を吸いとっているようで、しかしそれは致命的な何かを吸いとっていることを証明するかのようプレシアの様子が目に見えて変わってゆく。

妙齢の美人と言えたプレシアの肌の張りがなくなり、声に覇気がなくなり、顔から生気が失われていく。?!?!

「つああああああアアアアア!?!?!」

フェイトの叫び声が、部屋の中に満ちた。手に持ったバルディツ

シユを大鎌へと変え、非殺傷設定すらも解除してプレシアを苦しめている触手に電気の刃を斬り込んだ。

斬り込まれた触手は抵抗もなくいとも容易く断ち切られ、電撃によつて焦げ付く嫌な臭いを発した。悲鳴のような唸り声とともに粘着質な液体をすすするような不快な音をたてながら触手は過去の映像の奥へと消えていき、同時に悪意が消えていった。

そして、プレシアは立つ力すら残されてなかったのか胸に孔を空けたままその場に崩れ落ちる。

「母さんー！」

倒れたプレシアを見てフェイトは急いでプレシアの側に行く。人形のごとく全身の力が抜けて重くなったプレシア体をフェイトはなんとか上半身だけ抱き抱える。

しかし、プレシアの顔から生気を感じない。美しかった顔は一気に老けたかのように土気色となり、温かかったであろう体温も奪われたかのように冷たくなっていった。

その様子はまるで死んでいるかのように、プレシアは静かにフェイトのなされるがままだった。

「母さんー母さん、母さんー母さん……ッ！」

プレシアの様子に、フェイトは涙を溢す。脳裏から最悪の出来事を振り払うかのように母さんと叫び、涙を流し、ただ自らの無力を嘆いた。

「……その顔で、アリシアの、顔で、泣くのは、やめなさい」

フェイトの頬に冷たく、しかしどこか温もりのある震えた手が添えられた。涙で見えなくなった母の顔は、苦しみに耐えながらも憎んでいるかのような表情は変わらずにフェイトを見ていた。

「母さん……う？」

フェイトは震える手で頬に添えられた手をつかむ。もはや手を上げるだけでも辛かったのか手を握っても震えていた。

鞭を打った。人形と呼んだ。体のいい道具としても扱った。憎まれてもおかしくない行為をあれほど行ったというのに、まるで嫌う様子のない幼子にプレシアはせき込むかのように弱く笑い声をあげる。

「……本当に、どうして、こうなった、のかしら、ね」

プレシアは自嘲するかのように笑みを浮かべる。体を動かすこともできず、もはやしゃべることすら困難なほどに衰弱しきっていた。

だからかもしれない。衰弱しきった体で、残り数分と持たない命で見るフェイトが、どうしてか記憶の中にいるアリシアと重なり、それがある言葉を思い出すきっかけとなった。

『私に妹がいたら、私も、それにお母さんも寂しくならないよね』

そうだ。寂しいのだ。夫を早くに亡くし、アリシアがただ一人の家族だったからアリシアに執着していた。

たった一人の家族。たった一人の愛娘。我が子が望んでいた、否、自分すらも望んでいた寂しさのない日常を、あろうことか自ら作り出しては自分の手で壊そうとしていたのだ。

自分の本当の望みはすぐ側にいたのに。自分の本当の望みは既に手の中にあつたも同然なのに。それすらも気づかずに、ただ一つの願いに妄執し続けていた。

「……いきなやい」

ポツリと、息も絶え絶えにしながらもプレシアは最期の力を振り絞って手を震わせながらフェイトの頬に当てる。

フェイトは突然のことに目を丸くしてプレシアの目を見る。その目は今までの狂気に満ちたものではなく、理性の光を灯した、優しさのある目だった。

「……お母、さん？」

頬に添えられた母の手を、どうすればいいか分からずに触れたり離したりする我が子をプレシアは笑った。

この子はこんなこともわからないのか。この子がこんなこともわからないようなことを自分はし続けていたのか。

それは愛しい娘が死んでから何度も感じた後悔だった。どうしてああしてあげられなかったのか。どうしてこうしてあげられなかったのか。そんな愛娘にし続けていた後悔を、プレシアはフェイトに想ったのだ。

そして添えた手を静かに伸ばし、壊れ物に触れるかのようにフェイ

トを優しく撫でる。

「いきなさい、フェイト。あのこの、いもうと……わたしの、むす、め……」

それが最期まで振り絞れた力だった。撫でていた手は重力に逆らうことなく床に落ち、さつきまでとは比べ物にならないほどに、プレシアの体は重くなっていった。

「……かあ、さん……？」

あまりにも急激に重く冷たくなった母の体は、幼い少女の細腕で支えるにはあまりにも重いものだった。

「母さん！母さん！」

フェイトは揺する。母だった肉体を現実を拒否するかのようになり死になって揺すった。しかし、それから返ってくるのは何もない。ただただなされるがままに動き、そして動かない。

ダラリと力なく眠る姿は、決して起きることのないそれは、幼い心を持つ少女に否応がなしに現実を見せつけていた。

「あ、ああ……！ああああああああああああ！！」

これがプレシア・テストアロツサの引き起こした事件、ジュエルシード事件の顛末だった。

その後も謎の生物が全員の前に現れたが、直後にジュエルシードの暴走による爆発、およびそれによる次元震によって時の箱庭の崩壊が起きた。

この爆発によって本事件の首謀者の1人でもあり、同時に被害者でもあるフェイト・テストアロツサは爆発に巻き込まれたものの幸運にも小規模の爆発によって吹き飛ばされ、大爆発に巻き込まれることなく全治1ヶ月の重傷で済んだ。さらに魔法を使うことで1週間も経た

ずに通常の生活を送ることが出来る程度には回復できた。

しかし事件の真犯人であるプレシア・テスタロッサの遺体は爆発に巻き込まれ、行方不明となった。爆発によって消えたプレシアとアリアの遺体、およびジュエルシードをアースラが懸命に探すも、次元震による虚数空間に落ちてしまったのか結局は見つけることはできなかった。

そして管理外世界でジュエルシードを奪い続けたフェイト・テスタロッサとその使い魔アルフはクロノ・ハラオウンによって逮捕されたが、その傷と経緯いきさつからひとまずアースラにて療養することとなった。さらに経緯と事実を知っているからか、それとも自らと同じく親を亡くしたからか、彼女の罪を軽くするために奔走することとなった。

実の母を失ったフェイトは悲しさに打ちひしがれていた。最後の最後に娘と呼んでくれた母に、しかし救うことができなかつた自身の力のなさを呪った。

それでも、フェイトは立ち上がった。親友となる女の子の手助けもあったが、フェイトは自分の足で立つことができた。悲しみを引きずったまま、しかし母の最期の遺言でもあるいきなさいという言葉を胸に、ゆっくりではあるが確かに進んでいく。

母に見せたかった世界を。母とともに歩むことのできなかつた未来を。失った痛みを忘れることなく、ただ自身の信じる道を、母の望んだ道をいきつづけるために。

A, S O (エイプリルフール)

誕生日の前日の夜。1人孤独を感じることもある自室ではやては本を読んでいた。兄とすら思える存在である信也の部屋から借りてきた都市伝説の本は、読めば読むほど滑稽とすら思えるような内容が数多く存在していた。

女性の笑う空。動く植物。腐敗臭の漂う自殺スポット。人の消える路地裏。爆発を起こす石。人型の住まう霊園。行くことをやめさせる空間。そして消える少年。

軽く例を挙げただけでもどれも胡散臭い、信じられないようなものばかりで、しかもその表情が真剣そのものなのだ。はやてはどうしてこんなものを読んでいるのだろうかとすら思えてならない。

「……信也やから、なんて納得できるようなできないような……」

普段の様子から考えるに、オカルト嫌いなはずの家族がこんなものを読んでいるということにもはや諦めに似た感情を浮かばせる。どうしてこんなものを、と思わなくはないがホラ話としてはある程度の写真や証言といった情報元を暈しながら記述してあるだけまだ信頼性があると感じているのかもしれない。

カチリ、カチリ、と1人しかない空間に時計の進む音が響く。一息ついて時計の音が耳に入ったはやては、ふと時計を見ればもう12時までわずかという時間になっていた。

「寝やなああかな。明日は、私の誕生日やし」

もうひとつの家族とも言える信也の両親から、誕生日だということ家族全員で祝ってもらえるということを約束してもらえた。血の繋がった家族を失ったはやてにとって、普通の家族のように祝ってもらえるこの環境に、1人ではないという嬉しい思いと共に自分の両親はいないという悲しい思いが混ざって複雑な気持ちが渦巻いていた。

「……寝よ。寝たら、こんな気持ちも無くなってくんや」

自分に言い聞かせるように本を閉じてスタンドの電気を消す。豆電球とカーテンの隙間から漏れている月明かり以外に光のない薄明るい部屋の中で目をつむる。

カチリ、カチリと聞きなれた時計の音が静かな部屋の中で木霊する。明日は何をしようと楽しいことを考えようとしたはやては、明日が自分にとって特別な日であることを思い出した。

「……そういや、明日私の誕生日やったなあ」

自身の誕生日であることを思い出したはやては、しかし特に大きく感情を動かすことをせず深く息を吐く。この家に来てから何回目の誕生日だろうか。誕生日が来るたびに一緒に祝おうと約束してくれたお世話になっっている大人2人は、どうしてか外すことのできない仕事が入ってきて一緒に祝うことはなく、信也だけが誕生日と一緒に祝ってくれた。もちろん帰ってきてくれれば祝うのだが、そのすべてが次の日に跨いでしまう。

そのことにはやては怒りを感じることはなかった。2人の職業が医者であることは知っている上でどうしても外せないものはあるということを感じないなりに理解はしていた。しかし、だからと言って寂しさを感ぜないことは違う。普段4人で家にいるのに、どうして特別な日は2人も欠けてしまうんだという気持ちは、消すことができずにいた。信也だけはまだどこにも出かけずに一緒にいてくれるが、いつ一緒にいてくれなくなるかわからない状態にしか見えない今、また1人になってしまうのではないかという不安が込み上がってくる。カチリ、カチリと時計の音が響くたびに、はやての中の不安はじよじよに大きくなっていく。それを自覚してか頭ごと毛布をかぶって時計の音を聞かないように耳をふさぐ。

しかし、それでも時計の音ははやての頭の中で響く。カチリ、カチリと耳をふさいでいるのにはつきりと聞こえてくるその音に、はやては目を強くつむる。

いやだ。1人はいやだ。家族が欲しい。ずっと一緒にいてくれる、どこにも行かない人が欲しい。

毛布を握る力が強くなる。自分の手が痛くなるほどに強く握りしめて、しかしそれでも現実を見たくないといわんばかりに目を強く閉じて静かに眠りに落ちるまで体を震わせる。

そして、カチリ、と時計が12時を差した。その時だった。

「っ!？」

本棚から何か重いものが落ちる大きな音が部屋に響いた。ふさいだ耳でも聞こえたそれに肩を大きく震わせて音の発生元に目を遣ると、そこには1冊の本が光りながら浮かんでいた。鎖が絡まったそれは、まるで誰かに千切られようとしているかのように鎖の激しい音が鳴り響き、そして大きな音と共に鎖が千切れて消えていった。

「な、なに!? なんなん!？」

突然のことに正常な判断ができない。逃げるべきなのにあり得ない光景を目の前に動くことができずただ目の前で起きている現象を見続ける。

宙に浮かんだ本が開いていき、めくれる音が響く毎に光が強くなっていく。そしてめくれる音が止まるとそのページから白い粉のようなものが降ってきた。4つに別れていくそれらは、次第に4つの山となった。

次に音が聞こえた。かろうじて声のようななにかだとはわかったが、それがどのような声なのか、どこという言葉なのか、どんな音なのかすらわからないその音は、聞き続ければ狂ってしまうのではないかという不安を感じさせるものだった。

音が鳴り響く中、4つの山は独りで舞い上がっては何かの形を象り始める。じよじよに形になっていくそれは、まるで逆再生をしているかのように肉体を作っていく、そして最後には4人の人へと変化した。

「夜天の守護者、ここに参上しました」

そしてその4人は、まるで王様の前にいるかのように、はやてに跪いていた。

それはまるで魔法だった。そんなものあるはずがないと思っっていた。いや、常識で考えたらあるはずがない。

だけど、目の前で起きたことはとても現実には見えなくて、目の前にいる4人がどうして自分に跪いているのかなんて、はやては現実感のない現実には酔い、細かなことは気にもならなかった。

ただ、願いがかなった。1人はいやだ。家族が欲しい。その願いに

応えてくれた存在だと、そう思った。

現実感のない幸福感に酔いしれているはやてに気を付けながら、しかし扉の一番近くにいた桃色の髪の女性が何かに気付いたかのように扉に視線を送る。そして白髪の男が音もなく立ち上がり、気配を消して扉まで移動した。

「扉を壊します。どうかお許しを」

はやてがどういふことを聞く前に、すぐそばにいた男が扉を蹴り破る。聞いたこともない木が割れる音が響いた中、その声は確かにはやての耳に届いた。

「いづあ……い！」

割れた扉が落ちる中、白髪の男は破片を踏むことも気にすることなく部屋の外に出ていく。そしてしゃがんで何かをつかむと、それを引きずりながらはやての部屋の中に戻ってきた。

「こいつがいた」

首に手をかけて宙吊りにされる。かろうじて息はできる状態ではあったが、しかし足が地についていないせいで思い通りに動くことができずにただ睨み付けていた。

「し、しんや!？」

自分の家族が家族の首を絞めている。その現実には先ほどまでの幸福感は消え去って焦りの混じった悲鳴を上げる。その悲鳴に反応した桃色の髪の女性は目を見開いてはやてに視線を送る。

「主、もしや知り合いましたか」

男が少し慌てたような表情をして手を放す。バランスを整えることなく床に落ちた信也はせき込みながら床にうずくまる。金色の髪の女性は急いで信也に手を伸ばすがそれに気づいた信也はその手を払って逃げるように壊された扉へ転がった。

「ガッ!？」

突然、金髪の女性が苦しげに首を押さえる。啜るような音が部屋の中で木霊し、その首からチューブの中にあるかのように血が動く。そして、血は管を回るかのように空中で動き回り、脈動する球体が浮かび上がった。それは真っ赤に脈打つ巨大なゼリーにたくさんの触手

が備わっており、ぷるぷると震えている。その触手の先には吸盤がついており、生き血を吸るためにあるような口と大きな鉤爪も備わっていた。

1人を除いたこの場にいた全員は呆気にとられていたが、金髪の女性の苦しげな呻き声に正気を取り戻した赤い髪の少女は雄叫びを上げてどこからともなく鉄のハンマーを手に取って姿を現しつつあったそれを殴り飛ばす。まるでゴムを殴ったような感触に思わず顔をしかめたが、その幼い姿からは想像できないほどの威力に金髪の女性に噛みついてきた触手を残して本体を壁へと叩きつけた。

「な、なんだ、こいつは……!?!」

壁にたたきつけられた衝撃で吸い取られていたであろう血が壁に弾ける。粘性のある水音に生理的嫌悪感を抱きながら辺りを警戒すると、桃色の髪の女性は見えない何か、おそらく壁にたたきつけられた生物と同じナニカであろうと目星をつけたが、に囲まれていることに気付いた。

「こいつらを、父さんと母さんとはやて以外のこの家にいるやつを吸い尽くせ!星の精!」

女のような、狂った歓喜の笑い声が部屋を震わせる。いくつもの見えない何か4人に襲いかかり、しかしそれぞれハンマーや拳などで対処されていく。

「アメエツ!」

命令した存在である信也は、いつの間にかはやてのすぐそばにいた。薄く光るナイフを片手に持った信也は気を失ったように眠っているはやてを鉄を握った腕で抱えている。それに気づいた赤い髪の少女はハンマーを振りかぶって信也に突撃するが、聞いたこともない言葉を発しながら信也は腕を前に突き出す。その腕に向かって振り下ろされたハンマーは、しかしまるで腕を避けるかのように横にずれてベッドへと叩き込まれた。

「なっ!?!」

ありえない軌道を描いたハンマーに驚愕の表情を浮かべる。見たことも感じたこともない異常に動きが鈍り、信也はその隙をつくよう

に喉元へナイフを突きつけた。

「っ!？」

しかし、ナイフはヴィータののどを突かず、まるでなにかに阻まれているかのように甲高い音を立てて停止する。つかまれて止められたのではなく、まるで透明な鉄に突き立てたかのようなしびれとともに、わからない現象に対する考えに思考が寄ってしまった。

粘着質な音とともに胸に鋭い痛みが走る。軽く押し出される感覚とともに、体内に何かが入り込み、そして外に出てこようとしてくる感覚だけが信也の脳内を支配した。

「ガッ……!？」

痛い。痛い。痛い!

体の中にあつてはならない物体が入り込んでいる感覚が、体から流れてはならないものが流れる感覚が、あるべき熱が失われていく感覚が、かつて玉虫色に押し潰されたあの一瞬と同じそれが胸から突き出してくる。口から鉄臭い液体があふれ出し、口や鼻からとめどなくあふれてくる。

「隙ありだ」

水を含んだ生物が抉じ開けられる生々しい音が現実のものとは思えなかった。腕に抱えられたはやてを奪いとってねじりながら剣を抜きとる。重い液体がベッドの上に落ちる。信也はゼンマイをとられた人形のように膝から崩れ落ち、粘着質な液体が叩きつけられる音と共に、はやての目の前で信也はピクリとも動かなくなった。

「……ん……あ……?？」

同時に、先ほどまで眠っていたはやてが目を覚ました。先ほどまで眠っていたことの自覚がないのか辺りを見まわし始め、そして床に倒れた信也を発見してしまった。

「し、しんや……?？」

震える声で呼んでも、彼は動かなかった。認めない。認められない。目の前の現実、眠っている自分が見ている悪夢だ。次の瞬間には自分は跳ね起きて、急いで車イスに乗ってしんやのへやにはしつ

て、ねてるしんやにとびこんで、おこして、おこられて、それで、それで、それで……。

しんやが、おとうさんが、おかあさんが、ちをながすにくかいになつたきおくが、あたまのなかでずつとくりかえしている。

「いやあああああああああああ!?!」

この場にいるすべてと繋がっている少女の悲鳴が、現実を認められない者の耳に現実を、安全を願った者の耳に否定を鋭く突き刺した。

ステータス（簡易版）

ステータスなのですが、ここでは

EDUに関しては、クトゥルフ神話TRPG公式ルールブックにおいて、12で高校卒業、16で大学卒業以上となるので、ここでは『EDU＝年齢－6＋ α （ $-2 \leq \alpha \leq 2$ ）』を基本とさせていただきます。主人公のEDUが上限越えているのは前世の記憶がキメ細かに思い出せること、3度目の人生だからという点を踏まえたものです。

また、このステータスは魔法等のない、純粹なものであることもご承知ください。魔法まで考えたらDEXとかSIZ、STRなんてあつてないに等しいになりますし。あとPOWはリンカーコアとは全く関係のない、精神的な強さとして見ていることもご承知ください。

気に入らないステータスもあると思いますが、独断と偏見、そしてWikiで確認した少ない知識で行っているということを承知いただけたら幸いです。

・高町なのは

選ばれた少女

STR：6

CON：6

SIZ：9

DEX：5

APP：15

POW：18

INT：16

EDU：5

SAN値：82

強迫性障害（魔法の上達）

自分が誇れる技能である魔法が上達しなければまた孤独になるという恐怖で魔法の訓練をしている。その負荷は徐々に積み重なってきている。

孤独恐怖症（軽度）

一家離散の危機にあったこともあつて今はまだ軽度の症状が見られる。

・フエイト・T・ハラオウン
造られし少女

STR : 8 CON : 8 SIZ : 10 DEX : 8
APP : 16 POW : 16 INT : 16 EDU : 5
SAN値 : 59

境界性パーソナリティ障害

自分が造られた存在であるという事に強い不安を感じている。母からの拒絶による強い自己否定や自己嫌悪を持ち、一時期は自殺未満まで追い込まれていた。現在は快復の傾向にあるが、いつ発作が起きてもおかしくはない。

孤独恐怖症

求めていた母に捨てられたという経験から捨てられるのではないのか、捨てられたくないという恐怖が巣食っている。扱いを間違えれば依存される可能性が大きい。

・八神はやて

愛に飢える少女

STR : 4 CON : 5 SIZ : 8 DEX : 3
APP : 15 POW : 17 INT : 16 EDU : 6
SAN値 : 61

孤独恐怖症(重度)

父と母を目の前で亡くした事によって強い孤独を感じるようになった。自分以外誰もいない状態になれば体が震える症状も出ている。現在お世話になっている灯頼一家には心の底から感謝と親愛を持っているが、自分だけ血の繋がりが無いという事実には強い孤独感を覚えている。現在精神科医である灯頼母から治療を受けている。

久藤信也

事件の愛され子／転生した幼子／生ける魔導書／無貌のおもちや
／平穩の狂者

STR : 12 CON : 12 SIZ : 10 DEX : 13

APP : 13
SAN値 : 0
POW : 26
INT : 16
EDU : 30
ありすぎてかくのめんどい (・ω・)

本編

保育園児1

なんで、またこんなことになったのか。

自分の周りで子供たちがわいわいと賑わっている中、自分だけこっそりため息を吐く。こっそりしたとは言えさすがに周りとは違う反応をしているのは目立つのか年上の女性からどうしたの？と声をかけられ、何でもないです大丈夫ですと適当にごまかす。まあさすがに言葉遣い的な意味で怪しいから訝しげな表情をするが、すぐにお友達と遊びましようねくとにぎやかな中へと連れて行こうとする。

勘弁してくれ。なんでまたこんなことになるんだよ。確かに2回アラサーも行かずに死んじやったけどさ。なんでまた保育園児から人生が始まるんだよ。

そう。なぜか俺は今3度目の人生を始めているところだ。理由？俺が知りたいわ。確かに死んでからこういったことが起きたけど、死んでからよくある神様転生なんてものはなかったし、気が付いたら前世の記憶をハッキリと明瞭に覚えて子供になっていたつてのが前回と今回だ。今回はどうなるかわからないが、前世は本当に最悪の一言だった。

死んで気が付けば子供になっている。これだけで正気が失いそうになるつてのに、その世界は最悪の一言に限る世界だった。

クトゥルフ神話。ラヴクラフトが作り出した宇宙的恐怖のホラー小説。テーブルトークRPGとして一躍有名となったその作品に出てくる、あるはずのない神話的存在が2度目の人生で存在していた。初めて神話的存在に気付いたのは小学生となったころだったか。ある授業にてアメリカのある都市についてを聞くことがあったのだが、その都市の名前が、アーカムだった。

アーカムとはラヴクラフトが作り出した仮想都市であり、そこにはあらゆる書物が収められていると名高いミスカトニック大学もあったのだ。

俺は前世の記憶をはっきりと明瞭に覚えている。授業であると言われた場所が架空上の存在であるということをはっきりと覚えていた俺は、まあ混乱した。混乱して、困惑して、そして、発狂した。

俺はクトウルフ神話はTRPGから知って興味が出たにわか勢でもあるけど、KPもすることがあつた俺は一通り書いてあることは目を通している。普通ならそれでおしまいなんだが、なぜか俺はその読んだ部分をハッキリと覚えているのだ。

何が必要でどんな邪神がいるのか、どんなクリーチャーがいてどんな呪文があるのかもはっきりと思い出せる状態にあつた俺は正気に戻ってもすぐに発狂寸前まで精神が弱ってしまった。

それからだろう。他の人から見たら異常だと思われるほどに辺りを警戒していた。怪しい噂のあつた家やトンネルへの肝試しなんて絶対に行かなかつたし、初台駅には必要な時以外では絶対に行かなかつた。青山霊園にも絶対に行こうとしなかつた。研究所なんかも最低限だけで絶対に行こうとは思つてもいなかつた。

けど、そんなことをしてもまるで嘲笑うかのように、それこそ裏でナイアルラホテプが手を引いているんじゃないのかと疑いたくなるほどに神話的事象に巻き込まれていった。中には逃げられない状況だったり逃げれば世界が終わつてもおかしくなかつたようなものもあつたからホントヤバかつた。

しかもそれが中学の時からわりとシヤレにならない頻度で起きていたから、もう大学に入ってから嫌だと叫びたかつた。というか叫んだ。それほど神話的事象が起きていたんだから、もういつ発狂してもおかしくなかつた。

だって呪文とか二けた覚えたんだぞ。黄金の蜂蜜酒の作り方も覚えだし、魔力を貯める呪文だって覚えざるを得ない状況で覚えたことだつてあつた。

出会った神話生物は深き者から始まり、仔山羊に亡霊、イゴローナク、シヨゴス、クアチルト、他もあげればきりが無いほど遭遇してしまっている。もうクリーチャーレベルなら正気を失うほどでもないと言いつけるほどに出会っている気がする。

だって中学1年の時に遠足で行った島で深き者どもと遭遇したんだぞ。女子生徒何人か攫われてマジでR―18になりかけていたんだぞ！先生含めた生徒一丸となって女子生徒を助けられたからよかったけど、今思えばあれが神話的事象に巻き込まれることになったんだろうなあ。

次は家族旅行で行った先に狂信者がいるし、異空間に連れてかれるわ、学校の催しで邪神を降臨しようとする奴が出たし、友達が持ってきた本がどこから手に入れてきたのかグラークの黙示録だったり狂信者が手に入れようと付け狙っていた屍食教典儀の写本だったり、もう本当になにか憑いているんじゃないかと叫ぶほど事件に巻き込まれ続けていた。事件に首を突っ込んでいるんじゃないかと、事件が尻尾を振ってこつちに向かってきているんじゃないかと思ったほどだ。

中学高校と、ホント学校の催しでどつかにいくのは休もうかと本気で思ったぐらいで、実際にどこかしらに行ったときに事件に友達と巻き込まれたりとふざけんなど言いたくなるようなことがてんこ盛りだった。

特にひどかったのは中学3年のときだった。課外活動の一環で片田舎に泊まりで行ったときに姑獲鳥の事件に巻き込まれたときだった。その村の子供たちが原因不明の熱病にうなされ、数人が死亡したという事件があった。熱病に侵されている子供たちに共通して服に血のようなものがついていてという話があったのだが、友達にこの血のようなものがつけられ、熱病に侵されたのだ。

このままだと友達が死んでしまうということで、授業そっちのけで原因を調べたことがあった。なんとか原因を発見して退治することができたけど、頑張りも意味を成せず、退治するのが間に合わずにそいつは死んでしまった。

そのあと学校側や村の管理に問題があると騒ぎになり、その後泊まり込みで行う課外活動は無くなったという話を聞いたけど、それよりいわくつきの場所で活動させるのを止めろと俺は言いたかった。

そう考えると高校はまだマシだった。大怪我をすることはあっても死んだ人は誰もいなかったんだから。と言っても規模は中々に最

悪と言えるものになってきていたんだから喜ばしいものじゃないんだが。というか1人の古今東西の怪しい品を集めるといのが趣味のバカが全体の半分を占めるほどなんだが。なんであんな稀覯本の写本を何度も手に入れられるんだよ。写本と言っても稀覯本と言ってもいいようなモノすらあつたときがあつたんだから。

持つてゐることはどうでもいい。いやどうでもよくはないけど、それに俺を巻き込むなど声を大にして言いたかった。というかそんなものを持つてくるなど何度も本気で説得した。けど収集癖は治ることがなく、結局死にかけるまで集め続けていてそれに関する事件に否応なく巻き込まれていた。

けどネクロノミコンの写本とかどこで手に入れたんだあの野郎は。どういった伝手をたどつていけばあんなふざけたものを手に入れられるんだよホントに！

……とにかく、あのバカはネクロノミコンの写本で死にかけて以来は集めることはなくなったけど、それまでは俺に見せてはヤバいことが起こることがあつたつてのに懲りずに集めてきやがったから何度縁を切ろうと思つたことか。

その中で本当に嫌だつたのは事件解決のために本を読まざるを得なくなったことだ。退散の呪文が必要だつたときとかもう死んだと思つた。もう2度と外なる神を相手にしたくない。盲目白痴の王の召喚を止めるなんてもうごめんだ。

そんなことがあつても時が過ぎるのは止められず、気がつけば大学入試の時期がくる。だというのにどこぞのバカがテストの問題を見るがために未来に行こうとして猟犬に見つかり、なぜか俺も含めて追いかけて回されていた。なんとか攻撃を食らわずに退散させることに成功したけど、あるときほどあのバカを殺したいと思つたことはない。

そして、なんとか大学に合格して入学してもナイアルラホテプが俺を見てゐるんじゃないのかと嘆きたくなるほどに事件が勃発してゐた。

大学の天文部が秋の終わりに神格を招来しようとしたり、カウンセ

ラーの無形の落とし子と対決したり、大学教授がシヨゴスを作り出したり、ドリームランドで作り出した化け物を倒したりと。

もう自宅に引き込もって一生外に出たくないマジで思ったほどキツイ大学生活だった。

そんな生活を送っていたからか、大学卒業してから精神安定剤がなかったら結構ヤバイときがあった。内定が決まって大学を卒業してからも度々事件に巻き込まれ、職を失ったのは1度や2度ではない。むしろあんなに事件に巻き込まれているのによく正気を保っていられるなど自分で感心するほどの事件に巻き込まれていた。

その中で未だにトラウマとして恐怖を感じているものは多少ある。いないとわかっているのにそれに近いものを見た瞬間魔術をぶっぱなして壊すかただひたすらに逃げるかを繰り返しているほどだ。

トラウマはどうあがいても治らないものだ。変なものに恐怖したり性的思考をしない分マシだとは思うが。

実際包丁やカッターといった刃物より窓の外にはびりついている玉虫色のナニカのほうが怖いに……。

「ぎゃあああああああああああああああ!!」

「ちよ、なに、どうしたの!?!」

「シヨゴ、シヨゴスがああああああああああ!!」

「シヨゴ? つて、あれタمامシ!?! なんであんなにたくさんここに!?!」

「うわきもっ!」

「キヤー!」

「うわすげえ!」

「すいません先生! 近くの昆虫店でタمامシの入った籠が壊れて逃げ出したと伝え忘れていました!」

「なんでもっと早く言ってくれないんですか! 子供たちが不安になるでしょう!」

「す、すいません! 今すぐ店の人に連絡をして回収してもらいます!」

もう嫌だ! なんか言ってるけどシヨゴスを相手にするのはもう嫌だ!

「お、おちつきやしんやくん!」

「放せはやて！あれから逃げなきや死んじまう！」

もう、あんなやつを相手にするのは嫌なんだアアアアアアア!!

結局、俺のパニックが辺りに広がり、全員が落ち着くのに1時間近くかかったのは本当に申し訳ないことをしたと思う。

保育園児2

突然だが、俺の朝はそれなりに早い。前世からの習慣と言うか、むしろ前世からの強迫観念と言うか体力作りや知識を整理している。

朝6時には起きて30分ぐらいランニング。子供の身体だからそこまでキツく出来ないのが怖いのが、下手に無理をして身体を壊すことはしたくない。何か起きた時に万全の状態じゃないと死んじゃうじゃないか。

それはともかく、ランニングを終えたら汗を流し、そのまま都市伝説について調べる。え？巻き込まれたくないんじゃないのかって？巻き込まれたくないから調べているんだよバカヤロウ。

そして調べているときに朝食の時間となつて朝食を食べる。ある程度時間が経ったら隣に住んでいる(肉体的に)同い年の子供と一緒に保育園に行く。そこで普通の、本当に普通の本を読んで時間を過ごし、時々先生の手によって子供たちの相手をさせられる。そして家に帰っては誕生日に買ってもらった純金属に魔力を保存する呪文を唱える。この呪文は純金属に魔力を保存していく呪文で、前世でも嫌なことに頼りになった呪文だ。そしてそれを終えてから飯風呂寝るの三連コンボ。順番は日によって変わることはあるが基本的にこの順番だったりする。

休日も基本的にこれから変化はない。通つてる空手道場で鍛えて、魔力を貯めて、都市伝説を探す。基本的にこの繰り返しなんだが、最近になってその繰り返しも変わってしまった。

「なあ、しんや。いっしょにあそぼうや」

背中に張り付いてはそうゴネル関西弁の幼い少女。名を八神はやて。隣に住んでいた両親の友達の子。両親が仲が良かったから俺と言う意識が出てきてからの付き合い、と言っても2年程度なんだが、数ヶ月前にはやての両親が事故で亡くなり、今は俺のところまで預かるという状態だ。

両親が死に、駆け落ちだったために親族からは絶縁状態にあった八神家での親の死は、足が不自由になりつつある娘のはやての親権をど

うするかでかなりもめていたらしい。

そしてその中で名乗りを上げたのが、イギリスで働いているグレアムなんとかと言う人らしい。そのグレアムとかいう人が親権を得ることになったのだが、彼はイギリスにおり、仕事の関係上どうしても日本に来ることができないらしいのだ。

重要な書類については輸送でしか無理だと言う状態にあるらしく、このままではイギリスに行くか日本で孤独に生きるかのどちらかになるしかなかった。

そんな少女を引き取ったのが、家の両親だ。まあだから八神家のドロドロした事情について知っているのだが、その内容を息子の前で愚痴るのはどうなのだろうか。おかげで知りたくもない事情を知ってしまったじゃないか。

そして始まったはやてとの生活。最初の頃は両親の死が受け止めきれずによそ猫のごとく静かだったが、最近やっと立ち直ってきたのか自分を出すようになった。

それで、一応部屋は空いているんだがまだ5歳の子供だということから同じ部屋で寝ている。つまり結構な時間を共にする事になったのだ。

これに関して、結構マズイ。儀式のために個室が欲しいといってわがままを通して手にいれた部屋だと言うのに、このままだと儀式が出来ない。というかここ数週間魔力を保存出来ていないのだ。

「今忙しい」

「どこがなん？ いつつもからてしてるか、てつにむかってなんかゆうてるだけやん」

「後で相手してやる。本でも読んでろ」

「ええ〜」

文句をいいながら身体を揺らし、けど相手にされないので理解したのか俺の背中から離れて本棚に向かっていく。

俺の部屋の本棚はいわゆるオカルト本が多い。都市伝説を探ると題している怪しい雑誌や世界中の神話、伝承が書かれている本を集めている。

理由？んなもんそこにいかないようにするために決まってる。なんで危険のある場所に好き好んで行くようなことをしなきゃいけないんだ。

しかも狂いそうなことにクトウルフ神話の影がちらほらと見かけるのだ。アーカムやミスカトニック大学は無かつたから安心したのに、どうも覚えのある異形の化け物を見かけるようなことがあるとか噂が立っていることが時々あるのだ。

魔術が使えることを鑑みるに、おそらく神格やグレートオールドワンは存在しているのだろう。

そう考えるとそれに連なる化け物どももそいつを崇拜している狂信者たちも存在していると考えるのが妥当だろう。さらにエイボンの書やネクロノミコンといった魔導書も存在しているもおかしくないこの世界で、前世であんなことがあったのに安心して一生を終えることができるか？出来るわけがない。

あんなものは焼いて世の中から消すしかないんだ。そうしないとあれを追ってくる狂信者どもや化け物どもと殺し合いをするはめになるんだくそぶぎけんなよあいつらなんでミルゴやムーンビーストや星の精やシヨゴスや深きものどもがいるような場所にいくんだつれてくんだ対処させるんだ俺を巻き込むんじやねえよあいつら死ぬしねしねしねしねしねしねしね

「しんや？どうしたん？」

ふと背中に重みと温かみを感じ、耳のすぐ近くではやての声が聞こえた。それと同時に思考に集中していた頭が現実に戻される。

「ちよ、てーてえけがしてるやん！」

その声に反応するかのようじんわりとした痛みが手から感じ、確認すると金属を強く握りしめすぎたせいかな角を握っていた部分から血が流れていた。

「ちよっとまっててや！いまばんそうこうをさがしてくる！」

そう言っってはやては不自由な足を一生懸命動かして部屋を出ていく。ちようどいいからはやてがない間に新しい金属に魔力を貯めていく。魔力が無くなつていく、全身から何かが抜けていく感覚に襲

われ手に持った金属が冷たいナニカを出しながら淡く光る。それを今までの分を入れている木箱に入れてベッドの下に入れておく。

「ばんそうこうもってきたで！」

そこまでを終わらせて一息つくど救急箱を持ってきたはやてが部屋に入り、無理やり俺の手を取って怪我をした部分に拙いながらに貼っついていこうとする。

「いい。これぐらい大丈夫だ」

イゴロナクの手に噛まれたわけじゃなく、グラークの棘に刺されたわけでもない、ただ皮膚を少し突き破った程度なんだ。別に放っておけば問題なく回復するんだ。

と思っても、目の前の少女はそれを許す気はないのかしつかりと俺の手を持って絆創膏を張り付ける。

「あかん！けがはちゃんとなおさなあかん！」

どこか必死な表情に、おそらく両親の事故死を思い起こしているんだろう。若干血液恐怖症ヘマトフォビアを患っているようにも見える。実際に見ていないはずなのに、これが子供の想像力の弊害とでもいうんだろうか。

「ぜったいにけがはしたらあかん！わかった!？」

「はいはいわかったわかった」

「わかったならええわ」

やや適当に返したにもかかわらず、それに満足げに頷いてはやては俺の背中にのしかかる。いくら子供とは言えこつちも体格的にきついことは変わらないんだが、まあ子供のやることだ。多少は目を瞑ろう。

しかし、なんでこうも背中にのしかかるんだろうかこの子は。ヘマトフォビアモノフォビアを患っている可能性があるし、もしかしたら軽度の独居恐怖症モノフォビアを患っている可能性がある。こりや母さんか父さん、もしくは行きつけの医者にも伝えた方がいいかもしれないな。

けど、こうも引っ付かれるとやりたいことも出来ないのも事実だ。どうも最近満足に身体を鍛えていないし、魔力タンクを作ることままならない。やはりモノフォビアを治すしかないか。じやないと俺

保育園児3

「大丈夫か、はやて」

今、俺は病院にいる。別に俺がやらかして入院しているわけじゃない。神話的事象に巻き込まれて大怪我を負ってここにいるわけじゃない。決してない。ないっつらない。

ここにいるのは、はやての足の病が進行したからそれに関する検査入院をするということ、その病室に来ている。

「うん。大丈夫だよ。別にこれが初めてじゃないんやから何も心配いらへんよ。しんやも心配性やなく」

朗らかにそう笑うはやて。確かに心配したことは事実だが、そこまです心配したつもりはない。心配したのは、この病院は神話的事象を引き起こしうるのかどうかの心配だ。

病院ってのはどうしても悪いものをつけてくる患者が多い。それが怪我だけならいいのだが、中には呪いを持って病院に来るようなカスがいることも事実だ。実際に俺は肝試しに行つて呪われていたバカを知っている。正直そいつは知り合いでもなくどうでもいい、というかそのまま死ねばいいと思つていたから放つておこうと思つていたのだが、そいつの行つた場所がそうも言つてられない場所だったのだ。

どうもそこは疫病を司る神を祀つていた神社で、そいつはそこにいつて荒らしまわつたカス集団の1人らしい。そんで荒らした結果その呪いがこいつにかかり、その呪いが伝染しているということだった。

それを聞いた瞬間、俺はこいつが死んでから動こうかなと思つた。だがそうすると他に入院している人たちが危なくなるということ、なんでこのカスの尻拭いをせにやいかんのだという思いがありながら、けど友達が入院しているから仕方なくその神の怒りを治めに奔走した。何とか解決した後でそいつら全員器物損壊で捕まつてスッキリしたからよかつたけど。

話がそれた。まあそんな風に、害をまき散らすクソツタレでも病院

にくるんだ。それで死にかけた身としては警戒するのは仕方ないだろう。もうそんなクソツタレを救うようなことをする気は全くないんだから。

「しんや？ どうしたん？」

「……なんでもない」

気が付けばはやてが心配そうに俺を見つめていた。急に何も言わなくなったことを疑問に思ったんだろう。

まあ、あんなことが多くはない。この周辺にそういったものを祀っている神社や寺もない。変な噂が立っている月村という存在が気になるが、あそこは屋敷だ。あそこで儀式を行っているとかじやない限り、おそらく病院内は大丈夫ではあると思う。

「……母さんのところに戻る」

「え〜！ もつとここにおつてえなあ〜！」

しっかりと服を握り、俺から離れたくないと言い張るはやて。やはり、両親の死が1人になる恐怖を怖がっている。一応両親には伝えてはいるが、まだ独居恐怖症モノフォビアは治っていないんだろう。

「大丈夫だ。大丈夫。また明日くる」

「でも〜！」

「はやて、大丈夫だ」

そう言いながらはやての頭に手を置く。人つてのは不思議なことに人肌の温度を感じるとわずかでも安心感を覚える。はやてはまだ小学生にもなっていない、幼い子供だ。両親が早くに死んで、短い期間とはいえ甘える人がいなくなっていたんだ。なおさら人肌が恋しくなっても仕方がない。

「……うん」

納得がいかない、と言ったような表情になりつつ、でもしぶしぶと手を放してくれた。いい子だ、とそのまま頭を軽くなで、また明日と病室を出る。

はやての病室から出て母さんのいる診察室へ向かおうと動くと、タイミングが悪かったのか誰かとぶつかってしまい、そのまま廊下へと倒れてしまった。

「す、すまん。大丈夫か？」

ぶつかつた相手は申し訳なきそうに俺に手を差し出して来る。その人はおそらく高校生ぐらいの少年で、差し出されている手には小ささまざまなタコができてるのが見えた。

「大丈夫です」

差し出されている手を掴み、立ち上がる。ぶつかつてきた相手はすまなかつた、大丈夫か？と心配そうにしてくるがそこまで心配されるほどのことか？と思いつつ大丈夫だと答える。

最後に本当にすまなかつたとだけ言い残して去っていったが、何をそこまで急いでいたんだろうか。それにあの刺々しい物言いは、どこか既視感を覚えた。そう思いながら彼が来た方向を見ると、わずかにドアが開いた病室がそこにあつた。

彼はそこから出て来たんだろうか。少しばかり好奇心を感じながら、しかしその好奇心は身を滅ぼすことを知っている身としてそこを見たくないという気持ちと、そこで神話的事象を引き起こそうとしている可能性があるからそれを潰さなければならぬという気持ちがあつた。

普段なら病院1つが潰れようが気にはしないのだが、隣にははやてがいる。下手をすればはやてから俺に災害が来るかもしれない。憂いは断たなければならぬ。

周りに誰もいないことを確認し、病室の中に聞き耳を立てる。中は機械音以外に何も聞こえず、おそらく見舞いに来ている人は誰もいないであろうことを確認して中に入る。

中には病人、いや、怪我人であろう包帯を巻かれている男性が1人だけ、様々なチューブにつながれて横になっていた。心拍を確認する機械に点滴をうつチューブ、わずかに見える血の滲んだ包帯、そしていつ目を覚ますかわからない重体の意識。

おそらく、彼の親族だろう。なるほど。確かに親族がこのような状態ならば苛立っていてもおかしくはないだろう。だが、これで神話的事象を引き起こそうとしているわけではないことは分かつた。

「……………」

どうしてここまでしたのか、正直自分でもわからない。けど、覚えているのは男性の姿が前世の親友の姿とダブって見えたということだけだ。

気が付けば俺は『ヴールの印』を刻み、『治癒』の呪文を唱えていた。一言一言言葉を紡ぐ度に身体の中から抜けていく感覚を感じながら呪文を唱え続ける。そして呪文を唱え切り、全身から感じる気怠さと戦いながら病室を出る。

ずいぶんと気怠い。『治癒』の呪文を唱えたのもずいぶん久しぶりだ。数体のシヨゴスに囲まれて殺された時以来だから、かれこれ3年近くだろうか。魔術自体は魔力を貯めるために幾度となく使ってはいるが、ここまで魔力を使うのも久しぶりだ。

若干足どりが覚束ない気もするが、邪神を退散させた帰り道よりははるかにマシだ。そのまま診察室のある階まで行き、目的地である診察室を開けようとしたとき、ちょうど話が始まったのか母さんと医者 の話声か聞こえてくる。

「足の方はどうなんですか、先生？」

「……残念ながら、症状が進んでいるように見えます。このままだと松葉杖、あるいは車いすを使う生活になる可能性があります」

「そんな……！何とかならないんですか先生!？」

残酷な現実には、母さんは何とかしてくれと言わんばかりに縋り付く。けどどうしようもないのか、医者は母さんからの視線から逃げるように、自分の不甲斐なさを悔いるかのように顔をそらす。

「全力を尽くしています。ただ、前回は説明しました通り、彼女を苦しめている病気が何なのかは解明できていません。筋ジストロフィーというわけでもないことは事実です。確かに他の子たちと比べると筋肉が衰えてはいますが、普段激しい運動ができないことでの衰えです。で不自然な衰えではありません。かといって神経系のものでなく、本当に原因不明の症状としか言いようのないものなんです」

「ということとは……」

「はい。現状はやてちゃんの症状を治す手段も抑える手段も確立していません」

その言葉に、母さんは悔しそうに手を握りしめる。死んだ親友の形見なんだから、大切にしたいという気持ちがあるんだろう。けど、このままだとはやてが歩けなくなる。それが母さんには耐えられないんだろう。

「私たちも全力を持ってはやてちゃんを治す努力をします。いえ、絶対に治してみせます！ですので、時間を、どうかはやてちゃんを救う手段を探す時間をください……！」

必死な形相で、必死に声を絞り出してそう言って、医者らは頭を下げた。

嘘は、ないように思える。本当にはやてを救おうとしているというのが伝わる。

「……私からも、よろしくお願いします先生。どうかあの子を、親友の娘を、私たちの娘を救ってください……！」

……一応、あの足が治る方法がないことはない。『復活』の呪文を唱えればいい。身体の全ての異常を取り除いた状態で文字通り死者の魂をも復活させることのできる呪文だ。

だが、この呪文は気軽に使えるようなものじゃない。『復活』の呪文を使えば、その対象は1度塩と化合物となり果てる。つまり人間じゃなくなる。そこからもう1度『復活』の呪文を唱えることで初めて肉体と魂を復活させることができる。

けどこの呪文も万能じゃない。『復活』の呪文で復活した人間は、『復活』の呪文を真逆に唱えられたら再び塩と化合物に戻る。そこからの復活は、無理なのだ。それだけじゃない。そんなことはどうでもいい。それ以上に問題なのは人じゃなくなるということだ。

人間じゃなくなるということに、俺は恐怖を感じている。屍食教典儀では詳しいことは記載されていなかったが、『復活』の呪文で復活した人間が元通りの人間であるのか？人外となり果てたんだから、人を襲う化け物となってもおかしくない。

実際『復活』の呪文で復活した人間を相手にしたことがあったが、あれは不完全なものだった上に人に襲い掛かってきた。屍食教典儀を読み進めているうちにあれは塩と化合物の量が足りていないからあ

あなつたということがわかったが、それでもあんな姿になる可能性があるあるんだ。できることなら使いたくない。

けど、このまま症状が進行していき、最悪はやてが死に至るということになった場合は、『復活』の呪文を使うのも吝かではない。

もつとも、それで人を襲うようになったのなら、責任をもってそうなつたはやてを処理するが、な。

小学生Ⅰ

「はあ」

現在、俺はバスに乗っている。どっかに行っているというわけではなく、ただ学校に向かっているだけだ。

そう。学校だ。やつのことで小学校ではあるが学校に入学することができたのだ。足が不自由になって車いすになったはやてとともに。

長かった。小学校に行けるようになるのが地味に長かった。保育園では馴染むには精神年齢が低すぎてなじむことができず、不気味なものを見るような目で見られていたのも感じていた。おそらく小学校でもそうなるんだろうけど、保育園よりはマシだと信じた。

それに、今回俺が通う小学校は私立の小学校だ。無駄に精神年齢が高そうな小学校だから、公立の小学校よりはマシになるだろう。

ちなみにはやてと同じ小学校だ。俺がその小学校に行くといったら私も行く！と言い出し、本当に試験に合格して同じ私立の小学校に通うことになったのだ。まだモノフォビアが治っていないんだろう。そんな簡単に治る物でもないからしようがないが、はやく治さないと将来独り立ちするとき問題になるだろう。

ただ、問題なのはそこだけじゃない。はやての足が治っていないのだ。それどころか動かせるけど歩くことが困難なほどに症状が進行しているほどだ。

『治癒』の呪文を唱えても意味がない症状とか、いったい何の病だ。怪我だけでなく病すらも治す『治癒』の呪文ですら治せないのはいくらなんでも奇妙すぎる。まるで外から影響を与え続けているかのようを感じる。

嫌な予感しかしていない。まさか何かの儀式でも始まっているのか？と思ったが動けなくなるといふ症状以外にはやての身体に異常は見られない。どこかに印があるわけでもなく、肉体的にも変化があるわけでもない。深きものになってきているのかとも思ったが身体が動けなくなるということになるのはおかしい話だ。

はやてになにかしらの素養がある？もしくは儀式の生け贄にふさわしいなにかがある？だとすればなにも起きていない今のうちに○しておくか？

けど仮に素養があったとして原因を潰さないで結局は起きる。時間稼ぎと言う意味でも○すのもいいが、そうすることで原因を見つけないことができなくなるのはキツイ。どうしても時間が足りないという時以外に○すという手段を取るのは早計すぎるか？

「どうしたん？なんか怖い顔しているで？」

車いすから身体をひねって俺の顔を覗き込むような体勢になっているはやてに、渋い顔になっていることにやっと自覚した俺は何でもないと言っただけ首を横に振る。

現状を判断するには材料が少なすぎる。どこの教団がどんな邪神を召喚しようとして、どこでどんな儀式を行っているのか分からない今軽率に事を動かすようなことをするわけにはいかない。

門の教団やダゴン秘密教団ならまだいい。何を召喚したいのか、なにを復活させたいのか分かりきっているからまだ対処できる。ハスターを召喚しようと思ってもアルデバランが見えない今、生け贄のための誘拐や召喚に関する準備をしようとする以外でなにかをすることは思えない。

旧神の印をつければ変わってくるんだろうけど、入手先も作り方もわからない。

使役できる存在を召喚して辺りを警戒するか？いや、それはできない。使役するにも存在がでかすぎる。下手をしなくても神話生物の存在は敵対している存在がいると警戒されることになる。そうなれば尻尾をつかむことすら難しくなる。

未来を見るか？いや、そんなことをすれば猟犬に見つかる。あのときは猟犬を閉じ込めることのできる魔法を使ってなんとかあったが、猟犬を閉じ込めるために誤差がコンマ0001以下の純金属の真球が必要になる。

あのときは運よく作ることができた奴がいたから何とかあったけど、あのレベルの真球を作り出すのは現状ほぼ不可能だろう。

……いや、待てよ。こうやってただ症状を進行させていくだけで満足するか？いや、そんなはずがない。そういった趣味嗜好じゃない限りこんなことをするはずがない。だったらどこかで監視をしているはずだ。

どうする？怪しい奴がいたら片っ端から消していくか？生け贄がどんな状態にあるか知るために、どこかで監視しているはずだ。

いや、規模がわからない以上安易に消すのはマズい。強硬策を取られたら最悪この街が終わる可能性がある。記憶を見る術がない以上、下手な手を打つわけにはいかない。

「ままならんな……」

「ん？なにかいった？」

「なにも」

せめてなんの呪いか、あるいはなんの儀式かだけでも判断できれば対処のしようがあるのに、なにもわからないのがキツイ。今は歩けない程度に症状が進行しているけど、いつか完全に動けなくなるだろう。下手をすれば内臓器官に不調が出るかもしれない。

原因だ。原因さえわかればそこから判断できる。仮に何かしらの儀式を目的としているなら、そしてどこかを根城としているなら最悪魔導書を奪って原因を○せばいい。

儀式をするなら、生贄は近くにいる状態じゃないと成功しない。まさか海外から呪いをかけているなんてことはまずないから、この街のどこかにいると考えていいだろう。どこかにいるはずなんだ。

けど、それがどこにあるのかが分からないのがキツイ。小学生となった今、搜索に時間をかけることは不可能だ。早く見つけて儀式を完成させる前に全部○さないと……。

「しんや？どこに行こうとしとるん？」

「え？」

はやての言葉が聞こえ、思考の渦に入っていた意識が現実へと戻される。気が付けば降りるべきバス停についており、慌てて降りることを伝えてはやてをバスから降ろしてもらおう。

「しんや、大丈夫なん？さつきから難しそうな顔しとるで？」

バスが発車し、エンジン音が小さくなったところで心配するようにはやては俺を見る。

「……大丈夫だ。考え事をしていただけだ」

「ホンマ？ホンマに大丈夫なん？」

「大丈夫だ。大丈夫だから」

しつこく大丈夫か、と聞いてくるはやて。降りるバス停に気が付かないほどなにかを考えていたんだから、どうかしたのかと聞きたくなるのはわかる。が、ここまで聞く程のことではないはずだ。なぜこんなにもしつこく聞くんだ？

まあ、今はそんなことを考えなくてもいいか。今は学校に向かうべき時間だ。ここで考えていても仕方ない。

車イスを押して学校に向かおうとすると、急に視線を感じた。感じるほうを見ると、そこには猫がこちらをジッと見つめているのが見えた。猫は俺と目が合うと、やや慌てたようにその場から去っていき、そのまま姿が見えなくなった。

……猫を使つて監視している？まさか呼び出す神はバースト神？いや、だが猫を使つたところで何にも情報を得ることはできないはず。ゾンビの目でも使っているのか？なら猫を酷使していることになってバースト神の怒りを買うことになる。

まさかそれが目的か？いや、けどバースト神の怒りで何をする気だ？町を破壊か？だとしても個人のしたこと町が破壊されることはあるのか？

ゾンビを使っている、ということはナイハーゴ写本を使つたものか？あれはゾンビに関する魔導書だ。その気になれば動物をゾンビにして目を使うことも不可能じゃないだろう。

けどその先が見えねえ。仮に目的がゾンビを増やすことだとしても、なぜゾンビを増やす？生け贄か？なんの？

ゾンビ、死体で思い起こすのは屍食鬼か。屍食鬼は死骸を食らう異形だ。屍食鬼を呼ぶための生け贄を集めているのか？だとしてもなんのために屍食鬼を集める？

いや、目的は屍食鬼じゃないかもしれない。屍食鬼が必要だと勘違

いして呼び出そうとしている可能性がある。

屍食鬼で思い起こすのは、屍食教典儀だ。屍食教典儀に書かれている旧支配者は……ニヨグタとシユブニグラスだったか。

あんなものを呼び出して何をする気だ？いや、そういえばシユブニグラスは豊穰を司つてもいたか。まさかそのために招来させようとしているのか？

あくまで予想でしかないが、現状これが一番可能性としては高いか。しかしまたナイハーゴ写本ないし屍食教典儀の事件に巻き込まれるとはな……。

……前の時もそうだが、死体についての事件に巻き込まれるくらいでもあるのか俺は。邪神や旧支配者よりはマシだが、遭遇するのはもうごめんだ。廃校やいわくつきの土地ではその噂を利用してゾンビや亡霊を呼び出す儀式を行っていたり、儀式を行っていたからそういう噂が立っているときもあった。死んだ人を復活させようとゾンビにしたり、死体そのものに執着していた変態野郎もいた。何十人もの人間が行方不明、死亡して保管、使役されていたこともあったか。

そう考えたら今から行く学校はまだ安心できる。新しいし、墓地やいわくつきの土地を使っているわけでもないし、周辺にもそういう噂のある場所はない。私立の学校だから警備の方もかなり優秀だ。そう考えれば学校の中はまだ安心できる環境ではある。

今はまだ調べる必要があるか。行方不明の人間が増えてきていたら、怪しいところをしらみつぶしに探していくか。

そのために、あれを召喚、使役できるものを作らないとな。

小学生2

1年。学校に入ってから1年が経過した。学校自体は3回目であり、小学生ながらにしてかなりレベルの高い授業をしているのだが、あくまで小学生レベルだ。

かなり時間は経っているが2回大学を卒業してきた身としては小学生レベルなんてものは余裕だ。最低限の知識はあるし、今でも高校の復習はしている。学校で習う内容もバカにはできないものが多い。高校生レベルでも役に立つものはある。

そんな感じでこの1年は特に問題もなく過ごすことはできたのだが、この1年間で気になっていたのは、こつちを観察するように見てくる猫だ。

その猫は毎日いるわけではない。だがその猫は決まってはやてを観察するかのようじつと見つめているのだ。時々俺や親父、お袋辺りも見ているように思えたが、基本的にはやてを見ていると考えていだろう。

さて、あの猫はどうするか。儀式を行うにもあの猫が見ている時に儀式を行うのはマズいだろう。神話生物は神格クラス以外は対策はたてられるし、物理的に排除することも出来るものも多い。対策をたてられたらどうしようもない。

だからこそ初見で■す必要があるし、その準備をさせないことも重要だ。

幸い、俺は複数の神話生物の招来、使役させる方法を知っている。招来を知ってはいるが条件が厳しいもの、そもそも使役できないものもいるから数は限られてはいるが数体は何度か使役したことがある。油断や慢心さえしなければ大丈夫ではあるだろう。

だが、それらを使役、ないしは招来させるには準備が必要になる。その準備で何を使役させるのかを悟られればこちらが不利になるから内密に事を済ます必要がある。

それに、今回は念には念を入れて複数の神話生物を使役できるようにしておいた方がいいかもしれない。相手が何をしようとしている

のかわからない以上、単体のみを準備してそれで対処ができないということになる可能性も大いにある。それだけは避けなければならぬ。

だが、種類が増えればその分招来に必要な魔力も多くなる。俺の魔力はそこまで多くないから魔力を貯めたものを持ち運ぶ準備も必要だ。

ああ、そうだ。どうせ相手は原因不明の死になるんだ。精神力を奪っておいた方がいいか。精神力を奪うナイフを作れる準備もしておいた方がいいな。どうせ死ぬときに精神が狂うか狂わないかの違いだ。

それと、死体を処理する方法も準備しなくては。幸い死体の処理を進んでやるやつらを知っている。死体はそいつらに処理させればいいんだから、あとはそいつらを呼ぶ準備をすればいいか。

いや、待てよ。旧初台駅にいった方が早いかな？けどあそこにいるとは限らないか。……いや、青山霊園だ。あそこには赤い目が見えた、獣臭いという情報がネット上で流れていた。あそこにいけばほぼ間違いないからあいつらはいらるだろう。

問題なのは俺の話聞いてくれて、かつ協力してくれるかだ。前世では住処と蛇人間の儀式の阻止をしたからその借りとして色々手伝ってはくれたが、今世はまだ1度もあつていない。それにキミタケもいるかどうか怪しいものだ。また shield を相手にしないと会うことが出来ないなんて事になっているのなら会うことすら考えなければならぬ。銃持ち相手なんか2度としたくない。してたまるかクソが。

……いかな。まだどこのどいつを ■ すのか判断できていない今、とらぬ狸の皮算用をしている場合じゃねえ。

今は何が必要なのか、必要なものを揃えたあとでどうするのか、 ■ したあとの処理方法はどうかを考えるのかわ考えなければならぬ。

とりあえず、今は最低限あれを使役するための道具を作らなければならぬ。夜に行動することを考えて別のも使役する準備をしなければならぬか……。

だが、神話生物を使役するのは難しい。今から準備しようとしているものでも6時間の絶え間ない詠唱を続けなければ作り出すことはできないし、もうひとつの方の使役には魔力の籠ったナイフを準備しなけりやマズい。そのナイフを作るにも人を■す必要がある。

なにかを○すことになれば少なからず世の中が騒がれることになる。それを防ぐにも手間がかかるし、さすがにそんな手間のかかるものを作るぐらいなら他のものを準備した方が効率はいいだろう。

……いや、敵を■すもつと楽な方法があるか。相手に過去か未来を見せればいい。そうすりゃ運が良ければ猟犬が勝手に■してくれる。証拠も出ないし、出るとしてもこの世に存在しない物質だけだ。

だが、万が一を考えたら猟犬の利用はやめておいた方がいいか。下手をすればこつちに狙いを定めてくる可能性もある。真球が作れるならまだしも、そんなものを作れる伝もないし、コネもない。猟犬の利用は最終手段にしたほうがいいか。

魔力を貯めてある純金属もそろそろ所持するにも限界になってきているし、その前に純金属を買う金もない。誕生日の度にあれをねだってはいるが、その分も既に貯めている。もつと貯めないと不測の事態に対応できない。

準備しなければ、やつらは俺を簡単に■す。俺を簡単に■す事も出来るんだ。

準備しなければ。備えなければ。死んでしまう。

準備しなければ準備しなければ準備しなければ準備しなければ準備しなければ準備しなければ……。

「しんや?」

突然背後から声をかけられた。机の上に置いてある純金属を手にして座っていた椅子を蹴飛ばして声のした方を向くと、そこには驚いたような表情をしたはやてが車イスに乗っていた。

「ど、どないしたん?急に?」

「……………いや、なんでもない」

ため息を吐きながら純金属を机の上に置き、蹴飛ばした椅子を立てて座り直す。幸い椅子は壊れた様子もなく、蹴った足もそこまで痛み

を感じない。

だが、自分のものが壊れなかったことよりも、なにも起きていない日常はまだ続いていることに安心するよりも自分の警戒心が薄れてきているところに頭を抱える。

ダメだ。今回ははやてだったからよかったものの、これが神話生物だったら肉体的にか精神的にか、どちらかが死んでいた。もっと周りに気を張り巡らせないと、もつと周りを警戒しないと、またあの苦しみを味わうことになるんだ……。

「なんでもないって、あんな切羽詰まったような反応の仕方されたらこつちが不安になるやん。なんかあつたんやろ？私でよければ相談に乗るで？」

「大丈夫だ。まだ、大丈夫だ」

そうだ。はやての事を除けば何一つ問題はないんだ。いつも通りに辺りを警戒して、いつも通りに学んで、いつも通りに準備して、怪しいやつを調べて■していれば問題はないんだ。まだ、邪神の影は見えていない。大丈夫だ。まだ、大丈夫だ。

「……大丈夫ならええけど、ホンマにダメなときはちゃんと言ってや？私が力になるから」

「……ああ」

心配そうな表情をしながら、でも安心させようと笑みを浮かべるはやてに、日常にいることの安心感を感じて一息つく。

「……それで、なんのようだ？」

一息ついたあとで、はやてに話しかけてきたわけを聞く。別に話しかけてくること事態は珍しいことでもないが、呼び掛けてきたということは何かしらの用事があるから話しかけてきたんだろう。

「え？あ、えつとな、そろそろ検査入院するからその準備を手伝って欲しいなって思つて……。ダメかな？」

「……ああ、そうか。もうそんな時期か」

はやての足はまだ治ってはいない。むしろ症状が悪化してきている。入学した頃はまだ足は動かさせていたが、今じゃもう足を動かすことはできないほどに症状が進行している。

今日の検査入院の結果次第では学校も休学することになるかもしれないと、母さんは心配そうに言っていたことを思い出す。

「わかった。着替えと暇潰しのものを用意すればいいんだろう」

「うん。暇潰しのものは適当に見繕ってくれたらええで、着替えの用意だけ今は手伝って欲しいんよ」

足が動かせないから満足に準備もできない。慣れの部分もあるんだろうが、まだ車いすになって1年ぐらいいしか経っていない。1人で過ごしてきたのならまだしも、俺や母さん、父さんが一緒に世話をしているんだ。できない部分があってもおかしくはない。

「わかった。鞆に服を用意しておく。本は適当でいいだろう?」

「うん。それでお願いな」

それだけ言うとはやては部屋から出ていき、向かいの部屋へと入っていった。

あの部屋は検査入院が終わってからはやての部屋となる場所だ。もともと物置として使っていたのだが、そろそろ思春期と第二次性徴期になってくる。そういう意味ではそろそろ部屋を分けた方がいいんだろうということと急遽物置の片付けが始まった。

まあもともと棚や箆笥はそこにあつたからあとはベッドや机、服と細々したものを移動させるだけだからそこまで手間はかからない。

そういうことで、今頼まれたのは病院で使う服とはやての部屋となる場所に服を移動させることだ。

……そうか。はやてはこの部屋から出るのか。そうならば今まで出来なかつたことも出来るようになるか。

だが、部屋を分けたといつても防音性はそこまで高いものじゃない。呪文を唱えるものは聞こえてしまうこともあるか。

「……検査入院しているときに儀式をする必要があるか……」

となれば、今が儀式をする数少ないチャンスということか。なら、早くはやての服を用意してさっさと準備を済ませるか。

全ては、平穏な日常のために。

小学生3

「……………」

彼の手にはファイルがあった。紙も何も綴じられていない、薄いファイルを開いたり閉じたりと弄ぶように触っていた。

「……………」

時々ファイルに挟むのであろう真っ白な紙の束に手を伸ばしては触れる前に止め、戻す。さつきからそのようなことばかりしている。彼は迷っていた。自分の知識を紙媒体へ記し、万が一の時のためにも残しておくべきかを。

それが料理のレシピや日記などといったメモ書き程度に留まらなだけでなら迷うことなく書き記しただろう。だが、彼が紙を媒体として残そうとしているのはそんな程度のものではない。

神の知識。淘汰されるべき生物。そして、魔術。

日本、いや、世界の多くの人間がそんなもの存在するわけがないと一蹴するような、しかしその存在を知るものはいつまた非日常的なモノに襲われるのかと怯える毎日を送ることになってもおかしくはない知識を、記すのだ。

本来記憶とは忘れるものである。それが大切なことであっても嫌なことであっても、記憶は脳にとつてのストレスとなる場合が多い。だから脳は記憶を消す。自身を守るためにならどんなに大切であったとしてもその記憶を消していくのだ。

しかし、彼の持つ知識は消えることはない。前世において、もう既に消えかかっている自信を持つては言えないが前々世の記憶を死ぬその時まで持っていた。

それがどんなに楽しいことであっても、悲しいことであっても、憎たらしいものであっても、おそろしいことであっても、知っている限りの全ての記憶を持っていた。

今でもそうだ。前々世の記憶は既に消えかかっているが前世の記憶は全て覚えている。それこそパンを何枚食べたのか数えれば答えられるほどにはつきりと、親友が死んでいく時の恐怖に歪んだ顔と悲

鳴すらも鮮明に思い出せるほどに。

「っ……い」

その時のことを思い出したのか、顔から血の気が引いて真っ青になった。ファイルを投げ捨てて口に手を当てて必死に胃の中身を食道へ出さないように、必死になっていた。

「……はあ……はあ……」

息が荒くなる。浅く、早く、呼吸として成立しているのかすら怪しいほどに短い間隔で呼吸が行われている。

普通ならば気分が悪くなったり気持ち悪くなったり、最悪意識が遠退いてもおかしくはないのに、ずっとその呼吸を続けている。最低限のことすら困難になるほどに、^{前世}過去の出来事のダメージは大きかった。

^{前世}過去の失敗はほぼ自身の失敗だった。知識を理解せず、正否を判断することに戸惑いをかけた結果が、友の死へと繋がった。

これからはそんなことが起きてはならないのだ。脳内だけでは整理することはできてもそれに多くの時間を要することが多い。だから見比べることができるよう、いち早く判断できるように知識を書き記すことをしておかなければならないのだ。

しかし、それが会社のデータ程度ならば何も問題はない。今から記そうとしているのは存在を許すことができない、唾棄されるべき知識なのだ。

どうするか。本来ならこのような知識は記すべきではない。自分以外に存在すら赦されない脅威を、総てが終わる存在をなにかに記すなど、自らの首を絞めるようなもの。それを、自らの弱点とも言えるものを書き記すなど、常人のすることなどではない。

だが、同時に自分の力は自らを滅ぼすことすらあり得るほどのものばかり、いやそれしかないと言ってもいい。

それをいつ消えてもおかしくない頭のなかに留めておくことは、記憶を消す呪文が使われたときに自らを助けることに繋がるのだ。

だからこそ。ここでまだ鮮明に残っている今、知識を記すべきか否か。それを決めなくてはならない。

絶対などない、自らの首を絞める行為をするのか、あるかもわからない脅威に備えるのか。

「……………」

いや、違う。自分の知識は完全なものではない。もう臆気な部分もある前々世の知識を含め、今持っている知識が正しいとは限らないのだ。

呪文は間違いない。出来る限りの呪文は全て成功しているのだから。儀式もそうだ。神を降臨させるものや人を生け贄にするもの以外のほとんどを行って成功しているのだから。

問題はクリーチャーだ。今自分が呼び出せるもの、遭遇したものはほぼ間違いなく知識のものだと判断してもいいだろう。だが神格や接触するべきではない存在はそうであるのか分からない。

前々世と前世の違いがあったように、前世と今世でなにか違いがあってもおかしくない。だから知る必要がある。比べる必要がある。頭の中と記されている事を、ではない。

自分が知っている知識とこの世界の真実を比べるために、前々世と前世との記憶を混じらせてしまったときのようなことは起こってはならないのだ。

以前知識を混在させたそのときは、親友の死だった。生半可な知識しかなかったために、その知識と新しい知識を頭のなかでぐちゃぐちゃにしていたからあんなことになったんだ。

比べなければ、真実が見えない。真実が見えなければ、行動が遅れる。行動が遅れば、死ぬ。

イヤだ。あんな死に方はイヤだ。俺のせいであいつは死んだ。俺が混乱してなかったらあいつを助けられた。俺が行動できていれば玉虫色の物体に押し潰されなかった。

イヤだ。イヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだ死なせたくない死にたくないイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだ。

「……………なければ」

ぽつりと、無意識のうちにその言葉をつぶやく。次々と出てくるそ

小学生4

「おでかけしましょう」

唐突に、平日夕飯を食べているとき本当に唐突に母さんはそんなことを言いだした。

別に何かをしていたわけではない。テレビは食事中にはつけることはないし、俺と父さんは黙々と食べるタイプだから食事中はかなり静かなのだ。はやてがいたのならにぎやかにはなっただろうが、残念ながらはやては検査入院で家にはいない。別に口の中にもものを入れながら出ない限り食事中に話すことは何も言われないのだが、母さんも特に何かを言うでもなく食べる。

結果、食事中は食器が鳴る音以外はほぼ無音の静かな、厳かなっていう人も出てくるのではないのかと思うほどに静かな食事になるとがほとんどだ。

しかし、珍しいことに、それも何の脈絡もなく、唐突に母さんはそんなことを言いだしたのだ。俺はともかく、父さんも驚きでわずかに目を開いている。

「……突然どうしたんだ？」

「いえ。休憩時間に牧師をしていらっしやる名井さんが子供たちをつれて遊びに行っているのを見かけたのよ」

名井。その名前を聞いた瞬間、前世で出会った貌のない黒い神父を思い出す。

同時に、思い出したくもないあの大惨事を、思い出してしまった。大学生生活最後の1月に起きた、あの大事件を。

「最近この子とははやてちゃんを連れてどこかに行くってことをしていなかったなあって、その時ふと思ったの」

母さんの言葉なんて聞こえない。聞き取れない。聞くことができない。

「はやてちゃんも通院や検査入院が続いているし、いい気分転換になると思うの」

脳裏にはあのおぞましい日の記憶が、まるでビデオ再生をするかの

ように音も鮮明に写し出されていく。

「教会には1度ぐらい連れていってもいいんじゃないかしら？子供たちは見たことないでしょうし」

瞬間、目の前が真つ暗になった。いや、真つ暗になったと思っただけならそこにいるかのように目の前が記憶の景色へと変わっていった。

そこは荘厳で美しく、しかしどこか生理的な嫌悪感すら感じた教会だった。どこにそんなものがあるんだと聞かれてもそう感じるとしか言えない、そんな不気味で大きい教会の中だった。

その中で人が死に、人を殺し、人が殺されてもなお、その場にいるのが不思議なほどに自然体に笑みを浮かべる黒い男がいた。

戦争の真つ只中と言っても過言ではない、血と銃弾、そして魔術が行き交い、多くの人が死んでいった。そして、そんな地獄の中で、俺たちは神の降臨を防ぐことができた。

ただ1人となった奴は、投降しろという警察の言葉を聞いていないかのごとく穏やかな笑みを浮かべて、

神となり全てを虐殺をした。

虐殺。まさに、それは虐殺だった。人でない、異形の身となった神は、液体のようで刃物である手をもって警察を切り刻んでいた。まるで無邪気に虫を踏み潰す子供のように、邪気のこもった笑みを浮かべて。

その中で俺は生き残るために必死の抵抗を、使いたくもなかった魔術を駆使し続けた。後ろには友がいて、何度も助けてくれた刑事がいた。全てが終わるまで、意識が無くなるまで必死になって魔術を使い続けた。

そして数分もかからず、あの場にいた味方は全滅した。偶然なのか、それとも何か意図があったのか。神の考えることなど理解できないが、あの惨状を生き残ったのは俺と親身となっていた刑事、そして勇敢な友の3人だけだった。

全てが終わわり、緊張の糸がわずかに緩んだ瞬間、雪崩のごとく意識

配するような表情を崩さなかった。

「どうしたの？ なにか、怖いことでもあったの？」

「……なん、でもない」

「なんでもないって、そんな血が通ってなさそうな顔を見たらそんな風には思えない」

「なんでもない！」

自分の口から、自分でも意識していないほどに大きな声が出た。自分でも驚くほどの大きさだったんだ。父さんと母さんの驚きは相当なものなんだろう。2人とも目を見開いて俺を見ていた。

「……ごめん。でも、なんでもない。なんでもない。ただ、嫌なことを思い出していただけだ」

深呼吸をして落ち着かせようとして、しかし未だにあの恐怖が、ナイアルラホテテ神の言葉が泥のように体にこびりついているかのような、そんな感覚が拭いきれない。

そんな俺を察したのか、母さんが俺を抱き締め、優しく頭を撫でてくれた。

「大丈夫よ。ここには、お母さんとお父さん、あなたしかいない。怖いものなんてどこにもいないのよ。」

温かいご飯を食べて、温かいお風呂に入って、お母さんとお父さん、そしてはやてちゃん、あなたを守ってあげる。

だから、安心して。あなたは、今、大切に思われているの」

柔らかい匂いだった。鉄臭い血の臭いでもなく、泥が腐ったような気持ちの悪い臭いでもなく、生理的恐怖を覚える臭いでもない。

柔らかく、暖かく、安らぎのある、家族の匂いだった。

「……………」

気が付けば、頬に何か伝い落ちるのを感じた。同時に目を閉じれば、目尻から液体が流れ落ちていくのを感じる。

そして、それで流されるかのように恐怖に満ちた記憶が薄れていき、代わりに何でもない日常が脳裏に流れてきた。

いつも笑みを浮かべ、しかし厳しいときもある女性の、母さん。

厳しくもあり、しかし時に悪さも笑ってくれる優しい男性の、父さ

ん。

そして、新しい家族になった、原因不明の病にもめげずに笑顔をかべている少女の、はやて。

そうだ。これが、俺の日常だ。この人たちがいるこの時間こそが日常なんだ。

これが、俺の守るべきものだ。壊されてはならないものなんだ。

守らなければ。あのおぞましい化け物から、狂った人間から、現象から、噂から、神から、非日常から。

たとえどんな手を使ってでも。どんな手段を取っても。

どんなにこの手を血で染めることになっても。

小学生5

「え？どこに行きたいかって？」

病院の個室の中、はやては俺の言葉が理解できなかったのかキョトンとして俺の言った言葉を繰り返した。

今日は退院前日であり、はやての様子を見るために病院を見に来たついでに今度の休日はどこかに行こうという話が出ていたことを伝えたのだ。本人はそんな話が俺からでるとは思わなかったのかまだキョトンとしているが。

「ああ。いい気分転換になるだろうって、母さんがな。それで、どこに行きたい？俺は寂れた漁村とか嫌な噂のある山とかじゃなかったらどこでもいいんだが」

さすがに寂れた漁村には行ったことはないが、軽く調べただけでも相当に酷かった噂が流れていた場所だったのだ。誰があんな場所に好んでいくものか。行つてなるものか。

山に至つては冗談抜きで死にかけた。医者志望の友人がいなかったら間違ひなく死んでいただろう。もう2度と下調べもしていない山に行つてなるものか。

「うーん……。突然そんなこと言われてもなあ……」

「別に今決めなくてもいいぞ。今度と言っても1週間2週間後に行くわけじゃないからな」

これに関しては母さんの突然の発案だからな。休日とは言つても父さんたちも医者という工作上普段は急患にも対応できるようにしなければならぬ。そのため完全にフリーの休日を作るには前もって申請しておく必要があるぞうだ。

「先生にも事情を話して検査入院の日を考えてもらうこともできるだろう？それに、病は気からとも言ふし、気分転換も必要だと思うぞ」
「うーん。そうやなあ……」

うんうんと、唸るようにはやては腕を組んで考え始める。

まあ、確かに急なことには違ひない。とは言つても、物事は突然なことばかりだ。違いがあるのは前兆があつたが気付かなかつたか、前

兆すらないかの違いだけだ。今回は前者だろう。

「うーん。ウインドウショッピングはいつでもできるし、遊園地は私
が乗れるものが少ない。アミューズメントパークもそこまで目ぼし
いものは分からへんし、動物園は外やから移動が大変や。温泉もなん
かババ臭いし……」

ぶつぶつと、予想以上に行く場所を述べていることに驚きを感じな
がら真剣に考えているはやてを見て、ふと思う。

もし娘がいたならこんな気持ちだったんだろうか。

前々世はもうほとんど覚えてないが、それでも前々世と前世では俺
は結婚して子供を授かったことはなかった。そもそも結婚どころか
彼氏彼女の関係になったことすらなかったんじゃないだろうか。

そう考えると、俺の人生って本当に嫌なことしかなかったんだな。
別に結婚自体したいとは考えたことはなかったが、それでも彼女ぐら
いは欲しかったかもしれない。もっとも、そんな時間と暇はなかつた
んだが。

「……うん！決めた！」

ようやく、というほど時間も経っていないが、それでも結構な時間
考えていたはやては決めたのか、ニツコリとした笑みを浮かべて、
聞きたくない言葉
忌まわしい記憶を言葉にした。

「私水族館に行きたい！」

ピシリと、自分の中でなにかが固まるような感覚に陥った。そして
次の瞬間には、あの忌まわしい、記憶が、甦ってきた。

高校の修学旅行で、あの時水族館へ行つた。あの時は滅多に行かな
い水族館ということで、年甲斐もなくはしゃいでいた。だが、あの水
族館は、裏で手を引いている存在が、最悪の一言だった。

やつらは、『深きものども』は水族館に来た生徒を攫つていった。1
人ずつ、決して気づかれないように、しかし確実に奴らは生徒を攫つ
て行った。それに気が付いたのは、もう既に10人近くがいなくなつ
てからだった。

さすがにここまで多くの生徒がいなくなつてはおかしいと、それも

何人かは俺と同じ体験をしたこともある連中もいたこともあり、先生の目を盗んで水族館を探索した。そして、見た。見てしまった。

奴らは攫った生徒をナイフで突き刺し、魔力を奪っていた。苦しうに叫んでいたのに、それを見ていた俺たちには声すらも聞こえなかった。そういう魔術がかけられているのは目に見えていた。男子生徒はそうして魔力を奪い、女子生徒は子を孕ませるために、〇〇〇〇〇〇していた。既にもう数人がこと切れたかのように、服も纏わずただ身を汚した状態で倒れていた。必死に抵抗して、泣きさけんでいるのも見えた。

その光景が我慢できなかったのか、1人が不意打ち気味に奴らに襲い掛かり、大怪我を負いながらも結果的には勝利した。

だが、奴らはそれだけでは終わらなかった。奪取した魔力を使い、不完全ながらも『ダゴン』を召喚しようとしていたのだ。その召喚で何人もの死人が、その中には〇〇〇〇された生徒もいたが、出た。何人も食われ、踏まれ、握りつぶされた。けどやつの思いで召喚を不完全な状態で阻止したが、それでも被害はとんでもないものだった。

結局修学旅行は中止となって警察からの事情聴取、そして帰る羽目になった。

数日後、生徒を危険な目に遭わせた、死なせたということは何人もの先生が学校を辞めた。その中には生徒に親身になってくれる先生もいたが、だが、生徒に嫌われている先生は残っていた。それがのちに事件になったりもした。あれは、もう、思い出したくもない。

あんな思いをしたからか、誰もあの時のことを話そうとしなかったし、水族館には近づきもしなかった。もちろん俺もそうだった。

あんな目に、あった。

また、あそこに、行くのか？ いやだ、 いや だ い や

「……や、しんやっ。」

気が付けば、目の前に心配そうなはやての顔があった。いつの間にか俺の息は絶え絶えになり、爪痕がつくほどに手を強く握りしめていた。

ポツリと、はやては何やら諦めたかのような表情をしてそんなことを言った。

「……………え？」

水族館に、行かない？……………そう、か。そうか。よかった。あそこに行かなくてもいいのよ。

だが、それでもやつらへの対策は取らなければならないのは事実だろう。それが発揮するのが遅いか早いかの違いだろう。だが、早いよりは遅い方がいい。遅い方が、早いよりも対策はしやすくなる。そうだ。その方が、いいんだ。

「……………」

「そう、だ……………。対策だ。抵抗するために、対抗するために、奴らの、対策を、しなければ……………」

そうだ、みんなを守るために、対策しなくちゃ、いけないんだ、対策を、奴らの、全ての、対策を

1か月後、俺たちは岐阜にある有名な温泉へと向かい、特に問題もなく帰ることができた。強いて言うのなら、はやての足には何も、そう、痺れが取れたとも進行したとも言ったことが一切なく、けど本人は楽しそうにしていた。

そして、帰ってからニュースでとんでもないことを、知ってしまった。

決定していれば行っていたであろう水族館が、旅行に行く予定日に事故で半壊していたということが、流れていた。

詳しく調べてみれば、生き残った人たちは事故が起こる前に鱗を持った人間もどき、玉虫色のコールタールのようなものがいたという、噂が、出回っていた。

狂った男のそばにいる少女

え？しんや？しんやのことを聞きたい？なんでまた？まあ、私はええけど。

うーん。でも、しんやのことは私もよくわからんのよ。どうしても私主観になってまうけど、それでもええ？

しんやは、そうやね。一言で言ったら他人に興味がないわけのわからない人、かな？

しんやが他人と思ったら最低限の付き合い以外は滅多に関わろうとしない、基本的に興味ないみたいなお態度を取っとる。人と話すこと自体に忌避感すらあるような部分もあったりするけど、けど他人じゃないと思ったら本当によく面倒を見てくれるんよ。ぶつきらぼうなところもあるけど、でも足の悪うなった私の面倒も、今お世話になっとるしんやのお父さんとお母さんにも気遣いみたいなのをかけたる。それこそ小学生なのに大人みたいところが見えてくる、本当に不思議な人なんや。

そもそもの、しんやとの出会いは、覚えてへんのやけど本当に記憶のないころからやね。私のお父さんとお母さんと、しんやのお父さんとお母さんは本当に仲良しで、よく4人で遊びに出かけたりもしたらしいんや。そんなことやから、お互いの子供がおんなじ年に生まれたことにえらい喜んだみたいやで。

ああ、ごめんごめん。しんやのはなしやったね。ほんで、私の記憶にある中で一番古いんは、保育園の頃やね。

あの頃からしんやは何かに怯えるようにいつもビクビクしていたのを、今でも覚えとるわ。いつも周りを気にしていたからみんなからは弱虫だなんていわれとったけど、本人は全く気にしたことはなかつたな。むしろ勇敢なのはバカだなんて言ってたほどやったのを覚えとるわ。

でも、しんやは本当にいろんなことを知つとった。まるで見てきたように、学んできたかのようにいろんなことを知つとったし、なによりそれでもいろんなことを、主に都市伝説や噂をよく調べとった。今

でも、むしろ今の方がひどいと思えるほどに知識に貪欲に見える。まあ、私もその影響はないわけやなんやけどね。

まあ、そんな態度をしとったからガキ大将みたいなのにえらい目をつけられてたんよ。そいつ私にもえらいちよっかいをかけてきて、それでしんやはめんどくさそうやっただけど私をかばってくれた。今思えば、その時から私のことを家族みたいな感じに見ていたんとちゃうのかな。

それで、まあそんなしんやがえらい気に食わんかったみたいである日ついに掴みかかったことがあつたんよ。体格も向こうの方が大きかったんやけど、それも簡単に、それこそ慣れているみたいになし逆にな泣かしてたんよ。

そこからひと悶着あつたんやけど、まあ変なところで大人顔負けなことを言つてその場を収めていたのは、なんか、不思議な感じやつたなあ。だって、子供が大人を言い負かしてるんやで？こっそり見とつたけど、あれはちよっとかわいそうに見えたわ……。

まあ、そんな感じでしんやは小さいころから、その、異常な感じやつたわ。

たまにしんやの家に遊びに行つても、鉄に向かつてブツブツと何か言っているか、勉強しとるか、ネットや本で変な噂とかを調べてるか、空手の練習しとるかのどれかしはぼしてなかった。しんやのお父さんとお母さんも本当に子供っぽくないしんやにどう接すればいいのか分からへんみたいなのを私のお父さんとお母さんに話していたのを見たことがあるけど、ホンマ子供っぽくないって私も思った。

だって、誕生日とか記念のプレゼントに欲しかったものつてゲームとかおもちゃとかじゃなくて、鉄とか、なんやつたかな？しんきゅう？を欲しいって言つとつたつて聞いた。ゲームとか買おうとしたこともあつたみたいやけど、そんなのはいらなから鉄をくれつて言つてたみたいや。

でも、普段はわがままとか言わへんし、勉強もかなりできる。自分勝手なことばかりしているわけでもない、ときたま起こす奇行にさえ目を瞑れば本当にいい子なのが災いしてたんやろうな。異常やつて

分かってても、本当に自分の息子が好きなのか欲しいと言ったものを、しんきゆうは無理やったらしいけど鉄を買ってあげてた。しんやは喜んでたけど、しんやのお父さんとお母さんは心中複雑やったやろな。

結局あの日まで、私はしんやは変なやつや、としか思ってたなかったんや。あの日が、私の運命が変わった日が来るまでは。

私のお父さんとお母さんが死んで、その時から足が悪くなっていた私を引き取ろうとした親戚は誰もおらんかったんやけど、私のお父さんとお母さんの親友やったしんやの家に取り取られたんや。最初はお父さんとお母さんが死んだことに対して、足が動かなくなってきた不安もあって、悲しすぎて、もうどうにでもなれって、そう思ってたんや。やけど、引き取られてからしばらくしてからかな。私は夢を見たんや。

私の部屋にもなったしんやの部屋の中でしんやがなんかやってたんや。詳しいことは分からなかったんやけど、何かし終わったと思ったら、お父さんとお母さんが、目の前に来てくれたんや。お父さんとお母さんには触れられへんかったけど、でも先に死んだことを謝ってくれて、私のことを愛しているって、言ってくれたんや。

もう、泣いたわ。もう会えなくなっただと思ってたお父さんとお母さんに会えて、会話もできた。夢の中とは言え、そんなことができたことに、私は嬉しさも感じてたんよ。

そんで、気が付いたら朝になってた。しんやも日課のトレーニングに出て、部屋の中も寝た時と何ら変わりなかったからあれは嘘じやないんかって、思ったんや。やけど、そんな中しんやは、信じれば嘘じやなくなる、って言うてくれた。不思議なことに、しんやの言葉はすんなりと信じることができた。だから、私は夢でも、夢の中でお父さんとお母さんに会えたんやって、そう思うことにした。

それからかな。私はみんなと、しんやとしんやのお父さん、お母さんにベツタリになったんは。誰かと一緒にいるのは暖かい。みんなと一緒に食べるご飯は温かい。誰かが傍にいることは、あたたかいんやって、お父さんとお母さんが死んでから気づいた私は、しんやか、し

んやのお父さんとお母さんが傍におらへんかったら怖くて怖くて仕方なかった。

検査入院をするときになったら、夜中が怖くて仕方なかった。誰も傍におらへん、お父さんとお母さんが死んだときみたいで、しんやとしんやのお父さんとお母さんを呼びたくて仕方なかった。

けど、私の担当医になってくれた石田先生が本当に親身になってくれて、しんやのお母さんに甘えることができて、しんやのお父さんと会話することができて、しんやと一緒にいられるんやって、そうわかった時からその怖さも無くなった。

それからは、状況を観察できるぐらいには落ち着いてきた。お父さんとお母さんが死んで余裕がなくなっていた時とは違って、事実を事実として受け入れるぐらいには成長できたんやって、そう思ってる。

そこで、はじめはしんやを観察しとった。私の1番近くにおるんて、しんややったからそうなるのはごく自然なことや。

しんやは、そこまでしゃべるようなことはない。必要最低限しかしゃべらへんってわけやないけど、でも口数は多くはない。

そこで、かなりの勉強家や。ずっと前からやってる空手を真剣にやっとするし、毎日勉強もしとる。ちよつと勉強しとるところを見たことあるけど、漢字がいっぱい、アルファベットもよく出てくる本ばかりを読んで問題を解く、ということをしとった。中には辞書を片手にアルファベットですらないものを読んどったこともあったなあ。

けど、多分1番よく知っとなるのはオカルト関係やと思う。各地にあるさまざまな伝承や伝説、神話上の生物、さらには最近できたであろう噂話ですら網羅しとったのを聞いたときはなんでそんなものを知っとなるんやって呆れたこともあったわ。

けど、それだけやったら変な子供ってだけやったんやろうけど、傍で見ていた私にはそんなことは言えへんかった。勉強や空手をしとるしんやの表情は、真剣なんて言葉じゃ足りへんと感じるほどに、それこそそれをせえへんかったら死ぬと言わんばかりに必死にやってたし、今もやっとする。

そこで、何回かしんやがしばらく遅くまで帰ってこうへん時期が

あった。遅いってゆうても真つ暗になる前、大体6時前後ぐらいに帰ってくるようになった時期があったんや。その間暇やった私は、しんやの部屋を探ったことがある。あの日のことは、今でもよく覚えとる。

しんやの部屋は私が寝るためのベッド、まあそこそこの広さがあるとはいえベッド2つも置いたらさすがに狭くなるから2段ベッドなんやけど、と私としんやの机、しんやの本を収める本棚があるだけのシンプルなものや。しんやはよく隠し事をするようにこそそしとることが多い。やからちよつとしたイタズラ心というか、探求心というか、そんな感じで部屋を探ることをしたんや。

まず確認したのは、しんやの本棚やった。しんやはよく雑誌を、それも都市伝説とかを取り扱っている胡散臭い雑誌をよく買っては読んでた。今でもそれは続いとって、スクラップ帳に目ぼしいものを切り取っては張るといふことをしとった。棚には既にスクラップ帳が数冊並んでおり、まだスクラップ帳に張ってない分の雑誌も何冊か並んでいた。他にも大学入試のための本とか、気象云々って書いてる本、物理云々の本、医学書、果てにはドイツ語、中国語、ギリシヤ語、ラテン語に関する本までもがそこに並んでた。

節操無く学んでいるということは知つとったけど、ここまでは思つてなかつた私は呆れすら感じていた。だって、算数ドリルとか漢字ドリル、最近流行りの漫画とかが置いてあるのが普通のはずやろ？なのにドラマとかであるどこかの学者みたいなものばかりを置いてるのが、今更感はあるけど本当に変な子やなあって思つたわ。

次に調べたんはしんやが使っているベッドやった。まあベッドでなんかしているはずもなく、変なものほとんど見つからなかった。強いて言うなら、どこかの小さなカギぐらいやった。けど、それがパンドラの箱を開けることになる鍵だつてことを知つたのは、このすぐ後やった。

そして、最後に調べたのが、しんやの机で、この中に、とんでもないものがあつた。

しんやの机の下には誕生日とかでもらっていた鉄が段ボールの中

に納まつとつた。けど、しまっていた鉄はなんか妙に冷たく、それこそ冷気を発していると思うぐらいのものを感じた。中にあつたもの全部がそうやったから、段ボールを開けた瞬間凄まじい寒気が襲ってきたのを覚えとる。

不気味に思いながら、その段ボールを奥にしまつて、次に机の上や中を探し始めた。机の上に置きっぱなしのものはペンや定規といった筆記用具ぐらいで、あとは綺麗にしてあつた。1つを除いて引き出しの中は筆記用具やルーズリーフ、ファイルといったものがビツシリと詰め込まれただけで特に何かがあるようには思えなかつた。ファイルの中も今まで学んだことをまとめたものばかりで特に目ぼしいものはなかつた。けど、結構多かつたのは数学に関するもので、逆元だとかアフィンだとか書かれていたのを覚えている。理解なんてちつともできなかつたけど。

それで、机の中には1つだけ鍵のかかつた引き出しがあつた。試しにベッドで見つけた鍵を挿し込んだら、ぴつたりとそれで開くことができた。なんだか秘密を探っている探偵みたいやなつて思いながら引き出しの中を開けたら、その中には1冊のファイルがあつた。なかが透けて見えないようにか、黒い革のようなものを表につけ、それにはタイトルはおろか文字すらなく、けど引き出しの中にはそれだけしかなかつた。

湧き出る好奇心を抑えることなんてできず、その本を手にして中を見て、背筋に怖気が走つた。

ファイルは途中までしか書かれてなくて、でもなんて書いてあるのかは分からなかつた。最初のページの欄外に小文字のアルファベットと大文字のアルファベットが書かれていて、本文にはアルファベットがでたらめに書かれてあつた。ただそれだけのはずなのに、なぜか私はこの本に書かれていることを理解してはいけないと、そう本能が訴えかけてきた。

それからは迅速だつた。すぐさまファイルを閉じて引き出しの中へしまい、鍵をかけて鍵をもとあつた場所に隠した。

なんであるものがあるのか、どうしてあんなものを書いているの

か、しんやは一体何者なのか。しばらくの間そんな疑問が頭の中でグルグルと回ってたんや。

けど、普段のしんやを知っているから、きつとなにか意味のあることなんやって、そう思うことに、私はしたんや。

……ここまで言つといてあれやけど、私はしんやのことはほとんど分かってへんのや。

1度だけ、私が行きたいって行った場所に行こうって言ったたら、恐怖と悲哀と憤怒を混ぜ合わせたかのような、そんな複雑な表情をしとつたんや。

やから、すぐにそこには行かんで別のところに行こうって言ったら、しんやは心底ホツとしたような表情をしとつたわ。

なんであそこまで怖がっていたのか、私にはわからへん。今まで1度も行ったこともないのに、映画とかも怖がったこともないのにたまにしんやはそういった表情をすることがある。

けど、旅行が終わって家に帰って、ニュースを見たらしんやのあの恐怖は当たっていたんやって、心の底からゾツとしたわ。

水族館が原因不明の事故により死者多数。時期も旅行に行くのと全く同じだったから、もしあそこに行っていたらと思ったら、恐怖を覚えずにはいられなかった。

そして、それについて調べてたのかしんやがパソコンを見てたんやけど、突然恐怖に顔を青ざめさせて叫びだしたんや。しんやのお父さんが物理的に黙らせたんやけど、でもあの怖がりようは普段のしんやでは全く想像もできんかったぐらいやった。

何が書かれていたのか気になった私はしんやが見ていたページを見たんやけど、それはしんやがよく使っている掲示板やった。真偽はともかく噂を集めるならピツタリのそのページには、鱗のついた人間擬きだとか玉虫色のナニかだとか、そんなことが書かれていた気がするんやけど……。

多分、しんやは鱗のある人間擬きか、玉虫色のなにかに怯えたんやろうけど、なんでそんなものに怯えるのか私にはわからへん。

でも、あの怖がりようは、きつと嫌なことがあったんやろうことは

容易に想像できる。そう思えるぐらいに、あの怖がりようは普通じゃなかったわ。

……これぐらいやな。私が言えることは。けどなんでまたしんやのことについて聞きたかつたん？まさか、惚れたとかそんなんか？

……家族として知っている身から言うけど、しんやはやめといたほうがええと思うで。確かに表面上はええ感じに見えるけど、きつと本心に触れたら戻ってこれへんくなるかもしれへんで。

まあ、それでも言うなら応援ぐらいはするけどな。あ、もう帰らなあかん時間や。

ほな、またね。今度は君のことを教えてな、名井ちゃん！

あれ？そういえば、名井ちゃんって、誰やったつけ？どこで会ったんやったつけ？まあ、ええか。はよ家帰ってしんやと遊ぼっと。

無印0

「……はあ」

学校の屋上。通常ならば特別なことがない限り入ることすら許されないその場に、少女が3人いた。もちろん、彼女らは規則を破つてここに入ったのではない。この学校でも一部のみに限った話ではあるが、校則で入ることを許されている場所はある。

そんな場所で、少女らは昼食を食べていた。しかし、3人とも小学生らしく楽しげに食べているのではなく、3人が3人各々が様々な表情を浮かべていた。

その原因となるのがこの時間の前、すなわち4時限目の授業の事であつた。

その授業では様々な職業についての授業であつた。警察官、消防士、郵便局等事前に行きたい場所へ行つて体験学習をしていた彼らは、各々将来なりたいものについて楽しげに想像していたのだ。ただ1人の少年を除いて。

「……………」

その事を思い出していたのか、少女は静かに食べ物を口にいれ、しかし普段より遥かに遅く咀嚼する。そしてそれを飲み込んで、再びため息をついた。

少女、高町なのはは彼が、久藤信也が苦手だ。なにかを警戒するかのような鋭い視線に希望の欠片もない死んだ目、まるで大人のようにあり同時に駄々をこねる子供のようにでもあるちぐはぐな精神、誰も近づかせない刺々しい雰囲気、人ではないように思えて仕方ないのだ。

別になのはは彼の事が嫌いなのではない。けど、誰かと話すこともなく、むしろ誰かと接することを拒んでいるかのようにも見える彼の雰囲気が、視線が、たまに出る言葉が、とても重苦しく感じて苦手なのだ。

「ホントー！なんなのよあいつはー！」

暗いなのはとは対照的に、隣で怒りを体で表しながら弁当をかき込

むのは、なのはの親友の1人であり社長令嬢であるアリサ・バニングスだ。

彼女は彼を目の敵にしている。勉強でも運動でも成績がいい彼女だが、それでも彼には全く及ばないのだ。

彼は授業中別のことをしている。それこそ授業とは全く関係のないことをしているにもかかわらず、彼は常にテストでは満点を出しているのだ。それが気に入らなかつた彼女は一度知識で勝負を挑んだことがあつたが、経理関係以外では全く勝負にもならなかつたことがあつた。

それでわかつたことは彼がずっと先の、高校や大学、資格に関するものを勉強していたのだ。そんな先まで勉強していたにもかかわらず、昼前の授業で将来の夢について問われたとき、彼はこんなことを言つた。

『何事もない静かな人生を送りたい』

ただでさえ朝から様子がおかしかつたのに、将来についての授業にも関わらず、先生からの質問に対してそんな答えを返したのだ。

警察官や教師など、具体的な職業をみんなが言っている中でそんなことを言つたのだ。自分より成績がよく、必死に勉強しているにもかかわらずこんな答えを出した彼に、アリサは怒りを覚えていた。

「なんなのよあいつ！私より頭よくて、なのにあんなことしか言えないわけ!？」

アリサは父の会社を継ぐという夢を掲げている。まだ小学3年生であるにも関わらずその夢がどれほど困難なのかをある程度理解し、そして努力している彼女は十分に子供離れしていると言えるだろう。そんな彼女は、自分より頭のいい、高みにいるであろう彼が、逃げていると言つても過言ではない状態にあるのが許せなく感じていた。

「……………」

そんな中、怒る彼女に触れるわけでもなく、食も進まないのか静かに、ゆっくりと箸を進めている少女がいた。

「……………すずかちゃん、どうしたの？」

「え？あ、ううん。なんでもないよ。大丈夫だから」

なのはの心配に少女、すずかは慌てたように手を振って笑みを浮かべていた。しかし、常に周りに気を配っている、いや、周りの顔色をうかがっているなのはにはそれが痩せ我慢していることにすぐ気付いた。

すずかは彼の事が苦手なのか、彼を見ると顔を真っ青にするのだ。まるで化け物でも見たかのような、そんな風に見えるほどにすずかは彼に怯えのようなものを見せていた。

それについてアリサはなにかされたのかと思っていたのだが、彼からはくだらないと言わんばかりの返答をもらい、本人に聞いてもなにもされていまいと言われ、周りから聞いてもそのようなことが行われていた話は一切なかった。むしろ誰も彼も彼を恐れて近づこうとすらしらないのだ。そんな中で彼の情報を得ようとしたところで大したもののはほぼ入らなかった。

「……なにが、したいんだらうね」

ポツリと、ため息混じりに呟いたその言葉になのはどこか怯えも混じっているような、そんな気がした。

「知らないわよ！あんな根暗の考えていることなんて！」

それに気付かなかったのかアリサはガーツと叫びながら食べ終えた弁当箱をベンチへと叩きつけた。小気味いい音を立てた弁当箱にアリサはハツとしたように慌てて壊れていないかを確認しだし、その姿になのはとすずかはクスリと笑った。

アリサはそれに対して顔を赤くし、なにかを言おうとしたその時だった。

やや錆び付いた音をたてて扉が開いた。いきなり扉が開いたことに3人はビクリと身体を震わせてその扉へ視線を向ける。ここ、屋上は全児童生徒に解放されており、誰かがここに来ないなんて事はないから別段おかしいことではないのだ。だが、その扉を開いた人物を見て3人は驚きで目を見開くことになった。それほどに、その来た人物がおかしかったのだ。

「……久藤、くん？」

久藤信也。先程までの話の主格であり、学校きつての問題児とも言

われている少年がなにかを呟きながら、まるで幽鬼のように扉から現れた。

普段ならば昼休みの間ずっと図書館か情報処理室にこもっているはずの人物が室外に、ここにくるなんて事が滅多にないために3人は驚きを隠せないでいた。

「っ……いー」

ビクリと、その姿を確認したすすかは身体を震わせる。まるでおぞましいものを感じたかのような、在り得ないものを見たかのような、そんな怯え方をするすすか。

すすかは信也を見るたびにそんな反応をするのだ。まるで怯えるかのような反応に、しかしすすかと信也との間にはクラスメイトという以外には全くと言っていいほどに接点はないのだ。

だというのに、信也を見る度に怯えを見せるすすかに、アリサはすずかに対して何かしたんだと、そう思い信也を睨み付けた。

「……………」

しかし、信也はそんなことを気にしていないのか、それとも気付いてすらいないのか聞こえないギリギリの音量でなにかを呟きながらゆらゆらと歩き続けていた。

「……ねえ、どうしたの？」

いつもとは違う、さつきまでの暗い雰囲気とはうってかわってショックを受けているような、絶望しているような、そんな印象すら覚える信也の姿になのはは声をかける。

しかし、その声すら聞こえていないのか市内を見回し、未だになにかを呟き続けていた。そんな姿を見てアリサは堪えきれなくなっただけのか大声を上げて信也に近づいた。

「ちよつとー聞いているの!？」

肩を掴み、自分の方に向かせようとしたアリサはそれに成功したが、信也の顔を、目を見たアリサは身体が強張った。

その目は普段の死んだ目なんかではなく、暗くドロリと濁ったような、まるで深い闇を覗いているような、そんな錯覚に襲われたのだ。

肩を叩かれてやつと3人に気が付いた信也は、その目を呆然と、恐

怖すら感じて見ていたアリサに訝し気な表情をわずかに見せて重々しくその口を開いた。

「……なんだ？」

感情も何もない目をアリサに向ける。その目は先程までの恐怖を覚えるような目ではなく、普段の死んだ目に戻っていた。アリサもはそれに気が付いたのかハツとしたような表情を浮かべ、視線をキツクした。

「っ……な、なんでここにきたのよ？あんたがここに来ることなんてなかったじゃないの」

さっきの目がまだ頭に残っているせいも少し吃り気味にはなつたが、なめられたくなかつたアリサはそれでも普段通りに信也と接することができた。その事に気付かなかつたのか、それともどうでもいいのか信也はその死んだ目をアリサに向けてポツリと言葉を出した。

「……街を見に来た。ここは市内がよく見える」

そういうと信也はアリサに興味を失つたかのように再び視線を市内に戻した。

確かに、ここからは市内がよく見える。市内きつての小中高大がある学校であるここはそれ相応に建物も大きい。屋上にこれば市内を見回すこともできるのだ。

だが、アリサはそれだけを聞きたかつたわけではない。なぜ街を見る必要があつたのか。何がしたいのか。それが聞きたかつたのだ。

だが、アリサはそれができなかった。さっきの目に、ドロドロとした闇のような目の光を宿していた目に恐怖を覚えたために口を開くことができず、ただ信也の様子を見ることしかできなかった。

「……………」

少しの間市内を見回していた信也は、結局なにも見つけることができなかつたのか深く息を吐いて出入口へと歩いていった。

「……………」

「っ!？」

その際にも、なにか考えているのか呟きながら歩いていく信也に、すずかはまるで怯えたように肩を震わせて信也を凝視した。しかし

考えに没頭していた信也はそれに気づくこともなく、そのまま校舎内へと姿を消した。

「……………」

「すずかちゃん？どうしたの？」

「顔色悪いわよ？大丈夫なの？」

「大丈夫。大丈夫だから……………」

心配する2人に対して、同時に自分に言い聞かせるようにそう言う。だが、すずかの頭の中ではさつき信也が呟いていた言葉が繰り返されていた。

吸血鬼が、この街にいる。

わずかにしか聞こえなかったが、しかしすずかの耳には確かにその言葉が聞こえたのだった。

「……………どうして、それを……………」

どうやってそんな情報を手に入れたのか。どうしてそれを気にするのか。どうしてそれを信じているのか。

まさか、彼は、吸血鬼の存在を知っている？それを気にしているのは、誰かが血を摂取しているのを見たから？あの様子は、吸血鬼に怯えていた？それとも、家族の誰かが吸血鬼に襲われてた？

「……………すずか？」

「……………ううん。なんでもない」

自分の考えを振り払うかのように頭を振る。普通ならばあり得ないその考えを、しかしすずかはどうしても振り払うことができずに心配する親友たちを宥める。

けど、どうしてそれを信じているんだろう。どうしてあんなに恐怖しているんだろう。どうして怖がりながらも探せるんだろう。

そんな疑問を頭に残しつつ、次の授業の開始10分前のチャイムが鳴り始めたので3人は弁当箱を慌てながらしまい始めた。

ふと浮かび上がったその疑問は、真水に小さな泥が入ったかのように徐々に広がっていった。

薄くなっただけ見えなくなるが、決して消えることのない不純物として、少女の中に確実に残ったのだった。

無印1

「……………」

夢を見ていた。懐かしくもあり、同時に忌まわしい過去前世が映像のように目の前で流されていく。

それを見ていた俺は、それを夢であると理解できても抜け出せないでいた。普通ならば夢であると自覚出来た瞬間には眠りから覚めるはずなのに、醒めることはなかった。

それに戸惑いを感じながら、しかしそれでもなお流れ続けるそれを俺はただ見続けることしかできなかった。

まず映し出されたのは雑木林が茂る空間だった。学外学習という名目でこの地を訪れた俺たちは環境を守る人たちの仕事についてを学んでいた。

森の中だということ年甲斐もなく友人と秘密基地だのなんのだとはしゃいで、それを見つけた先生に怒られて、べつにいいいやねえかと文句を言つて、そして吹き出すように笑っていた。中学生だからこそ出来た、気分も高揚とした、この時だからこそ出来たことがあって本当に楽しかった。

次に映し出されたのは綺麗な海の見える空間だった。仲の良かった友人が男女ともに水着になり、砂浜や海の中で遊んでいた。

砂浜では大きな、無駄に立派な城が築き上げられ、男に女体として立派なものが出来上がっていた。それを見て俺を含めた全員が笑っていて、それをされた本人は恥ずかしかったのか顔を赤くして暴れていた。海ではライバルだと言い張っている2人が遠泳をしていた。2人ともいい勝負で、どちらも本気で泳いでいたせいかわりに砂場についたときには2人ともぐったりとして倒れていた。昼には素朴な、具の少ない焼きそばやカレーを文句を言いつつも笑みを浮かべてみんな食べていた。

次に映し出されたのは複数人が机に座ってカードを手握っている空間だった。それは部活動でボードゲームやカードゲームをしていたところだ。

手に握られていたカードには和風チックに書かれたゴキブリやカメムシ、ネズミが描かれており、それを伏せて隣や正面の人に対して何かを言いながら差し出していた。その空間では自分がやっているもののほかに1、3、6と書かれたカードにコインの絵が描かれたカード、8組の表になつているカードの山を何枚もとつては一喜一憂する友人。そこには、間違いなく普通の日常があつた。

そして、最後に映し出されたのは、俺の、知り合いと、小学生から高校生ぐらいのクラスメイトと、友達と、親友と、先生の、腕、足、胴、頭、死体、死体死体死体死体、その周りには魚面の鱗の生えた人間もどき蛇の頭部を持つ人もどき、巨大な雲のような姿をした異形、巨大な魚面の異形、ゼリーののような身体を持つ様々な器官を外に出している化け物、蛙のような頭部を持った毛の生えた化け物、他にも正気無くして見ていられないものどもが辺りを囲っている。そして、その中に立っている、笑みを浮かべている貌のない黒い男が、口を、開く。

また 会 おう

そして、男は、身体を、肥大化させて、液体を滴らせた触手をいくつも出し、この世のものとは思えない声を、笑い声を上げて、人を、他人人を、知り合いクラスメイト人を人を人を人を引き千切り叩き潰し踏み潰し握りつぶし磨り潰し破裂させていく。

いやだ。嫌だ。嘘だありえない現実じゃないこれは夢だ止めろやめてくれ死ぬな死なないでくれ殺さないでくれ！

まだ生きている親友を助けようとするが、身体は全く動かなかつた。ただ、恐怖目が、絶叫耳が、血の匂い臭いが、笑い声振動が脳に突き刺さるだけで、ただそれだけだった。そして触手はそのまま親友を掴んで引きちぎり、自分のすぐそばまで近づいた。しかしそのまま俺に触れることはなく、そのまま後ろへと通りすぎていった。

その時だけ、身体は動くようになった。慌ててその触手の行く先を見ると、その先には、かあさん家族が、とうさん家族が、はやく笑みを浮かべて俺を見て、触手が、足に絡まって、腕を抑えて、振り上げられて、そのまま

赤い花を3つ、床に咲かせた。

来るな、来るな！

逃げたくても、身体は動かない。呼吸だけが荒くなり、必死に足を動かそうとする。そして、下がろうとした右足が、スライドするかのよう動いた。だが、動いたと思えばまた動かなくなり、バランスを崩して背中から崩れ落ちた。

そして、それを絶好の機会と言わんばかりにズルズルと俺の知る顔をした化け物が近づいてくる。それから俺は逃げることができず、ただそれが来るのを待つことしかできなかった。

やめろ！俺は、死にたくない！まだ、生きていたいんだ！

そんな願いすら叶わないのか、それらは俺の足に、身体に、腕にしがみつく。触れられたところから鉄のような、しかし生温かさすら感じる臭いが鼻腔を刺す。ぬたあとした気持ち悪い感触と、決して放すことのないキツく握られる。

そして、そのまま、手が、顔が、膣が、俺の頭を、胸を、脳を、心臓を、掴んで……

そ　　して　　：　　：　　。

「しんやーしんやー！」

「っ!？」

気が付けば、目の前にははやての顔があった。荒い呼吸のまま辺りを見回すと、俺は居間のソファに寝かされていたのが理解できた。まだ荒い息をなんとか整えようと深呼吸をし、心配そうに俺の顔を覗き込むはやてはやての後ろには父さんと母さんが心配そうに俺を見ていた。

「よかった……！やつと起きたんやな……！」

安心したようにはやては俺に抱き付く。父さんと母さんはとため息をついて各々椅子に座り、すぐに俺の調子を調べるためか脈や体温を測り始めた。

「……どう、したんだ？」

「どうしたって、それはこっちのセリフやで！急に倒れたと思ったらうなされ始めるし、顔色も悪くなるし、心臓やって止まったんやで!」
抱き付いていたはやては目じりに涙を貯めて、必死に泣かないようにしているのが目に見えてわかった。

……心臓が、止まった？死に、かけたの、か？俺は？

「っ……………」

突然、脳裏にさつきまで見ていた景色が映し出され、そして次の瞬間にはあの玉虫色の不定形が目の前に広がっている映像が映し出された。それを認識し、理解する前に胃の中のもの逆流してくる。慌てて口に手を当てるが、それでも胃の中のものすべてが口の中を蹂躪し、容量が収まりきらずそのまま外へと溢れ出た。

「ぐぶっ…ぐほっ！おえっ……………」

「しんや!?大丈夫なんしんや!?!」

不幸中の幸いというべきか、はやてには吐瀉物はかからなかったが俺の服やソファ、床に飛び散り嫌な臭いを出していた。

「信也！大丈夫か!?!」

「おえっ……………！おっごほっ！はあ、はあ……………」

父さんが背中をさすり、一通り胃の中のもものが吐き出されたからか何とか呼吸できるようにはなった。しかし、まだ気持ちの悪さ、気分の悪さは一切取れることはなく、ただただ胸のムカつきと吐瀉物の不快な臭い、臓器の不調が脳に突き刺さった。

「大丈夫か?」

「……………だ、じょうぶ……………」

なんとか息を整えようとするが、無理だ。脳裏に玉虫色の不定形が、あの景色が、夢が、死の恐怖が、まるで毒のように脳を犯し続ける。

全身が震え、顔から血の気が引き、歯がかみ合わない。満足に体を動かすこともできず、

「もう、今日は安静にしていなさい。もし明日も調子が悪いようなら学校にも休むことを連絡するから、安心しなさい」

「……………」

母さんの言葉に、返事はできなかった。無理やり体を動かし、自室に向かつてフラフラとしながら歩く。机やいす、壁、そして段差に手をつきながら、自室に入る。

……準備、しなくては……。

「……彼は大丈夫でしょうか？」

「ああ、申し訳ない。うちの長男があなたの顔を見るなり気絶するなんて」

「いえ。それについては確かに傷ついた部分もあるのですが、数秒とはいえ心臓が止まるなんてことがあるなんて。不幸中の幸いというべきか、幸運だったと言うべきか。すぐに意識を取り戻して本当に彼よかった。あの姿を見ているとむしろ彼の心配しかないですよ」

「詳しく診ないとわからないですが、あの様子は心的外傷によるものだと思います。失礼ですが、息子と何かありましたか？」

「いえ。彼と顔を合わせたのはこれが初めてですよ。しかし、心的外傷ですか。いったい彼になにがあったんでしょうか」

「そればかりは、親である私たちも分かりません。何度か聞いたことなのですが、どうも口が堅くて教えてくれないんですよ」

「……あまり私が踏み込んでいいものではないですね。失礼しました」

「いえ、いい子なのは間違いないのですが、どうも非現実的なものを信じる節があります」

「非現実的な……？　いわゆるオカルティックなものですか？」

「ええ。それに、なぜか混じりっ気のない純粋な金属や、最近だとナイフも欲しがるようになりまして。まるで見えない何かに怯えているようにも見えますよ」

「……そう、ですか。いえ。これ以上はさすがに聞くモノではないですね。では、これで私は失礼します」

「わざわざ落とし物をお届けしていただけたのに、何もできずに申し訳ありませんでした」

「いえいえ。私は当たり前のことをしたまですよ。それでは、彼にも身体を大事にしてくださいとお伝えください」

「本当にありがとうございます、名井牧師さん」

無印2

学校の情報処理室。普通ならば部活動のある放課後以外ではほとんどの確率で誰もいない教室の中、信也はひたすらにキーボードを叩き続けていた。

キーボードを叩く小気味いい音が一定のリズムで、次にクリックする音とペンが走る音が誰もいない教室で静かに響いた。

「……………」

耳をすませば断片的には聞こえるだろう音量でなにかを呟きながら信也はモニターを見る。そのモニターには動物病院での謎のガス爆発事故についての記事が書かれたサイトが映し出されており、その事故についての一般市民の書き込みを信也は目を動かして確認していた。

「……………」

その中にはガス管の管理会社についての誹謗中傷や被害にあった病院の同情や庇護、逆に病院への誹謗中傷が書かれていた。しかし信也はそのようなものには一切目もくれずに流し、写真に対する推測や噂話についてをひたすらに調べていた。そして、その中には普通ならばあり得ない、宇宙人や化け物についての書き込みも僅かながらに存在していた。

通常ならばそんなものには興味持つことはないだろう。せいぜいが妄想だの幻覚だのと言われてそれで終わりになるはずなのだ。

だが、信也はそれを一切しなかった。それに対してのコメントをすることはなく、ただそれを情報としてメモに書いて頭の中で整理していく。

ニュースサイトだけでなく、眉唾物どころか明らかなガセであると思われるものが多いサイトすらも目を通す。

どんなものでも情報として整理していき、メモに記す。時間が足りずに整理することが叶わなかった。予鈴がなり、授業の準備もしなければならなかったため信也はパソコンの電源を切り、メモ書きを片手に静かに教室から出た。

教室に向かうときも、授業中も調べたことを見直しては整理していく。同じ内容と思わしき文に下線を引き、チエツクしては下線を消す。それをずっと続け、そしてすべての授業が終わった段階でようやく情報の整理が終わった。

やはりというか、どれもこれも信用もなにもできない情報がほとんどであったが、それでもめぼしい情報はいくつか発見することができた。

1つは道路のあの破損具合。どうやらあれは地中のガス管が爆発したのではなく地上で強い衝撃があったがゆえにできたものではないのかということ。

1つは地面が陥没するほどの事故だというのに音がほとんど聞こえなかったということ。目撃者からの情報によるとどうやら小さな爆発音のようなものが聞こえたのが気になって見に行ったところあのようなことになっていたというこらしい。

1つは何人かの人が事件が起きたであろう時間帯に少年の声のようなのものが聞こえたということ。何を言っているのかは全くわからなかったが、それでも何人もの人がそれを聞いたということがわかった。

1つは黒い靄のようなものを見たという人が何人もいるということ。これは目撃情報が少なく夜であったこともあり見間違いではないのかという意見が多かった。

1つはピンク色の光が太いレーザー状となって突如現れたというもの。これはどこかの大学生がなにかやっていたのではという意見が多かった。

そして、最後に小学生ぐらいの少女が事故現場周辺で目撃されたというものだ。時間的にも小学生が出歩いているのはおかしいとも言える時間帯にその目撃情報がいくつかがあった。ただそれが誰かまではわかっていないとか。

「……………」

どれもこれも信じられないようなものばかりだったが、どれも複数のサイトにおいて似たような情報が載っていたものばかりだ。他の

情報よりもまだ信用できるものだと思ったものをピックアップし、それをメモに書き込む。

もちろん同一人物が複数のサイトに書き込んだ可能性はある。だが同時に複数人が書き込んだ可能性もあるのだから、疑っては行動が遅れてしまう。

なにより、前世にてこういったものの情報を疎かにしていた結果、死人が出たこともあった。このような情報もバカにはできないのだ。「……………」

もちろん、この情報を鵜呑みにするほど信也もバカではない。ここにピックアップされなかったものも頭の隅に留めておき、実際に調べて真偽の確証を信也は得たかった。

そのために、信也はまずはピックアップした情報を確認する。

「……怪しむべきは、小学生ぐらいの少女か」

事故が起きたと思われる時間帯は8時から9時。普通ならば親の同伴なしに出歩く時間帯ではない。何故この時間帯に小学生が外に出歩いたのか。

「……黒い霧、か？」

事故現場周辺に黒い霧のようなものが発見されている。夜であることから黒に見えた可能性もなきにしもあらずだが、それでも何かがあったということは間違いないだろう。

恐らく小学生が出歩いていた原因はこれだろう。小学生はこれに接触するため、あるいはこれ呼び出すために出歩いていた可能性が高い。

そして、そのきっかけとなるのが“少年の声のようなもの”だろう。この声のようなものに呼ばれたのか、または操られていたのかはわからない。だが、きっかけはこれだと暫定しておいても大丈夫だろう。

だが、このピンク色の光はなんなのか。これが信也には見当がつかなかった。

何かしらの魔術がここで行われていたということなのか、とも思っただがあの様な惨状を引き起こすようなものの前で魔術を使うよう

な時間があったようには思えない。

ここで考えられるのは2つ。小学生以外に誰かがいて時間を稼いでいたから使うことができた。そしてもう1つがその小学生が黒い霧のようなものを操っていたから時間をかけることができた。

だが、小学生がそのようなことができるとは思えない。誰かしらがいたということを考えたいが、そう言った目撃情報はネット上にはなかった。つまりこの小学生がなにかしらをしたということになる。

通常ならば小学生にそんな大それたようなことができるはずがない。例えそれだけを教えられていたとしても、予備があるとしても重要な位置にいるであろう子供をそこまで自由に動かすようなことをするとは思えない。……

そんなことができるのは、あの存在しか、いない……。

信也の脳裏には、人の姿から貌のない混沌の異形の姿へと変わっていく映像がカメラのフラッシュのようにハッキリと浮かび上がってくる。すべてを嘲るような、面白がっているような、なんとも形容しがたい笑い声すらも聞こえているかのよう。目の前にいるわけでもないのに、その恐怖は全身を縛り上げ、脳内を犯していた。

「っ……………」

全身から体温が奪われているような錯覚に陥る。同時に出してはならない汗が全身から出る。呼吸すらも満足にできず、意識を保とうとするだけで精一杯だった。

「だ、大丈夫なの!?!」

明らかに異常である信也にいち早く気がついたのは、隣に座っている高町なのはだった。心配そうなその声は教室に響き、そこにいる全員が信也の異常に気が付いた。

「久藤くん!?!大丈夫!?!」

担任の先生は気づくや否や信也のすぐそばまで駆け寄り、声をかける。しかし信也はそれに反応することはなくただ顔を青ざめて必死の呼吸していた。

それに異常を感じた先生はほかの児童に先生を呼ぶように指示し、

信也は連れられるように教室から出ていった。敬遠しているとはいえ、クラスメイトが教室から出ていくことになったのだ。教室内は騒然としていた。

「はい！久藤くんが心配なのは分かるけど、今は終礼の時間よ！静かにしてください！」

それを先生がたしなめて教室は静かになる。しかし、いくら私立の小学校の児童とは言えまだ精神的にも幼い子たちに完全に静かにさせることはできず、所々からひっそりと会話している声が聞こえた。

「……………」

そんな中、隣の席であるのはは複雑な表情をして信也の席を見ていた。

今日の信也は普段以上に周りに神経を尖らせているようになるのは感じた。寝不足なのか普段以上に目の隈が濃くなり、やや血走った目で回りを見回していた彼は年上にすら恐怖を感じさせるほどに。

どうしてあんなに怯えていたんだろう。そんなことを考えていたのはは机の上にはメモが残っていることに気がつき、しかし細かく書かれているそれを少し離れた場所から細かく読み取ることができなかった。

しかしなのはは信也が何をしていたのか、なぜあのような状態になったのかが気になってなんとかメモに書かれていることを読もうとするが、漢字が多く何が書かれているのか理解することができなかった。

「……………すごいなあ……………」

同じ年齢であるのに、信也の知識の量は自分よりはるかに多い。数多くの外国語を学んだり、星や地球についても調べていて、国や古い物の歴史にも詳しい。そして、誰も気にも留めない、笑い話ですらある怪奇の話にも真面目に、いや、まるで餓えた狼がエサに食いつくように必死に聞いている。

それを怖いと感じているのは自分だけでなく、先生すら彼を疎ましく感じている人が多くいる。彼と接しようとするのはごく一部の先生と、自分の親友であるアリサ・バニングスだけだろうとすら思うほ

どに、彼の周りは何もない。

彼は勉強ができる。自分は数理系ができて語学系ができない。彼は運動神経もいい。自分は何もないところでも躓くほど運動神経がない。

けれど、なのはは彼と自分を重ね合わせていた。ずっと前の自分と同じ、周りを気にして、そして隣には誰もいない。自分には今では親友が2人いる。家族もいる。けれど彼は家族しかいない。そんな彼を。

失礼なことだと自覚していながら、なのはは彼についてそう言った風にか見れていなかった。初めて見た時に過去の自分と勝手に重ね合わせて、でも彼はそれから何もすることはなくむしろそれが当然であると言わんばかりに行動していることに、なのはは恐怖すら感じていた。

それが何の恐怖かは分からない。彼が怖いというのもあるのだが、それ以上に自分の中から湧き上がる得体のしれない恐怖が、なのはの中にあつた。

なのははそれが知りたかった。彼を見ると湧き出てくる恐怖が一体なんであるのか、どうしてそれを感じているのか、それを知って、自分はどうするのか。

「なのは、大丈夫なの？」

ふと後ろから親友の声が聞こえた。それに反応して後ろを見ると、そこにはなのはの親友であるアリサ・バニングスと月村すずかが心配そうな表情をしてなのはを見ていた。

辺りを見回すと、既に終礼が終わっていたのか各々席から立ちあがって部活動の準備や帰宅の準備をしている児童がいることにやっとな気が付いた。ずっと信也を、自分のことを考えていたなのはは終礼の内容をほとんど聞いていなかったことに焦りを感じ、それを見た2人は普段は見ることもないなのはの挙動に少しばかりの不安を感じた。

「本当に大丈夫？」

「大丈夫。ちよつと久藤くんが大丈夫なのが気になっただけだか

ら

すずかの心配そうな声になのはは普段通りにと努める。アリサはその様子に僅かに引つ掛かりを覚えたが、隣にいた人が急にあんなことになったらそうなるかと納得するかのようには頷いた。

「まああいつとは言え隣があんな顔色悪くなったら心配になるわよね」

アリサは信也が連れていかれたドアを見る。普段は暗さと鋭さを感じさせる雰囲気を感じていたが、あのとときの信也はそれを感じさせず、怯える子供のようなものすら感じたことに違和感を覚えていた。

しかし、アリサとしては腹立たしいことに信也は自分よりも頭がいい。運動神経だって大人と変わらない程のものであり、いつか打倒する目標でもある彼を何でもできる人であるというイメージを持つていたアリサは彼ならすぐに立ち直るであろうと考え、友達であるのはを元気づけるように声をかける。

「……まあ、あいつなら大丈夫でしょ。それより、今日は私の家に遊びに来るのよね？校門に鮫島を待たせているから行こー！」

「……うん」

なのははアリサに呼ばれ、鞆を手にして席を発つ。2人と教室を出る前に、最後にメモを見る。

何てことはない、どこにでもある紙だ。黒いペンで書かれ、様々な色の下線を引いたメモ書きだ。

しかし、なのはは何故だかそれに一抹の不安を感じ、アリサとすずかの呼び掛けに慌てて2人の元へかける。

この時なのはに感じた一抹の不安は2人に呼ばれることで忘れ、しかし心の奥で僅かに引つ掛かりを覚えながら校舎を後にした。

その一抹の不安は正しいものなのだと、知るよしもなく。

無印3

「なあ、大丈夫なん？」

パソコンで情報を集めている途中、はやてが背中に引っ付くように体重をかけてくる。車いすを使わなきや移動できないとはいえ、両手をつけば身体を支える程度にはまだ力を籠めることができるらしく、こうやってじゃれついてくることがある。

「大丈夫だ。大丈夫だからひつつくな」

心配しているのかはやては慣れた手つきで器用にも俺の背中に身体を預ける。ここ最近パソコンを触っていたり、作業を始めようとするとほぼ毎回はやてはこうやってじゃれつくようにのしかかってくるようになった。

今回もパソコンに向かって座っている形だから危ないとやめさせようとしているのだが、本人がこの体勢を気に入っているのか止めようとしめない。おかげではやてを落とさないようにしなければならぬいから長時間パソコンも触れない。父さんと母さんも止めようとしているのだが、はやてが頑固にもやめようとしなないことからパソコン周りに危険なものを置かないようにしている。

「けど、学校で顔色悪うなったんやろ？それやのにこうやってパソコン触ってたらもつと悪うなるやろ」

「……大丈夫だ。何も問題ない」

……学校であったことがはやてにも伝わったのか。保健室に連れていかれた後、保険医から薬を飲ませ、少しすると気分が落ち着いて顔色も戻ってきたのだ。その後早く帰宅するように言われてそのまま帰ってきたのだが、俺が家に着くとはやてはいつも以上に俺を心配しているようだった。

本来なら父さんか母さんに来るはずだったんだろうけど、あの様子だと早い段階ではやてにも連絡がついていたんだろう。けど、なんではやてに連絡が来たんだ？いや、逆か。父さんと母さんに連絡が来たからはやてにも情報が伝わったんだろう。面倒なことになってきたな。

しかし、こうもはやてが引っ付いていると情報収集も満足にできない。今日は保健室に行つたからという理由で外に出ようとしてもはやてに止められるからそれも叶わない。夜に抜け出そうかとも思つたが、父さんと母さんは夜遅くに帰ってくる。その時間帯にいないとわかるともつと面倒なことになるだろうし、逆にここにいないと黒い霧がここに来た時に対処できる奴がいらない。なんにしても奴らは夜行性が多い。ここを護るためにも、夜に出るということはしたくない。

しかし、調べれば調べるほどこの黒い霧が何なのか、正体のかげすら見えないことがかえって不気味すぎる。

コンクリートの地面や塀を簡単に壊す力に、周囲に気付かせにくくする力、その時にいたであろう小学生、そしてピンク色の光。

コンクリートを壊す力程度なら数えるほど神話生物にいます。周囲に気づかせにくくするにも魔術を使えばおそらく不可能じゃない。だが、問題となるのは小学生とピンク色の光だ。

小学生の正体とピンク色の光。おそらく、いや、ほぼ確実に今回の事故に関わっているとみて間違いないだろう。しかし、なぜここに小学生がいたのか。ピンク色の光の正体は何なのか。重要なはずのことがわからない。

そもそも、なぜ今回の事故のように表に出るようなことをしでかしたのか。はやての麻痺の前触れかと考えたが、長年尻尾すら出すことがなかった奴らがこんなへまをするとは思えない。おそらく、別の何かが引き起こしたんだらう。だが、それが何なのかという疑問がある。

コンクリートの地面や塀にあれほどの穴を空ける力を持っていると考えたら、間違いなく人の所業ではない。何かしらの生物が関わっていると考えた方がいい。

だが、その前触れは何なのか。全ての神話生物には、そこにいるなら臭いや音のような何かしらの特徴があるはずだ。早く事故現場に行つて確認したいが、はやてがいる以上今日はもう外に出ることはできない。あの時保健室に連れて行かれなかったらこんなことには

ならなかったのに、不甲斐ない。

だが、こうやってインターネットで調べられる機会ができたは幸運だった。おかげで俺の知らなかった情報が手に入れることができた。

「……いくつもの流れ星、か」

「……………」

事件のあった日の前。イギリスで20を超える流れ星を観測したという話がネットで上がっていた。丁寧にも写真付きでだ。あの日に流星群があったという話は聞いていない。だというのに一気に流れ星が20を超える量が落ちたというのも奇妙な話だ。

偶然ということもあり得る。だが、本当に偶然なのか？同時に20を超える流れ星が落ちるなんてそんなことが？俺からすれば何かここに堕ちてきたという方がしっくりくる。

宇宙から来るとすればなんだ？バイアクヘーか？ミルゴか？シャクタク鳥か？宇宙からの色、シャツガイからの昆虫だとすれば洒落にならないぞ。

……いや、宇宙からの色はさすがにないか。あれは一定の地域の生命力を吸収して成長していく害虫に似た存在だ。あれがいるのなら植物や人間が奇妙な色を発することになるんだ。さすがにあんなものが近くにいたのならさすがに分かる。

となると、シャツガイからの昆虫が小学生にとり憑いている？……あり得る、か。シャツガイからの昆虫がとり憑いているのなら小学生が夜に外に出ていたことも、魔術が使えたこともまだ納得がいく。俺の知らない魔術を使って何かしらを召喚し、軽い暴走。暴走を抑えて『門』か何かでどこかに飛ばしてそのまま消えた。

……さすがに、こじつけが過ぎるか。だが、ありえない話ではない。黒い靄がなんなのかは分からないがそれが通常の生物じゃないことは間違いない。それがなんなのかは現場に行かないと分かるものも分からない。

今日は、夜にならないと無理か。だが、父さんと母さんは今日遅くに帰ってくる。今日はもうあきらめた方がいいか？既にもう数日経っているんだ。さすがに警察が証拠となりそうなものを持って

行っているだろうし、臭いももうなくなっている可能性が高い。

そう考えれば、今日はインターネット上に上がっている情報を収集した方がいいか。いや、早くいかなければ黒い霧が何かしでかす可能性はある。早く黒い霧が何なのかの目星をつけないと対策すらできない。

いや、そもそもこの騒ぎの根源は本当にシャツガイからの昆虫なのか？それが原因だという可能性は十分にあるが、今回の騒動の元と考えられるのは落ちてきた流れ星だ。俺の知らない存在の可能性だつて十分にある。

「……伝承や伝説に残っていない存在の相手をしなくちゃいけないのか……」

「……………」

脳内にある魔導書を調べるにしても時間がかかる。魔導書を通して読んだことは一切ない上に翻訳ができそうにない部分だつてある。それに、俺の読んだ魔導書はネクロノミコンにエイボンの書、屍食祭典儀、妖蛆の秘密、無名祭祀書、ナコト写本、グラークの黙示録、ナイハーゴ写本、カルナマゴスの誓約、そして魔術書の切れ端ぐらいだ。全部写本ではあるが、英語やラテン語、ギリシャ語のモノばかりで読むのに数週間から数カ月はかかる代物ばかりだ。記憶をたどつていけば訳したものがどこかにあるはずだが、それがどの本の訳か整理しなければ分からない。15年分の記憶をたどるのはさすがに骨が折れる。そうするぐらいなら最初っから翻訳していった方が早い。

いや、理解できていない部分もあるから多少は短くなるか。それでも長い時間をかける必要があることには違いない。

それに、そもそも黒い霧が何なのか思い当たるものがない。どの本に書かれているのかさえわかればそれだけ早く終わることができるけど、それすらもない今、地道に調べていくしかない。

「しんやー」

気が付けば、はやての顔が頬のすぐそばにまで近づいていた。同時に俺の身体を拘束するかのよう抱きしめ、放すものかといわんばかりに力を込めていた。

「……なんだ？どうしたんだ？」

「なんやもどうしたもない！こゝんな美少女が近くにおるのに、ずっと変なことばっか呟いとるやん！一体何しとるん!？」

……なにを、している？

「……大切なことを考えてるんだ。あまり邪魔するなよ」

今やっていることは俺を、はやてを、父さんを、母さんを守るためのことなんだ。俺がしないと、やつらの脅威から、護ることができないんだ。

そうだ。どうして俺は悠長なことをしていたんだ。事態は切羽詰まっているかもしれないのにのんきに調べ物をしていたなんて、俺は何を考えていたんだ。あいつらは時間をかければかけるほど厄介な存在になって俺たちを襲う。時間さえかけてしまえば儀式は成功してしまふんだ。何も知らない状態でここを護ろうと思っても、弱点すら知らない状態でやつらと対峙するのは自殺行為そのものだ。

知らなければ。この黒い霧がなんなのか、知らなければ……。

「ちよ、しんや？どこに行くん？」

「外に行く。19時前には戻る」

早く神話生物の証拠となるものを、それが何なのかを証明できるものを探さなくては。臭いでもいい、足跡でもいい、目撃情報でもいい、粘液でもいい。それが何なのか、それが分かるきつかけとなるものが欲しい。そうすれば正体を明らかにすることも、対策することも出来るんだ。

「だ、ダメやって！学校で体調悪うなったんやろ!?!家で安静にしとらなあかん！」

背中に張り付いていたはやてはやてはそこから動かさないと言わんばかりに必死になっている。けど、年齢の割に身体能力が高いこの身体じゃあよろめく程度で動くことに対して支障はない。

背中に張り付いているはやてを車いすにおろし、なんとか身体から引きはがして外に出ようとしたが、それを阻止せんとはやては車いすを器用に動かして玄関の前に陣取った。

「身体は大事にせなあかん！別に今日やなくてもええやろ!？」

「今日じゃないとダメなんだ。今日じゃないと、明日になって遅かったじゃダメなんだ。ただでさえゆっくりしすぎていたぐらいなのに早く行動しないとあいつらは俺たちを傷つけるんだ早く奴らの正体を知らないで攻撃に出ることもできないんだ早く証拠を掴まないと警察を利用することもできないんだ早くしないとやつらの居所を掴んでも手遅れになるかもしれないんだ早くしないと早くしないと早くしないと早くしない」と

そうだ。早くしないと手遅れになるんだ。早くやつらの狙いを知らないと俺たちが傷つくんだ。俺たちが、大切なものを、失うんだ。

早くしないと、早くしないと、早くしないと。やつらは、また、俺から、大切なものを、奪っていくんだ……!」

「どけ、はやて」

それだけ言って、俺ははやての車いすを避けて靴を手に取り、履く間もなく外に出る。はやてが何か言っていたような気がしたが、些細なことだ。外に出て俺は靴を履き、事故現場となった場所に向かって走り始める。場所はそこまで遠くはないんだ。さほど時間はかからないだろう。

早く見つけなくては。見つけなくちゃ、また、俺は、失う、こ、とに、なる。

失わ ないため に 絶 対に 見つけ 出さな
く て は 。

「しんやのバカ！」

しんやが出ていった玄関に向かって、私は力の限りそう叫んだ。今ほど自分の足が恨めしいと思ったことはない。どこかに走っていくしんやを、満足に止めることもできないこの足が憎たらしくて仕方ない。

「……なんなん？なんでそんなに急ぐん？」

しんやはいつも、違う、動物病院近くで事故が起きてからまるで焦っているんじゃないかと思うぐらいに常に何かをしているし、ずっと何かに怯えている。眠っているとき、ちよつとした物音で跳ねるように飛び起きるし、一回驚かそうとして背後から近づいただけで顔を殴られかけたこともある。

必死になつて新聞やニュース、インターネットを使って情報をかき集めているし、空を見つめて何かを思い出すかのように、私のわからない言葉をつぶやき続けていたりしていたりすることが多くなつてきている。

確かに変な事件やなつて、そう思ったことはある。けど、警察がガス爆発事故やつて判断したんやからそれでええと思うし、そもそもネット上で上がっていることなんて信用出来るとは思えへん。それやのに、まるで藁に縋るかのように信じられるかすら怪しいものを調べてはそれを考えているしんやを見ると、大丈夫なんか？つて、なんで私やおじちゃん、おばちゃんに相談せえへんの？つて思うぐらいにこつちが不安になる。

けど、今日帰つてきたしんやはいつもとは違って、どこか余裕みたいなのも感じているようやった。顔を青くして保健室に運ばれたつてのが嘘みたい、帰つて来た時のしんやはいつもの死んだ魚のような目じゃなく、普通の人の目のようにも見えた。いつも通りにかばんを部屋に置いて、いつも通りにパソコンに向かい、いつも通りにネツ

ト上で変な情報を仕入れてくる。けど、そうしている中ではいつものような切羽詰まったような様子なんてなくて、どこかのんびりとした様子すら見て取れるほどに落ち着い妥妥たんや。

けど、それも長いことは持たんかった。最初のうちは調べたことに満足そうにしていたんやけど、突然眩きだしたと思ったら身体を震わせて、外に出ようとし始めた。学校で顔色が悪くなったって聞いたのに、それすら気にも留めずに私をどけて外に出ようとしたときは何を考えているんだと怒りすら感じた。

なんとかして車いすを動かして玄関に向かう前に、外に出してなるものかとしんやと対峙をするところまではいった。ここまではよかったんや。やけど、しんやの目を見たとき、私は怖く感じてしもうたんや。

普段の死んだ魚のような目は光がともっていた。けど、その光は普通じゃない、まるで誰かを殺すかのような、そんな怖さすら感じる光を灯していた。しんやの目に灯った光は何度か見たことはあった。けど、私が見たことあるのは何かに怯えているようなものと、焦りを感じるようなものばかりだった。だから、あんな、見たこともない目を見た瞬間、私は殺されるかとすら思った。

結局、初めて見た目の怖さで身体がこわばってしまって、ぎこちなかったけど、でもまるで久しぶりにやったかのような動きでもってうまいことすりぬけられたと思ったときには追いかける暇もなく外に出ていってしまった。

今の私には、ちよつとした虚脱感にも似た空虚感があった。同時に心のどこかで、しんやの心は私やおじちゃんおばちゃんの傍になんかなくてどこか遠くにいるかのような、自分から離れていつているような、そんな気がしてならへんのや。

どうしてしんやは家族に、私に何も教えてくれへんのやろう。しんやからは寄り添われているって言うのは感じているけど、でも同時にどこか拒否にも似たなにかを感じる。

おかしい。おじちゃんもおばちゃんも感じているけど、しんやはどこかおかしいと思えへん。

自分から近づいているのに拒否している。近づけているのに突っぱねる。甘えているのに、怖がっている。

しんやは何がしたいのか、何を考えているのかが全く分からへんし、伝わってこやん。しんやが何か隠れてしているというのは分かっている。けど、それが何なのかわからへんし、教えてくれようともしてくれへん。だから、わからない。

どうして何も言ってくれないんやろうか。言ってくれなきゃ、なにもわからへんのや。分からへんから、しんやが怖い。どこか遠くへ、私の手の届かない場所にいつてしまいたいそう。気が付いたら手遅れになっていてしまっていていそう。また、家族がいなくなってしまうんやないかって、私は怖いんや。

嫌なことを考えてしまったせいか、背筋につららを入れられたのかと思うような寒気が走って身体が嫌な震え方をする。それを抑えるように、考えないようにしながら、けどしんやが出ていった玄関を見て居間に戻る。

「……あれ？」

ふと居間の机の上を見ると、鎖で縛られた大きな本がぽつんと置かれていた。その本は私が生まれた時には既にあつたもので、気が付いたらすぐそばにある不思議な本だ。

何回か読もうとして鎖を解こうとしたんやけど、鍵がないうえにキチキチに鎖が縛られていたから外すこともできず、結局そのままにしているモノや。普通なら不気味がるようなものなんやろうけど、なぜか私はそれが近くにあると心が落ち着くというか、安心感があるというか、でも同時に不安を感じている。これをしんやに言ったら間違はなく焼き捨てられるものやろうけど、なぜか私はこれを捨てようとは思えなかった。

「……でも、私ここに持ってきてたっけ？」

確かに本棚を整理してこの本を手にしていたことはあつたけど、居間まで持ってきた記憶はない。けど、たまにこれ持ってきたっけ？って思うこともあるし、今回もそういうことなんやろう。

気分を紛らわせるために、机の上に置いてあつた本を手取る。そ

の本はジャラジャラという鎖の音を立てながら、でもなぜかそれが私をなぐさめてくれているようにも聞こえて思わず笑みが浮かんだ。

「……せやな。帰ってからめいっばい文句を言えばええもんな」

そうや。あの時、お父さんとお母さんが死んだとき、私は何もできなかった。けど、今は違う。私はしんやを止めることができる。休むことなく走り続けているしんやを、私は止めることができるんや。

よし！そうと決まったらおじちゃんおばちゃんに相談しなくちやあかんな！どんなことを相談しようかなあ。

無印 4

「……どういうことだ？」

親も寝静まった夜遅くに、信也はパソコンを使っていた。モニターから発せられている光だけが灯っている真つ暗な空間の中、悩み苦しむかのような表情をしながら信也はモニターを睨みつけていた。

「……情報に統一性が、ほとんどない」

モニターには今まで起きた事件、動物病院前ガス管爆発事故、神社爆破テロ事件、そして公園前森林無差別テロ事件についてのメモが書かれていた。同時にSNSやニュースと言った様々な場所から情報を確認しているが、それでも共通する情報はほとんどなかった。

無論、事件があつた場所に行つては調べているが、有力な情報を手に入れることはなく時間だけが過ぎていくことに信也は焦りすら感じていた。

そしてパソコンを使って様々な情報を調べていった結果、やつとこのことで共通性のあるものを見つけることができた。

「……ピンク色の光」

そう。ピンク色の光だ。大なり小なり今まで起きた爆発事件にはピンクの光が発せられているという目撃情報が多かれ少なかれあつたのだ。けど、あるとしてもその程度で他にはほとんど何もないと言つても過言ではないほどに情報は少なかつた。

病院前の爆発も確認したはよかつたが粘液らしきものも何も残つていなかった。警察が調べたのかと思ひ近くで待機していた警官に聞いてみても何も情報はなかつた。何かを拾つたというわけでもなく、何かを発見したというわけでもない。俺も調べてみたが、なにも成果を得ることはできなかった。

神社でもそうだつた。破壊跡がいくつもあつただけで、他には何もなかつた。他には何人かが散歩でここに来ただけで話を聞いても、1人が気絶したという話があつただけだつた。話を聞いてもいつの間にか意識を失つていて何があつたのか覚えていないというだけで俺の欲しい情報は何一つなかつた。記憶を呼び出すために魔術を使い

たかったが、信也はその魔術を覚えた記憶がないために思い出させることはできなかった。

だが、最近起きたあのテロ事件、公園前森林テロ事件は今までとは毛色が全く違う。

今まで情報がなかったというのに、今回は特別情報多い。それこそ、どんな存在が暴れていたのかがネット上で上がるほどには。

「……植物か……」

ネット上では被害のあった道路や建物の画像が張られている。道路や壁には植物の根、あるいは枝のような何かがアスファルト、コンクリートを破壊したような跡が残っていた。そして、目撃情報には植物が暴れまわった、木が動き出したなどと言うものがあった。そして、気になるのがピンク色の光、それもレーザーのように纏まった形で放出されていたという情報もあった。

「……植物……ザイクロトルか？」

ふと信也はシャツガイからの昆虫の奴隷である、金属光沢を持つ植物を思い出す。これに関しては見たことがないが、シャツガイからの昆虫に寄生されていたやつを持っていた写本に姿と特徴が書かれていた。植物と聞いてピンとくるのが、こいつだ。

しかし、信也の読んだ名もない魔導書の写本が正しいならば、ザイクロトルにこれほど被害を与えられるほどの長さの根や枝があったとは記載されていないかった。いや、写本というにも粗末なものだったから書かれなかっただけなのかもしれないが、ここまで広範囲となるとどれほどのザイクロトルがいるのか。

仮にそうであるとしても、金属光沢のあるザイクロトルがいる中それを疑問に思わない人間がいるのか？ 1体だけならまだしもそんな大量のザイクロトルがいるというのに何も騒がれないとは思えない。

それに、現場はめっちゃくちゃだったが森の中央部にいたとは思えない。あまりにも被害が偏り過ぎている。仮に中央にいた奴らが暴れたとして、何故あまりにも偏っているのか。迷い込んだ誰かを追いかけたとしても、自分の住処でもある森をここまで破壊して追いかけるとは思えない。それに、そんな大量のザイクロトルを、中心にいない

神話生物を見逃すはずがない。

それに、まだ植物に似た生物はいる。

「……黒い仔山羊」

黒い仔山羊。やつなら単体でも十分に森を破壊することができる。それに、黒い靄のようなものが黒い仔山羊を見た際の見間違いであるのならば、精神を守るために記憶をぼかしたと考えるのならば辻褄も合わないことはない。

そして、最大の理由となるであろう神が、母体とする唾棄すべき神を黒い仔山羊にはいることを知っていた。

「……シユブⅡニグラス……」

信也は豊穰を司る神として祀られている、黒い仔山羊を産んだ神であると知っていた。今回の事件はシユブⅡニグラスを信仰している団体が召喚したものであるのだろうと当たりをつけた。

だが、何故黒い仔山羊を召喚した？何が目的で黒い仔山羊を使役している？何故、シユブⅡニグラスを召喚しなかった？

信也は今回の事件について、全くと言っていいほど察知していなかった。シユブⅡニグラスを召喚するにしても、黒い仔山羊を召喚するにしても、あんな場所で、信也自身も通る雑木林に存在するとは考えにくかった。

それに、探索にはそれなりの自信があり、さらに市内全ての場所を、それこそ非日常の噂すらある場所にすら最大限の警戒を払って足を運んでいた。事件が起きた神社や雑木林も怪しい場所がないか探し回った。

にもかかわらず、事件は起きた。間違いなく敵は、黒い仔山羊を使役している狂信者は自分よりも格上だと信也は確信していた。

同時に、もし黒い仔山羊すらも隠し通せる技術や魔術があるのなら、話は変わる。信也の知らない魔術を持っていることはありえないことではない。むしろ知らない魔術の方が多いのだ。

信也は神との接触やクリーチャーとの接触を図る魔術を数多く知っている。だが、その数多くというもの一般的に見ればの話だ。個人で考えれば多く、しかし絶対数を鑑みればまだ少ない。無貌の神や

知識の神が識っているものを考えればむしろ少ないと言える。

だからこそ、信也はその可能性を考える。知らないことがあることが当たり前だと、全てを疑っている信也にはそれこそが当たり前なのだから。

しかし、信也は魔術以上に気になることがあった。それは生贄だ。黒い仔山羊およびシユブⅡニグラスを召喚するには生け贄が必要となる。だが、この街で行方不明になったという話は聞いたことがない。他の街で調達したと考えるなら話は別なのだが、ニユースにもなっていないことに信也は疑問に思った。

最初のガス管爆発事故として処理されたあれは少なくとも1週間近く前の出来事だ。だというのに、行方不明となったであろう人物に関するニユースが全くないのだ。数日程度ならともかく、既に1週間近い時間が経っている今、ニユースとなってもおかしくはない。だというのに、ここ1週間どころか1カ月そんなニユースが送られていない。

「……まさか、もつと前に拉致監禁された人物を使って……？」

ありえない話ではない。だが、狂信者どもがそこまで悠長に待ってられるのか、そこが疑問に残っていた。

だがそれを可能にしたからこそ、否、破壊活動があるまで隠し通せるその技術があったからこそ今回のように後手に回ってしまったている。

これ以上、後手に回っていては、殺されてしまう。ならば、やるしかない。

「……神話生物を、クリーチャーを使うか……」

いまだにピンク色光が何なのかを理解することもなく、ただ目の前に見えている脅威に対抗するために、信也は手を出してはならない存在に手を伸ばした。

無印5

夜の街に不気味な笑い声が響き渡った。

クスクスという笑い声が耳を障り、一瞬ではあるが狂気に満ちた笑い声にも聞こえる時すらあった。

その声を聴いた人は全員どこから声が出ているのかと辺りを見回してみてもどこにもそんな声を出しそうな女性はいない。どこにもいないのに聞こえるその不気味な声に恐怖を感じていた。

夜の墓地に、ゾンビが現れた。

そのゾンビは犬のような顔を持つ化け物で墓を掘り返す、常軌を逸脱した化け物であると。

それは素行の悪い高校生からの言葉だった。噂だけを耳にして面白がり、そして実際に目撃してしまった哀れな人間の言葉は誰一人として信じるものはいなかった。

夜の空に火の玉が走った。

その火はまるで意志があるかのように空を走り、大地へと降り、再び空へと昇る。

しばらくそれを繰り返していき、最後には森の中や山の中へと沈んでいくのを何人も人が見ていた。しかし、落ちた場所から火事になることはなく、しかしそこには何かが燃えたような跡があることが分かっていた。

そして、テレビやラジオからは海鳴町から素行の悪い中学生、高校生の方不明者、原因不明の死者が出たというニュースが、何日にも渡って流されていた。

「くそーなんだ!? なんのアーティファクトを使えばこんなことになる!? なんの教団が裏についている!? なんの邪神を祀って……!?」

……クス、クスクス

「……まさか、本当に貌ナイアルラホテのない混沌たる神が……?」

クスクスクス……

「……ふざけるな……」

クス……アハハ……

「ふざけるなよ……! また、あれがここにいるのか! はやての足も、あの神が絡んでるってのか!」

クスクスクス アハハ……アハハハ……!

「黙れ」

ピタリと、女性の笑い声が止まった。先ほどまでの激昂が嘘のようになりを潜め、しかし次の瞬間信也はなにもいない筈の木を睨み付け、わずかな血と大量の脂のついた包丁を持って握りしめた。

「何をしている。俺は全ての人を襲うことを許可した記憶はないぞ」

……アハハハハ

「確かに俺はあそこに入った奴らを襲うことは許可した。だが、死ぬまで血を吸い続けてもいいと言ったのは2人までであとは殺した後で青山霊園に持っていくと言ったはずだ」

アハ、キヤハハ

「何がおかしい」

キヤハハハハ……キヤハハハハハハハ!

「」

キヤハハハハハツツ!!

人の出せるものではない音を出し、狂った笑い声が止まると同時に、血の通った肉がつぶれる音とともに辺りに衝突音と衝撃が響いた。まるでトラックがぶつかつたかのような衝撃が地面を揺らし、決して小さくないクレーターを作った。そして、そのクレーターの中心には、何かがあったのかそこから血のような何かの花が咲いたかのよう

に散っていた。

「生きていれば、死んでいても万全の状態であるなら生き返らせて情

報を絞りとれたのに、勝手なことをするなど言ったはずだ」

……キヤ、ハ、ハ

再び衝撃と振動が森の中を襲った。潰れた肉は物言わぬ肉塊へと変化し、辺りに血を飛び散らせた。その血はしんやのコートに張り付き、生臭さと鉄臭さを出していた。

「燃やせ」

クレーターの中を一瞥した信也は興味が無くなったかのように目の光を無くし、そう呟く。

ユラリと、風もないのに火が揺れた。燃えるはずのない鉄を燃やしているその火は徐々に大きくなっていき、複数の炎の塊となって飛び出した。

空に浮いているそれはまるで生きているかのようにだった。何もなはずの空間が燃え、

その炎はまるで意志を持ったかのようにゆっくりとクレーターの中とミイラと化した死体、死体の持っていた所持品を包み込み、嫌な臭いと煙を上げて燃やす。火の爆ぜる音と熱により変形する音が森の中に響き、ボロボロと崩れて行くそれを信也は何の感情もなく見ていた。

「……なぜ、こうも情報が出ない」

燃えていく遺体に何も感じずにただ見つめ、何もわかることがないという状態にただただ苛立ちだけが募っていくばかりの信也は、光のない目に黒々とした、しかしドロリとした何かが混じった混沌の光を目に宿していった。

「ッ!？」

突然、大地が揺れた。さっきの自分で起こしたものよりもはるかに大きく揺れたそれは、公園の方角で光っている何かが原因であるということにすぐに結びついた。

「こんな真昼間からやってくれるとはなあ……!」

苛立ちを隠そうとせず、ギリリと歯を鳴らす。燃えている鉄を鉄の箱の中にしまい、それを懐にしまう。そして何かを探すように懐の中

をゴソゴソと探っていた。

「クソ共に地獄を見せてやる……!」

ドロリとした暗い光を目に宿し、懐から取り出したそれは、時を刻んでいるような蠢く何かが入った瓶を握っていた。

「そこまでだ!」

ジュエルシードの暴走が収まり、再び衝突しそうになったその場に、黒い少年は突然現れたかのようにそこに姿を現した。

突然の出現に金髪の少女と茶髪の少女、フェイトとなのはがその少年を見るが、フェイトは何者か悟ったのか顔を歪ませ、どうやってこの場から逃げ出そうかと思考を始めた。

「この場は管理局……っ!」

少年、クロノの言葉は続かなかった。その言葉は森から現れた火の玉がクロノに襲い掛かり、しかし済んでのところでシールドを展開して防ぐことに成功した。

「な、なに!?なんで火が勝手に燃えてるの!?しかも浮いている!?これもあなたたちの仕業なの!」

「ち、違う!…こんなの、私は知らない!」

「魔法、でもない!?なんだ、これは!」

ユラユラと揺れている火の玉を見て三者三様の反応を見せる。火の玉はユラユラと警戒するかのように漂い、それに警戒して杖を構える中、幼い少年の声が公園内に響いた。

「お前らが原因か」

ふらりと、森の中から黒いフードを被った少年が現れた。左手には赤い液体と白いナニカが付着しており、右手には不気味な液体が入った瓶を持っている。顔はフードのせいで見えず、しかし身長からまず10〜12の間ぐらいであろうことは予測できる少年の声は、どこか焦っているかのようにも、怒りがにじみ出ているかのようにも、喜色に満ちているかのようにも感じた。

「誰だ！君は一体何者なんだ!？」

クロノは火の玉の主であろう黒い少年に杖を構えながら声をかけるが、それが聞こえていないのか少年はその言葉にはピクリとも動かず、しかし次の瞬間全身が震え、ポツリとかろうじて聞こえる音量で声を出した。

「お前らが原因でこの街に奇妙なことが起きているのか。お前らのせいでクリーチャーが出てきているのか。お前らのせいであの子が苦しんでいるのか」

「な、何の話をしているんだ!？」

「黙れ日常を壊すバカ共が平穏を潰すクソ共が安心を汚すカス共がクリーチャーを出しやがって道を壊しやがって街を壊しやがって黒い仔山羊を出しやがって楽に死ぬると思うなよ狂信者共があッ！」

一息すらせず、淡々と、しかし徐々に強くなっていく言葉にその場にいた全員が息をのんだ。なのははそのほぼすべてが自身も関わっていることだけあって心に来るものがあつた。

『クロノくん！あの包丁から血と人の脂の成分が検出されたよ！あの子人を殺してるかも！』

「な、なんだと?!動くな!事情を聞かせてもらおう!」

少年の手にしていた包丁の成分を理解した瞬間、目の前の少年をただの警戒すべき存在から捕まえるべき存在と変え、いつでも捕まえる構えを取る。しかし、それすら眼中にないのか、それとも興味がない

のか、右手に持っていた瓶を振り上げた。

「猟犬に怯えろ」

そう言って瓶を放り投げ、黒いフードを被った少年は逃げていった。

「待て！」

逃げた少年を追いかけようとクロノが動いた瞬間、火の玉は妨害するかのようにクロノへと殺到した。意志を持つている物でもあり、同時にただの火でもそれは初めて見るクロノからすれば対処することが難しく、ついには瓶は砕け、中が飛び散った。飛び散ったそれは気化しやすいのかすぐに色の付いた煙となり、しかし不自然に空中に留まった。

「っ!?!」

「なんっ!?!」

「うっ!」

「くっ!」

「ちい!」

その煙はゆらゆらと形を変え、徐々に何かを形作っていった。そして、それはまるでテレビのように動く絵を映し出し、とある光景がそこから見るこゝとなつた。

「っ!?!ば、バカな!?!」

「これは……!?!」

「なに……?」

それは見た覚えのある、いや、見た覚えのない景色だった。

そこは間違いなく今いる場所だった。音はないが間違いなくそれはなのはとフェイト、ユーノ、アルフの4人だった。なのはとフェイトが戦い、それ見守るユーノとアルフ。その戦いは今までにやったことのない、出来るとは思えないほど成長していた。

呆然とそれを見ていた5人だったが、戦いの最中、突如煙の絵が角ばった。

「……え?」

それをつぶやいたのは誰か、分かりはしなかった。しかし、その声

を合図にしたかのように絵の角ばりはひどくなり、そして丸みがすべて消え去ったその絵の中から強烈な存在感が生まれ、

それを見た全員が何かに見つかったような悪寒が走った。

「ひっ!?!」

小さくなのはは悲鳴を上げる。同時に煙から出される絵が消え、暗い闇のような、悪意と言うものを色に変えたと錯覚するような色へと変わった。そしてそれは悲鳴すら目印と言わんばかりに色が濃くなっていき、悪寒はだんだんと強くなっていく。その悪寒は、悪意は割れた瓶からあふれ出し、見るものすべてを嫌悪感に包む煙を上げた。

「なん、だ、これは!?!」

クロノの疑問に答えるかのように、それは姿を現した。

この世の悪意を集めたかのような、膿のようなものを滴らせたそれが、ガラスの破片の先端から出現した。

無印 6

ポタリ、ポタリと気持ちの悪い液体が地面に滴り落ちる。形状で言えば、強いて言うのであれば痩せこけた犬の姿をしているそれは吐き気のする臭いを発しながら、あらゆる不浄を、邪悪をかき集めたような気配を放ちながら獲物を見定めるかのようにジツとその場から動かずにいた。

「……なん、だ？なんなんだこれは!？」

そこにいたのは液体を滴らせている化け物だけで、これを出した少年と使い魔である火の玉はすでにどこにもいない。

母艦であるアースラに行方を探させてはいるが、森の中で突然姿を消したことに動揺が走っていた。魔法を使った形跡もなく、消えたことに。

「エイミィー！あれはなんだ?!いったいなんの生物なんだ!？」

『わ、わからない！あんな出現のしかたなんて、見たことも聞いたこともないよ!』

クロノは目の前の見たこともない化け物に驚きを隠さず、むしろ嫌悪感を押し出していた。エイミィと呼ばれた少女も、連続してありえないことが起こったこと、そしていきなり現れた化け物に恐怖を感じていたが、しかし分からないと連呼するだけだった。

そんな中、オレンジの髪の女性、アルフがハツとしたようにフェイトのところまで走り、その腕を掴んだ。

「逃げるよー!」

「っ!」

アルフの言葉に、顔を青くしたフェイトは身体を震わせながら頷き、その場から飛び立とうとした。それに気が付いたのか、化け物は動きだした存在に顔を向け、ガバリと口のような場所を開ける。その中は舌のようなものがある口のような空間をしていたが、黒くその中を見るだけで見てはいけないものを見ているような、そんな恐怖が背筋を撫でた。

そして、その口からズルリという音を立てて舌がデロリと出され、

それはフェイトに向かって弾丸のように発射された。

「くッ!？」

それを魔法で防いだが、その舌はダラダラと汚らしい液体を垂れ流し、ズルズルと防がれたそれを口の中に戻そうとしていた。

「汚いものをフェイトに飛ばすんじゃないよ!」

そのタイミングを見計らい、アルフは化け物の胴体に蹴りを入れる。通常ではありえない威力を持つそれは、普通ならば骨を砕き、内臓を傷つけ、その身体を蹴り飛ばす威力はあった。そう。普通ならば。

「なっ!？」

粘度の高いヘドロに突き入れたような、気持ちの悪い音を立てて足が化け物の身体に飲み込まれる。化け物の方も攻撃を受けたような様子を見せず、ぐるりと顔をアルフの方へと向ける。

「クッ!」

咄嗟に逃げようとするが、飲み込まれそうになっていた足に予想以上の力が必要だったせいで足は抜けたが体勢を崩し、すぐに動くことができない状態となってしまった。

そして、化け物は口を開け、舌をアルフへと発射した。

「ダイバインシューター、シュート!」

瞬間、化け物の顔にピンク色の魔法の弾が連続で当たり、明後日の方を向いた顔から舌が発射された。それを確認したアルフはすぐに体勢を整え、誰もいない場所へと放たれた舌を回収していた化け物を睨みつけた。

「大丈夫ですか!？」

そのすぐ後ろから少女の声が聞こえる。それを確認するまでもなく、そこには自分の主人であるフェイトと相對している少女、なのが杖を構えていた。

「……正直、助かったよガキンチョ……」

その言葉に笑みを浮かべるのはだったが、現状わずかな油断も許されない状況にある。それを証明するかのように化け物はまるで液体のように、煙のように姿を変えて徐々にその姿を小さくした。

「待て！」

クロノの言葉など聞いていないのか、それとも理解しようとしてもしていないのか。ガラス破片のある場所まで移動した化け物はゆらりと身体を揺らしたかと思えばズブンツと、まるで煙に巻いたかのように消えていった。

「……どこに行った？」

化け物がいなくなった。それだけなら転移したり姿を隠す魔法生物がいるためにも不思議なことではない。だが、目の前で起きたことは今までで確認してきたどの生物にも当てはまらないもので、本当に消えてしまったのでは、というクロノの脳裏に浮かんだバカげている考えすらありえてしまうのではとすら思えるほどだった。

『クロノくん！アンノウンが、アンノウンが消えちゃった！』

これまでのことを見てきたはずのエイミーが、ありえないものを確認したかのような焦った声を出してクロノに報告する。今までに感じたことのないプレッシャーを感じているクロノはそれに苛立つような表情を浮かべる。

「見ればわかる！どうやって消えた!？」

『それが、転移魔法の形跡も科学技術の形跡すらもなし！映像を見る限り、本当に忽然と消えちゃったんだよ！空中で霧散したみたいに！』

その言葉に、この場で魔法を理解している人たち全員が絶句した。通常転移をする場合、何かしらの魔法を使うのがこの世の理と言ってもいいほどのことだ。それが全くないということはありえないのだ。にもかかわらず、目の前でソレが実現された。まるで歩くかのように、息をするかのように理解の範囲外の現象が起きた。ありえない、それを理解したくない、理解してはならないと、今まで培ってきた常識が考えることを否定した。

強い風が吹いた。その風でとれた花卉や葉、折れていた枝が風に飛ばされて辺りに散らばっていた。

どこから来るのか、敵だった5人が正体不明の化け物から身を守るために円陣を組む。カサリと、風に乗った葉が円陣の中に入り込ん

だ。その時だった。

「っ！」

「この、感じ……！」

「くっ!?!」

強烈な悪意が背後に充満した。弾けるように円陣を解いて悪意の中心にあるものを確認すると、そこには葉しかない。いや、葉からそれが現れるかのように、化け物はガラス瓶から現れた時と同じように出現した。

ベチャリ、ズチャツつという生理的嫌悪すら感じる音を立てて液体を滴らせ、怒り妬み嫉み殺意憎しみといった負の感情を凝縮したような悪意が放たれ、鼻がもげるのではとすら思うほどの悪臭を放つそれは、まるで獲物を選ぶかのようにその場から動かずにいた。

『……っ!?!そんな、ありえない!?!』

『どうしたエイミイ!?!』

『あのアンノウン、単体で次元を越えているわ！魔法も、科学も、なんも使わずに！空間の歪みもほとんどなく！』

「なんだって!?!」

その真実に、そこにいた全員が、魔法を知るすべての人間がおりえないと驚愕をあらわにする。

通常、ワープをするにしても違う世界に入るにしても大なり小なり歪みは存在する。通常ない場所にもものを出現させるのだから当たり前のことなのだ。にもかかわらず、目の前の化け物はそれすらなく、出現を可能にしている。エイミイの言葉通り、魔法も、科学も、知っている技術を使うことなく。

「ぐっ……！」

絶対にありえない存在を目の前にした、いや、それに対峙していると知った魔導士たちは理解の範囲外にいる目の前の化け物に再び顔を青くするが、若くしていくつもの修羅場を潜り抜けてきた者達にはそれがどうしたと言わんばかりの、一種の自己暗示にも似た表情を浮かべて目の前の化け物を睨みつける。

『クロノくん！新人だけど、戦える魔導師を1人送るよ！手が空いて

いる人がいなくてその人しか送れないけど、さすがに民間人と被疑者だけじゃどう転ぶかわからないでしょ!？」

「っ。了解した!」

突然の増援に、クロノはわずかに驚きを露にする。が、小型とはいえ常識ではありえない化け物を相手にするのだ。味方は多くいた方が有利になるのも事実だ。

そう判断したクロノは増援の旨を了承し、すぐにクロノの近くに魔法陣が現れる。

「加勢に来ました!」

そう言ってクロノの隣に少年が現れた。少年、エミルは杖を握りしめて化け物がいた場所を睨み付ける。しかし、いつのまにか化け物は姿を消しており、そこには化け物がいたという証拠になるであろう悪臭を放つ液体だけが落ちていた。

「気を付けるエミル! やつはどこからでも現れるぞ!」

「了解しました!」

クロノの助言に気合いをいれるように返事をする。杖を今一度強く握りしめ、かつて自分が憧れた化け物を倒す英雄となれる今をわずかにではあるが嬉しさすら感じていた。

さあ来い化け物。絶対に倒してやる。

エミルの中で化け物を倒すイメージを固め、近くにいるクロノ執務官の隣に立つんだと、憧れの人を隣にいる喜びで気が緩んだ、その時。再び、世界に強烈な悪意が溢れ出した。

「ヒッ!？」

突然の凄まじい悪意、それもすぐそばから放たれた。見ているだけではわからなかった、初めて感じる今までにない恐怖に身体がすくみ、少しの時間身体が自由に動かなくなった。それを狙って化け物は舌を打ち出し、防御が間に合わなかった首へとそれは吸い込まれていった。

「ガッ!？」

「エミル!」

ズルルという、何かを吸い出すような、けどそれは液体ではない致

「な、なに？…なんなの!?!何が起きてるの!?!」

エミルの様子に気が付いたなのは顔を真っ青にさせる。ユーノもあまりの状況について行けていないのか、それとも頭が動くことを拒否しているのかただただ呆然とこの状況を見ていた。

再び悪意が空間を支配する。何回も浴びた強烈な悪意に慣れてきたフェイトは、出現するであろう場所に杖を構え、煙のように吹き出てきたそれに向かって魔法を放った。

「サンダースマッシュャー!」

バチバチバチと、なのはが聞いたこともない音を立てて化け物へと飛んでいくそれを化け物は避けることができなかった。

■■■■■■■■■■ ツ!

声にもならない悲鳴が、怨念のように公園内に響く。不愉快な音という概念を凝縮したような声を聴いた者全員咄嗟に耳に手を当てる。不愉快になるという程度にもならない音により化け物から目を放してしまい、それを見計るかのように化け物は逃げるようにその場から消える。

慌てて化け物がいた場所を確認したが、そこにあつたのは小枝や葉、石だけであり、どうやって姿を消しているのか、法則が全く見えずにいた。

「効いている……?」

今までにない反応に呆然として化け物が消えた場所を見る。

「あれは非殺傷設定を解除しないとダメみたい」

非殺傷設定の解除。それを聞いたクロノは一瞬嫌な顔をしてフェイトを見るが、今までにない化け物を、人の寿命を奪うような恐ろしい化け物を相手にするのなら、そうせざるを得ないのだろうと自分の中で納得しようと考える。

「……協力に感謝する」

苦々しい表情を浮かべながら、しかしそうしなくては現状ではあの化け物に対抗できないと理解できたクロノは辺りを警戒しながら通信を繋げる。

「エイミィー!早く彼を転送するんだ!それと艦長!非殺傷設定の解除

の許可を！そうしなければ、あの化け物にダメージを与えられません！」

『りよ、了解！』

『……わかりました。許可します』

エミルの下に現れた魔法陣を確認したクロノはエミルを心配そうに見、杖の設定を変更する。非殺傷設定の解除と聞いてソレをするごとに戸惑うのはだったが、ユーノがそうしないとこれ以上に被害が出ると思得をしてこわごわとしながら設定を変更する。全員の設定が終わり、あとは化け物を迎撃するのみだったのだが。

「……まだ、出てこない……？」

1分経っても、あの化け物は現れなかった。時間差はあっても、1分以上の間隔を開けることなく出現していた。にもかかわらず、今回は

「……どこだ？どこからくる？」

もしかすると逃げ出したのでは？その願望にも似た考えが一瞬頭をよぎり、しかしそれを今考えてはならないとクロノが杖を強く握りしめた。その時だった。

『きゃあああああああ！』

「エイミイ!!」

通信からエイミイの悲鳴が上がる。それだけでなく艦にいる他の乗務員の悲鳴も上がり、次の瞬間魔法が放たれて何かに当たった音が響いた。

『ア、アンノウンが、アースラに、きゃあ！』

「エイミイ!! エイミイ!!」

何かにぶつかったような、そんな大きな音とともに通信が切れる。急に通信打途絶えた今、アースラに対して通信を試みようとしても繋がることはなく、情報のない現状にただただ不安と恐怖を感じていた。

アースラには戦闘員ではないとはいえ、多少の魔法を使える人が何人かいる。もしもの時を考え、戦闘も可能である人がいるのだから絶望的であるとは言えないが、それでも状況を知る術がない今、不安は

募っていくばかりだった。

ピリピリした空気が漂い始めてから数分。時々吹く風に舞い上がる木の葉や転がるゴミにわずかながら反応し、しかし何事もなく時間だけが過ぎていく。

アースラは大丈夫なのか。あの化け物はどうなったのか。みんなは大丈夫なのか。そんな不安がクロノの頭の中でグルグルと回り、それを見たのはユーノが心配そうな表情を浮かべ、フェイトとアルフは辺りを警戒する。

カサリと、木の葉が地面にこすれた音が空間に響いた。その時。

「っ！」

悪意が充満する。ガラスの破片から気持ち悪い煙が噴き出し、それが化け物を形造っていく。完全に姿を現して顔らしき部分をクロノたちの方へ向けると、クロノに通信が来た。

『こ、こちらアースラ！何人かやられたけど、なんとか撃退することはできたみたい！』

「……ああ。そして今、それがこっちに来た」

忌々し気に表情を歪ませる。膿のような液体を滴らせ、いつ襲ってくるかも分からない化け物は口のような場所を開ける。だらりと垂れ出した舌は狙いを定めるかのように先をクロノへと向け、それを発射した。

それを難なく防ぎ、5人は散開して化け物を囲んだ。

「やるぞー……いつはこの世に存在してはいけないんだ！」

「は、はいー！」

「了解しました！」

「指図されるまでもなくやってやるさー！」

「……………」

各々様々な反応を見せ、化け物に対して構えを取る。攻撃を防がれた化け物は、何の反応もなく舌を戻していた。が、それもあまり早くはなく、同時に致命的なスキとなった。

「バインド！」

ユーノとアルフの2人の魔法が化け物を拘束する。器用なことに

化け物の身体は空に浮き、足が地面についていない状態となった。

「ステインガースナイプ！」

「ディバインシューター！」

そこへ空に縛られた化け物を狙い、下から打ち上げるような軌道を描いたいくつもの魔力弾は液体を散らし、化け物を空へと打ち上げる。

「今だー！」

クロノの言葉が響き、フェイトは杖を構える。

「サンダースマッシュャー！」

雷の走る音が辺りに響いた。雷は化け物に当たり、同時に何とも言いようがないものが焼き焦げる臭いが漂った。直撃を受けた化け物は水の飛び散る音とともに地面へと叩きつけられ、その場に倒れるように横たわってピクリとも動く気配を無くしていた。

「……やった、のか？」

恐る恐ると、動かなくなった化け物を確認するように睨みつけて近づく。ジリジリと近づいていき、ついにあと数メートルというところまで近づいた、その時だった。

「っ!？」

それを避けたのは、運が良かった。もう起き上がらないと警戒をわずかに解いて、しかしあの化け物がそう簡単に倒れるはずがないと再び警戒した瞬間、化け物の口からあの舌が放たれた。

口の中が動いた瞬間に咄嗟にシールドを展開し、ギリギリ間に合って舌を弾く。不意打ちにも失敗した化け物は足を震わせながらゆくりとその場で立ち上がる。

「そんな……!？」

「バカ、な……!?!あれほどの攻撃を受けてまだ生きて……!？」

「くっ……!？」

ズルリと、粘着質な音をたてて化け物は起き上がった。しかし、体力の限界が来ているのか全身を震わせ、今にも倒れそうになっている。



消えるような唸り声を上げ、一步前が出る。そして口を開け、安定しないまま舌を少し出したがすぐに力を失ったのか地面に落ちた。それと同時に身体も崩れ、全身が液状とって融けるように地面に広がっていく。

公園には、鼻が曲がりそうなどと言うレベルではない悪臭が漂い、物音なく痛い沈黙が支配していた。

「……今度こそ、終わったの？」

液状へと変化した化け物になのはは声を震わせる。

しかし、次の瞬間液体が意思を持ったかのように動き出した。急に動き出したそれを警戒していると、ジュチュルルル、と粘性の高いものを無理矢理吸い込んだかのような嫌悪感すら感じる音を立てて液体は小さくなっていき、僅かな体液を残してそれは消えた。

「逃がしたか……」

液体が消え、クロノは忌々しげに顔を歪めて化け物がいた場所を睨み付ける。形を失ってもなおどこかに姿を消す術を持つその化け物が恐ろしいのか、それを使役するあの謎の少年がやったのか。今は解明することはできないが、あの少年を捕まえ、犠牲となった少年をもとに戻す方法を探すんだと、そう心の中で誓った。

「ま、まっ……」

なのはの声にハツとするようにフェイトのいた場所を見るが、すでにどこかに転移したのかフェイトとアルフの姿はどこにもなかった。

久々の失態に自らに舌打ちをし、なんとか気持ちを切り替えようとなのはの方を向いて声をかけるが、その表情はまだ苛立ちが残っていた。

「……話を聞きたい。僕と一緒に来てくれると嬉しいのだが」

「は、はい……」

その形相に怯えるのを見て、エイミイは空気を切り替えようとしてクロノを茶化すように声をかける。

それを聞いてやや怒ったような声でエイミイに注意をするが、その表情には先ほどの苛立ちはなく、やっとのことで普段のクロノへと戻った。

それに安心した艦長のリンデイはホッと一息ついたが、先ほどの化け物とそれを召喚したであろう謎の少年、そして化け物にやられたエミルの治療にリンデイは軽く頭痛を覚えたのだった。

それがまだ狂気の始まりであると知る由もなく。

無印7

「……失敗したか……」

狂信者共がいるとわかった現在。忌々しいことだが、授業を受けなければ行動ができなくなるため小学校にきたのだが、そこでやや疲弊した様子の高町を見て、ティンダロスの猟犬が奴らを■すことに失敗したことを理解した。

「ティンダロスの猟犬を退けるだけの力を持っているということか……」

だが、ティンダロスの猟犬は不死の存在。封印をしなければ決して追うことを止めない存在だ。特殊な呪文と真球を用意しないと封印することはできない。

ただ、奴を一時的に退けることはできたはずだ。読んだ手記には何年も前に消えたティンダロスの猟犬に襲われたと書かれていたものがあった上に本人からそれを聞き出すことができたから知っている。まさかとは思うが、あのティンダロスの猟犬を倒したのか？

だが、高町は見たところティンダロスの猟犬の舌を受けたような様子はな。あの場にいたのは高町と同じぐらいの年齢の子供だけだった。機械的な杖のようなものを持っていたが、精々が警棒かスタンガン程度のものでしかないはずだ。あんなものでティンダロスの猟犬を倒したとは思えない。

……いや、まさか、ティンダロスの猟犬を封印したのか？いや、まだわからない。やつらがティンダロスの猟犬を理解しているのかどうか、調べなければ分からない。

ティンダロスの猟犬に通常の攻撃はほぼ意味をなさない。魔術的な攻撃を行って初めてダメージを与えることができるんだ。通常の武器や兵器でダメージを与えるには多量の、それこそマシンガンやミニガンと言ったようなものでないとやつを倒しきることはできなかったはずだ。これから考えるに、奴らは魔術師であるということはず間違いないだろう。

だが、ティンダロスの猟犬を封印したとは思えない。もしかする

と、ただ追い返しただけの可能性もある。再び高町をつけ狙う可能性がある以上、こつちで封印する方法を立てておかないと自分の身も危ないか……。急いで真球を手に入れる必要があるな。

しかし、やつらは一体何者なんだ？ ティンダロスの猟犬を利用するためには年齢が低すぎる。

狂信者の子供か？ あり得ない話ではないか。子供すら利用する連中とは、さすが狂信者だ。が、子供だろうと容赦はしない。俺の日常を壊すようなら、■す。関わっているであろう人間クリチャーすべてを■す。

だが、やつらは何を知っている？ 何を利用している？

炎の精を理解していない様子を見るにシユブⅡニグラスに関する記述のみがある魔導書を読んだ魔術師の可能性が高いだろう。だが、奴らはなぜシユブⅡニグラスを召喚しようと考えているんだ？ 豊穣を狙っているのか？ だがこの土地で豊穣を願ったところで大したことにはならない。

世界の混乱を望んでいるのか？ それならばアザトースを呼べばそれで事足りる。思い出したくもないがナイアルラホテプでもそれは十分に、いや、あの邪神は自分で勝手に行動を起こしているか。

分からない。奴らが何を望んでシユブⅡニグラスを呼ぼうとしているのか。何が目的で邪神を呼ぼうとしているのか、分からない。

今までの被害を見るに、人的被害は森林での被害以外にほぼない。森林テロでも人的被害は破壊された物での傷がほとんどだ。無いに等しい。テロ以前に行方不明となった人物もいないようだが、この街の外を考えるとそれも意味はない。だが邪神を呼ぼうとしているのに多くの人間がいなくなっただという情報は一切入ってきていない。長年の行方不明者を数えれば可能になる程度の数にはなるだろうが、それだけ長い時間を費やしたというのに、そんな慎重なことをして来たやつがこんな簡単に露見するような真似をするとは思えない。

邪神を呼ぶために行動を起こしているのなら、もっと大々的な、それこそ教団が存在してもおかしくはないのに、どうしてここまで稚拙

なことが起きている……。

「……さて。本当に奴らは邪神を呼ぼうとしているのか……？」

ふと、今まで感じていた違和感が、それであると仮定するならばルがピツタリと埋まったかのように無くなつて頭の中で様々な予想が立てられていく。

「邪神を呼ぼうとしていない？逆にシユブニグラスとは知らずに呼ぼうとしている？眷属だけを呼び出して満足している？本当にテロを行おうとしている？何をしたか分からずに放置している？何をしたのか理解できていない？召喚したことすら気が付いていない？」

考えれば考えるほど、やつらが何を考えているのか分からなくなる。何を見て感じ、何を感じて崇拜し、何を崇拜する根拠とし、何の根拠を基に行動しているのか。

だが、それが狂信者だ。通常では理解できないことを平然と盲信しているからこそ狂信者であり、盲信しているがゆえに理解できない行動をとる。

そして、狂信者に年齢はない。親、友人、隣人、教会、宗教、教師。幼い子供はそれらから強く影響を受け、狂っていく。そこに疑問はない。”みんながそうだから”自分もそうしているとしか思っていないから。

だが、あくまでも家族全員が狂信者である可能性があるというだけだ。高町がどこかで狂信する対象、あるいは狂信者に出会った可能性がある。

「高町の家を見張るか……」

高町の住む場所は知っている。そこで情報を集めた方がいいかもしれない。だが、今知能と言語能力を持つ神話生物はいない。星の精は言葉を出すことができない。屍食鬼は作った故に知能が低い。ゾンビも同じだ。

屍食鬼でもキミタケのように特殊な条件で屍食鬼となつて人の知性を持った存在もあるが、ここにキミタケのような存在がいたのか確認もとれていない。いれば利用することができたのだが、いないものをねだつても仕方ない。

どうする？これまでと同じように星の精や屍食鬼を使って怪しい奴らを片っ端から■すか？だが、そんなことをしたら奴らの使っている魔術が、ティンダロスの猟犬を傷1つも負わずに対処できるような魔術を持つ奴らの背後が何なのかを明確にしないまま殺すのはマズい。

今までは黒い仔山羊を召喚した奴を殺せばいいと思っていたが、ティンダロスの猟犬を倒したとなれば話は別だ。やつらはどうやってティンダロスの猟犬を倒したんだ。何の魔術を使ったんだ。なぜ、傷も負わずに対処できたんだ。

ティンダロスの猟犬の対処の仕方を知っている可能性はある。あるが、それならばなぜシユブニグラスを求めている？もしくは黒い仔山羊のみを望んでいた可能性もある。

だが、その理由はなんだ？狂っているがゆえに、ただ見たかっただけなのか？召喚しただけか？それとも、誰かを殺すためか？

「……いや。待て。怪しい存在と言え、ずっと前からいるじゃねえか」

「そうだ。ここ最近ずっとこつちを、はやてを見ていた猫がいるじゃないか。」

「ここ最近は見えないと思っていたが、まさか、ずっとはやてを見ていたのははやてを生贄にするために？黒い仔山羊の生贄を確保できなかったらなくなっただけか？」

「また現れるようになったのは、シユブニグラスの召喚の生贄にするためにすきを狙っている？」

「……■す」

「……いや、落ち着け。感情的になるな。猫の主を■すのは確定だが、他の連中がそうである可能性があるというだけでまだ確定したわけじゃない。」

「以前もあつただろうが。ろくに情報を集めずに敵だと思って■した連中が、俺と同じ災厄を防ごうとしていた連中だったことが。■されかけたことだってあつた。」

その結果どうなった。邪神が、古の神が地球に来ただろう。なんと

か追い返すことができたが、それでも精神も、身体も、街も見ると影もなくなつただらうが。

まずは、情報だ。正しい情報がなければ、また邪神が来る。正しい情報を持たなければ、はやてが、死ぬ。父さんと、母さんも、死ぬ。「……従属させるか」

あの事件が起きてからずっと持っている魔力の籠った鉄を握りしめ、座っている高町に視線を向けた。

やるときは、誰も高町に目を向けていない授業の中で、だ。

頭の中で高町にかける呪文と時間、そして情報の伝達方法を考えながら、静かにその時を待つ。

もし、狂信者なら、高町とそれにかかわる全てを、■す。

無印 8

「……どういふことだ……？」

誰もいなくなった放課後の屋上。そこで俺は大した大きさもない紙切れを握りつぶさんとばかりに握りしめて眺めていた。

この紙は授業中、高町に従属の呪文を唱え、今までに起きたことを紙に書かせることを命令した。紙に書かれたことは単語単語で全部を理解しようとする場合には不可能なほどに情報が少ないが、実体を知るには十分な量だ。

初めてこの呪文を知った時は使い勝手のいいものだと思ったが、邪神の扱う呪文で扱いの良いものなんて存在しないということはあの時にはつきりと理解できた。この魔術、『精神的従属』はどんな命令でも従わせることができる分、操ることができる時間が少なすぎる。精々が10秒持つかどうかという程度だ。それゆえに単純な命令にしか従えない。だから今回紙に書かせたのは今までの事件で重要な部分のみを書いてそれを落とすように命令した。命令されたことに関しては何に記憶に残らないからまだ使えるが、これで記憶が残るようならば使うはずもない。

そして、この『精神的従属』で手に入れた情報が、次の通りだった。
『魔法 ジュエルシード 守る 次元世界 管理局』

高町が知る事件の重要なファクターを書け。そう命令して書いたのだからこれらが今までの事件に関わっていると断定していいだろう。

しかし、予想はしていたが魔法と呼ばれているものがあることに俺はやはりか、という感想しか出なかった。

魔法。聞こえはいいがおそらく魔術をいいように解釈した結果だろう。これで確定した。高町は魔術師だ。おそらく、一番初めの事件で出てきた小学生は高町で間違いないと見ていいだろう。

だが、目的が見えない。なぜ高町は魔術を知っているんだ？何の目的で魔術を知った？今まで魔術を使ってきた連中は目的があつて魔術を使ってきた。

洗脳。対策。死者の復活。過去への干渉。そして、邪神の召喚、復活。

誰も彼もくだらないものから命をかけるものまで、様々な人間がいた。が、生きて対峙した人間は全員が目的を持っていた。目的も持たずにただ使っただけの人間は全員死んでいる。奇跡的に生き残った奴もどこかしらの肉体か精神に大きな傷を負っている。

魔術とはそう言うものだ。だからこそそんなことになっていない高町が何のために魔術を使っているのかが分からない。

守る？何を？なにから？

それが分かれば、高町の目的も分かってくるだろう。そして、その目的のカギとなりそうなのが、『次元世界』という言葉だろう。

だが、次元世界とは何だ？

「……次元世界？まさか、ティンダロスの猟犬の住まうところか……？」
ティンダロスの猟犬が住む世界は鋭角しか存在しない世界だ。『次元世界』が次元が違う世界とそのままの意味ならティンダロスの猟犬がいるような存在から守るために魔術を？

いや、もしかするとイスの住む世界の可能性もある。まさかこいつ、イスと精神を交換したのか？今いるこいつはイスだというのか？
だが、これで何故ティンダロスの猟犬を無傷で対処できたのか理解できた。間違いなく、こいつらはティンダロスの猟犬を知っていた。炎の精を知らなかったということは、時間に関する邪神を崇拝している可能性がある。

時間に関する邪神……。時間で思い浮かぶ人間が欲するのはなんだ。未来視か？それとも過去視か？だが、それはティンダロスの猟犬を何とかする手段を持っているんだから既に見ている可能性がある。他に時間に関するものはなんだ？

時間……時間……。人間……時間……。分からない。なら、逆に考えろ。欲しいものじゃなくて避けたいものを。人間が怖いものと言えばなんだ？時間で怖いものと言えばなんだ？怖い物といえば、ティンダロスの猟犬？いや、そんな具体的なものじゃない。抽象的な……
恐怖は……死？死を回避……不死……不老不死……。

不老不死？不老不死……不老……不老を求めている……？まさか、召喚したい邪神は、塵を踏むもの？」

「……クアチル・ウタウスの不老不死を求めている？」

可能性はないわけではない。歴史上不老不死を求めた人間は数多くいる。現代だって如何に老けないかを研究しているほどに、求められていると言っても過言ではないものだ。それを求めて儀式を行っている可能性は十分あり得ることだ。

だが、それではなぜ黒い仔山羊を召喚したのかの理由が分からない。まさか黒い仔山羊の召喚方法のみが書かれた魔導書があった？ないわけではないが、なぜそれだけが書かれている？黒い仔山羊に親密な邪神であるシユブニグラスも書かれている方が自然だ。

「……判断するには情報が少なすぎる。もつと搾り取ったほうが良かったか……？いや、これ以上使えば高町に疑われる可能性が高いか……」

不老不死を求めているのが誰なのか。ティンダロスの猟犬から守っているであろう高町が求めているとは考えにくい。いや、ティンダロスの猟犬の対処方法と考えればそうでもないだろう。だが、どうやってクアチル・ウタウスを召喚するんだ？魔術師とは言えたかが1人程度の魔力で召喚できるとは到底思えない。なにか、俺のような『貯蓄』でもしていない限りそんなことはできないはずだ……。

「……なるほど。そのためのジュエルシードというものか」

これが何なのかは厳密には分からないが、おそらく魔力の籠ったアーティファクトのようなものだろう。誰が、なぜ、どこでそのアーティファクトを作ったのかは分からない。だが、今までの経験上ナイアルラホテブあが関わっていると考えた方がいいだろう。

そして、高町はそれに踊らされている哀れな犠牲者俺の同類という可能性も、出てきたか。

「……だが、一番わからないのが、『管理局』だ」

『管理局』。言葉だけを見るなら、何かしらを管理するために存在する局なんだろう。だが、何を管理するんだ。

何を、何故、何のために管理するのか。人を殺すためか人を救うた

めか優越感を感じるためか愉悦に走るためか。

……いや。今までを考えればそれも分かる。魔術書、アーティファクトと言った存在を自分のために使おうと、他を圧するために作り出した組織だろう。

大方這いよる混沌ナイアルラホテブがお遊びで作り出した、いや、作らせて自由に泳がせているだけの組織だろう。そうした組織はほとんどが、いや全てが世界を壊す、日常を壊す切っ掛けとなるのだ。

「……この組織の人間を残らず殺した方がいいか」

こういう組織は末端が腐っているか、幹部以上の存在が腐っているかの2つしかない。創設者が危険なものを管理して平和にしようという考えを持つていたのだとしても、あの邪神ナイアルラホテブがそんなことをさせるはずがない。知らず知らずのうちに邪神を召喚させるための片棒を担がれているだろう。

……そうならないために、『管理局』は潰す。独自の理論を正論として押し付けてくるであろう魔術師の組織は、潰した方がいい。魔術師に、いい奴なんて存在しない。すべての人間が、自分のことしか考えないんだから。

「……あの黒いガキと金髪のガキ、オレンジ髪の女が、『管理局』か？」
……いや、まだ断定するのは早い。あの時もこのときと同じように大して考えもせず殺して、その結果がああ惨事だ。もつと情報は集めた方がいい。が、おそらく時間はない。黒い仔山羊がいる今、儀式は大詰めにある可能性が高い。

だが、わからない。今までの事件は近くで起こったわけではない。住宅街、山の神社、そして公園付近の雑木林。近くで行わない利点としては所在地を悟られにくいという利点がある。が、それだけバラけているということはそれだけ移動する必要がある。計画犯であるにしろ愉快犯であるにしろ、監視や傍観はあるはずだ。警察はバカではあるが、無能ではない。こんな事件があつて犯人が近くにいたと判断して捜査していてもおかしくはない。

なのに、その犯人の目星すらついていない。公園ではあんなことがあつたにもかかわらず、だ。つまり、それだけ隠密行動が得意である、

または別の『目』を持っている可能性が……。

……ああ。そうか。あの猫か。よく監視して来るあの猫が、猫の主人がこれまでの事件の主犯なのか。

なぜ俺の家族を監視していたのか。なぜはやてを監視していたのか。まだわからない部分はある。が、十中八九儀式の生贄として目星をつけていたんだろう。俺の家族を、生贄に使おうとしていたんだろう。

なら、話は早い。昼間は手段が限られているが、夜ならいくらでも殺す手段はある。昼間でも殺す手段を考えなければならぬが、夜見つけた時は、殺す。

絶対に、殺す。俺の平穩のために、俺のモノに手を出す奴らは何であれ殺してやる。

絶対に、殺してやる。

無印9

「……今日も八神はやてに異常なし」

どこにでもあるような住宅街。夜になれば街灯がついているが、それでも歩くには心細い程度にしか照らされていない不気味さすら感じる街の中、私はとある家を見ていた。

そこはどこにでもあるような、ごく普通の家だ。強いて違いを挙げるとすれば、この住む夫婦が両者ともに医療関係の仕事に就いているおかげかかなり裕福な暮らしができるているのがうかがえるぐらいには大きい、ということだろう。

この家、久藤家にはある少女が住んでいる。その少女はその夫婦の子供ではないのだが、親友の子供で引き取り相手がいないということ引き取られた、可愛らしい少女がここにいる。

名前は、八神はやて。足が動けない身体障がい者であることを除けばごく普通の少女なのだが、私はこの少女を監視しているのだ。

正確には、この少女が持つ世界最悪とも言えるであろうロストログア、闇の書を私たちは監視している。

この闇の書、魔力を蒐めれば莫大な力を得ることができるといふ、ロストログアの名にふさわしい力を持っているのだが、この書を手にした者の結末は、誰も彼もが世界を半壊以上させる被害を出して自滅する、最悪のものだ。

そして、その最悪の象徴とも言えるのが、闇の書の持ち主はランダムに決まるということにある。持ち主が死んだあと、次の持ち主を探すかのようにその場から消え、何千何万という世界の中からたった1人の主を探す。そのおかげで闇の書の被害が起きるたびに所存不明になるという、下手な地雷よりも性質が悪い爆弾なのだ。

だけど、今は違う。死ぬことで新たな主を探して消えるというのなら、生きたまま永遠にどこかに閉じ込めることができたのなら、それですべてが解決する。

そのため的手段を私たちは、お父様は持っている。闇の書の場所も見つけてある。あとは、封印が解けたタイミングを見計らって封印を

すればいい。今は、八神はやての身に何か起きてまた闇の書がどこにあるのか、何てことにならないようにしなければならぬ。

そのためにも、数少ない、しかし小さいはずなのにとてつもなく巨大に思える障害とも言える存在をどうにかしなくてはならないだろう。

「……今日は、いないみたいだね……」

その存在の名は、久藤信也。八神はやてと同じ年齢で両親は八神はやての両親の友人。八神はやての両親が亡くなってから引き取り手のいなかった彼女を居候という形で家に招いている。

両親、父は医者で母はメンタルセラピストをやっていて、両者とも経歴に不可解な部分はない。

だというのに、その息子は、どこか壊れているような、そんな雰囲気を感じる不気味な子供だ。

表面上はただの猫である私の視線に気付き、果てには警戒している。ロツテと一緒に久藤信也を警戒はしているけど、ただでさえ少ない時間を使って八神はやてを監視している現在、不気味で怪しいということしかわかっていない。

サーチャーを使って調べてみても、この世界では珍しく魔力を持っているが、精々ランクはDに達するかという程度。デバイスも持っていない子供が、私たちの驚異になり得る筈がないとは、分かっている。わかつてはいるんだ。けど、それなのに私たちの気配を感じ、警戒している。時々真夜中というのにどこかに出ていたりしたことはあった。その行き先を調べようにもいつも私たちがいないときに行動を終えているか、あるいはまるで消えているかのように見失ってしまう。

サーチャーを増やして探ろうにも、これ以上管理外世界で、しかも理由が理由なだけに慎重に行動をせざるを得ない今、不用意にサーチャーを使うわけにはいかない。ただでさえ八神はやての監視に少ないリソースを使っているんだ。これ以上増やして監視するとボロが出てもおかしくない。

だから、まだ自由に行動できる今、久藤信也を監視するしかない。

サーチャーは使えなくても、自分の目で見ていられるだけでも何か掴めるんだから。

久藤信也は、今はどこに居るか分からない。カーテンを引いているせいで中の様子は見えない上に家のドコに彼がいるのか分かっていない。どこで何をしているのか気になるが、私たちが警戒しているのがわかって以上、ヘタに行動をするわけにはいかない。ここで下手に動いて厄介な行動に出られたら、八神はやてと闇の書のことを管理局にバレるかもしれない。

それではだめなんだ。闇の書は、私たちが処理をしなければならぬ。お父様の大切なご友人を殺した、あの闇の書は、私たちが処理するんだから。

一通り八神はやての様子の監視をし終え、久藤信也がどこで何をしているのかを確認しようと行動に映ろうとした、その時だった。

暗い、誰もいないはずの街路の中から、人が出るはずのない声がふと耳に入ってきたのだ。

「……………う…なに、この声は…」

どこかで歌の練習をしている、友達と談笑している、なんて優しいものではない。得体の知れない存在が狂った声を出しているような、狂ったナニカが喉から捻り出しているような、決して人間が出していないものではない精神を逆撫でるような声だ。

機械で作られたようなものではない。機械音声ならもつと人間味が無くなったような、雑な部分が必ず出てくるはずだ。まだまだ発達途上のこの世界の機械ではまず作ることができない。

なのにこの声は、人間のものではないと思うこの声は、認めたくないが間違いなく機械ではないものだ。

得体の知れない存在がここに居る。それだけが、その事実だけがこの空間を支配していた。

「なんだ……………なにが、ここに居る……………」

耳に神経を集中させる。こんなところで八神はやてに何かあったら、あの計画が台無しになる。またあれを探すはめになる。それだけはダメなんだ。お父様の復讐を完遂させるために、今八神はやてに何

かあるようなことはあつてはならない。

だが、そんな警戒を嘲笑うかのように、不気味な音とは違う別の声も聞こえてくる。

くす。クスクス。クスクスクスクス。

女性の笑い声が聞こえてくる。それも1人だけじゃない。2人、3人、いや、もしかしたらもつといるかもしれない。不気味な音と一緒に来るこの笑い声は、夜に聞くと不気味さしかない恐ろしいものを感じる。

どこだ？どこからこの不気味な声は聞こえてくるんだ。

何も見えない。どこから聞こえてくるのか分からない。不気味な音が、笑い声が、静かなはずの夜の街の中に響いている。あまりにも普遍離れた状況に、管理局で長い間働いているにも拘らず不気味さと不安が湧き出て、ヘドロのように纏わりついてくる。

声は止まない。笑い声は移動しているし、拡散し、反響し、笑い声に混じるせいでどこに音を出している元があるのか分からない。

メンテナンスやデータの提出の時に怪しまれる可能性があるのを覚悟してサーチャーを使い、この不気味な声の元凶を調べようかとデバイスに手を伸ばした時だった。

突然、ピタリと気味の悪い音が止んだ。同時に笑い声も消えて辺りが不気味なほどに静かになった。まるでさつきまでの不気味な声なんて存在していなかったの如く、なにも聞こえない空間へと、突然変化した。

なにがあつたんだ？どうしてこんな急に静かになった？辺りを見回し続け、自分の視界の端に黒い子共のような影をアリアが発見した次の瞬間。

突然の激痛とともに、粘性のある液体を多分に含んだ脂身と肉が焼けるような音が辺りに響いた。

「ああああああああああああ!?!」

突然の激痛。今が猫の身であることを忘れ。敬愛する主の敵を監視をする身であることを忘れ。本来ならここにはならないということを忘れ。

突然の激痛、それも内側から焼き焦がすかの如く激痛が襲い掛かってくるのを、ただ悲鳴を上げることしかできなかつた。

「あ、が、ぐあ、ぎい……!」

何度も大怪我を負ったことはある。その中には命を落としかけるほどのものすらあつた。

だが、今この身に起きている謎の激痛は今までにないものだった。ただただ痛い、苦しいが脳に埋め尽くされている中、これがこの世に絶対に存在してはならないものであることは、痛みで脳内を掻き乱されていても理解できた。

「ぐ……う、ぐ、あ……!」

伝えなければ。ロツテに、お父様に伝えなければ。ここに、お父様が長い間探していた怨敵の近くに、存在してはならない化け物がいることを……!

「あ……う……!」

もはや激痛を感じる神経はない。あらゆる器官が焼かれ、声を出すことも、動くことも、念話すらも満足にできないこの身で、最期の力を振り絞って、最期のメッセージをデバイスに入れる。

「あ……お……と、さ……ま……!」

普通の住宅街が映っている。ろくな音声もない。あるのは、誰も映っていない八神はやての住む家が映されている記録だけだ。

「アリア!? そんな、どうしてこんなことに!」

ロツテの声が聞こえる。お父様の声も、もう何を言っているのかわからないほど体が壊れているけど、聞こえる。

息は出来る。音は聞こえる。光は見える。固いところに倒れているのはわかる。けど、それだけしかわからない。かすれ声すら出せない。何を言っているのかわからない。光と影しか見ることができない。何かに触れているということしか、わからない。

全てが最低限度の機能すらしていないほどに、この体は傷つき、痛め付けられ、破壊された。もう、体が持たないと、最期の時がすぐそこにあることがわかるほどに、もう、意識がない。

でも、これだけは、伝えないと、いけ、ない。

あここに、け物、る。めて、そだけ
をて

「……消えた？」

目の前にいたはずの猫は、俺の使った呪文を受けて苦しみがいていたはずの猫は突然消えてしまった。

ありえない。通常なら絶対にありえない。

今使った魔術、『焼害』は相手に激痛を与える魔術だ。身体の内側から身体を燃やす、実質1度付いたら2度と消すことのできない最悪の炎だ。魔術の効果もすぐに現れる厄介な魔術だ。しかし、この魔術には難点はある。対象に声が聞こえている、目視ができている状態である、そして失敗することなく詠唱しなければならぬ。少しでも間違える、あるいは詠唱を止めることになれば、その炎は自身を焼くことになるのだ。

メリットよりもデメリットの方が大きい。こんな呪文を好んで使うやつはほとんどいない。だが、この小さいメリットは、人を苦しめ、確実に殺すという点に限って絶大な効果を発揮するものだ。

拷問、なんて優しいものじゃない。しゃべることもさせず、考えることもさせず、ただ激痛を与え、絶望させて殺すだけの、かの啗あざわらうう邪神を象徴するかのような魔術だ。

今回、自分が死ぬ可能性を出してまで危険を侵してこの呪文を使つたのは、確実にこの猫を殺すためだ。猫のように見えるこの存在は、明らかにこの家を、家族を、はやてを、俺を見ていた。まるで観察するように、監視するように、だ。

このまま観察をされていたら、ちよつとしたヘマで俺のことがバレ

てしまう可能性があった。

だから、殺した。殺される前に、これ以上なにかに気づかれないうちに。

だが、あの猫は、消える寸前に確かに人間の言葉を話した。猫の叫びではない、人の叫びを、していた。

「なんなんだあの猫は。しゃべっていただと？消えたのは、窓の創造を使えるのか？ありえない。なぜ猫が魔術を使う。まさか、あれはバースト神だったのか……？」

しまった。可能性としてはあつたはずなのに、行動を起こさなければ殺されると冷静さを欠きすぎた。よりによってバースト神を攻撃するなんて。

マズイ。マズイなんてものじゃない。どうする？このままでは、バースト神の報復がある。このままでは猫に

……いや、まて。やつは本当にバースト神か？確かにバースト神は気まぐれな部分はあるが、それなりに理由のある行動をとる。

考えられるのははやてがバースト神に何かをしたのか、あるいは興味のあるなにかをはやてが持つているのか。

バースト神が気になるものと言えよなんだ？猫に関して虐げるようなことをすれば報復をしに訪れるということは知っているが、はやてがそのようなことをするとは思えない。

……いや、待て。確か、呪文があつたはずだ。動物になる魔術が、あつた、はずだ。

……あつた。魔導書とも言えない、羊皮紙に書かれているだけのものだが、確かに書かれている。コウモリに化ける呪文が、ここに記されている。

これを使ったのか。これを使って、やつは猫に化けていた。ここには猫に化ける呪文は書かれていないが、コウモリの部分を俺の知らない言葉に、猫の部分に変えてしまえば化ける動物を変えられる可能性は十分にある。

やはり、相手は魔術師だった。何故はやてを、俺たちを監視していたのかはわからない。生贄を求めていたのか、それとも俺たちに何ら

かのものがあつたのか。

だが、これで1人は殺した。猫に化けてでも怪しまれないようにしてきた奴らのことだ。相手に魔術師がいると分かればより慎重な行動になるか、

もしこれで短絡的な行動に出るのならば、もっと残酷な生を与えてやる。生きることも苦しいと感じる、最悪の生を、与えてやる。

無印10

『おはようございます。朝のニュースをお伝えします。一昨日の夜、警察に〇〇町にて女性の悲鳴があったとの連絡が入り、警察が捜索をした結果血痕のような跡があったのを発見したことを明らかにしました』

『警察が調べたところ、この跡は動物の物であるときれ、悲鳴は小型の生物が何かしらの虐待を受けた際に出たものではないか、と発表しています』

『ここ最近、この街だけでなく海鳴市内にて数多くのトラブルや事件が多発しております』

『動物病院でのガス爆発事故、人気のない神社での破壊活動、森林公園無差別破壊テロ、年少女の行方不明事件など、数多くの事件が多発しており、警察は組織的な者の犯行ではないかという見解を示しています』

『警察は人気のない場所へ行ったり夜1人での活動を控えるよう警告しており、夜の巡回等を増やすとしています』

『しかし、こんなことが立て続けに起きるなんて、ホント怖いですね』
『そうですね。SNSを見ていますと夜中に女性の笑い声が聞こえる、犬の顔のような人が墓地にいた、火が宙を漂っているなどといった報告があるようですし、この街で一体何が起きているんでしょうね』

『年少少女たちに関しても、行方不明になった年少少女たちは普段夜に出歩いていることが多い子供たちが被害に遭っているようですし、市民の不安と警察への不満が出てきているようです』

『一刻も早い解決をしてほしいですね』

朝のニュースでは、最近起きている事件についてが報道されている。どれもこれも家の近くで起きている上に、しんやの嫌いなオカル

トの噂すら出てきている。しんやのおとうさんとおかあさんもしんやのこともあつてオカルトが嫌いやけど、今は夜勤からまだ帰ってき
てないからここにはいない。私としんやの2人つきり。

ここ最近のニュースでは最近起きている原因不明の事故や事件ばかりが流れている。ガス管爆発、テロ、無差別破壊、そして行方不明。どれもこれも原因が分かっていない、この街を恐怖に陥れている事件だ。この事件が起きてから火の玉やゾンビ、声だけの女、空飛ぶ少女と言ったオカルト的な情報が増えてきていることもあり、バラエティでは嬉々として宇宙人が原因だの悪霊が出てきているのだと囃し立てている。

だから最初このニュースを見たとき、また暴走するんやないかと不安やった。動物病院でのガス爆発や神社爆破テロ、森林公園無差別破壊テロでしんやは自分の体や私たちの心配なんて関係なしに動き回っていた。あの時はしんやのおとうさんとおかあさんが止めたからまだそこまで動いていなかったけど、今回は2人とも仕事でおらんから今すぐにでも出ていくんやないかって、なにもできない自分への怒りと誰かがいなくなる恐怖がわき出していた。

けど、今にも動くと思っていたしんやは、また無茶苦茶なことをするんじやないかと思っていたのになんの反応もなく黙々と朝御飯を食べていた。

「……………」

おかしい。いつもなら顔を青くして食べることもせずパソコンにかじりつくのに、今回は全く動じているような感じがせえへん。

ニュースを見て、何かを考えるように眉間にシワを寄せているけどすぐに立ち上がるような気配はない。なにより、今何がおきているのか判っているかのように落ち着いているのがおかしい。

「…………しんや、なんか様子おかしくない?」

このまま無視したら、きつと何か嫌なことが起きる。そう思った私は、しんやが煙に巻くのを分かって聞いてみた。予想通り、しんやは私の質問に、わずかに眉間にしわを寄せた。

「…………いつも通りだ」

嘘や。いつも通りなのは嘘やないんやろうけど、さっきの表情から見て何かを隠しているのは間違いない。でも、これ以上追求したとしてもしんやは絶対に何も教えてくれない。しんやの隠しているものは、きっと私が触れてほしくないと思っているものなんだろう。

そう、あの机の中にある不気味なファイルのような、私たちが触れちゃいけないようなものを、追いかけているんだらうから。

あの本を見てから、私はしんやのことを出来る限り止めるように努力してきた。あの本は間違いなく普通でないものやし、あの表情からして普通でないことが妄想であるとは思えない。

しんやのおとうさんとおかあさんにそれを伝えて、強迫性障害って病気かもしれへんからって見てもらってた。けど、それもダメやったみたいで結局切羽詰まったみたいな毎日を送っている。

せやから、一回しんやを止めようとしたんや。学校で体調崩して、家に帰ってきてても顔を青くしていて普段とは違って落ち着いていたから今日は大丈夫やって、そう思ってた。

でも、それも間違いやった。私の言葉をきっかけにいつも通りの、いや、いつも以上に切羽詰まった雰囲気を出して、体調を崩していたのに外に出ようとしていた。それを私は必死に止めようとしたけど、邪魔したら何をされるか分からないような、そんな怖い雰囲気があった。そのときの怖さが今でも鮮明に思い出してしまって、止めることができひん。

しんやのおとうさんかあさんに伝えて止めてもらっても、結局夜にも何かしているようなことをしている。

「……………」

ボソリと、しんやが私の様子を見て何かをつぶやく。しんやは考え事が纏まらないと聞こえないギリギリの音量で言葉にして考えをまとめようとする癖がある。けど、それは本当に聞こえないほどの大きさで、近くにいて聞き取ろうとしていないと聞こえない位の大きさやから滅多に聞こえる物やない。

やけど、それでもなんとかしんやを止めるために、しんやの行動を見極めるために呟いた言葉を聞き取ろうとしている。そして今日、そ

の努力が実ったのか、やつこのことで一部だけが聞こえた。

「……グア？いやクアチ……」

グア？カチ？なんなんやろ。全く聞いたことのない名前や。グアで覚えがあるんはグアムやけど、ムまで言っへんから何とかグアやろうし、カチなんて聞いたこともない。

「……ろ、喚んで消す……」

……よんで、けす？分からん。何をよんでけすのか、意味がわからへん。

でも、しんやの様子から見て絶対に普通なもの訳があらへん。それに、あの目は見たことがある。ドロツとしとって、怖くて、不気味な目は、外に飛び出したあの日のものとそっくりやった。

「……しんや」

怖さのあまり、私は思わず名前を呼んでしまった。呟いた程度の、聞こえていなくてもおかしくないその呟きを、しんやは聞き逃すことなく反応して寝不足でやや血走った目を私に向けていた。

「しんやは、どこにもいかへんよな？」

怖い。今のしんやがこわいんじゃないやなくて、あの日みたいに私の周りからまた誰がいなくなるんじゃないかという恐怖が、それによって脳裏に木の棺に入っているおとうさんとおかあさんが浮かび上がっていた。

これは直感だったのかもしれない。親の死を体験した私のなつて欲しくないがために頭のなかで作り出した妄想なのかもしれない。

でも、それでもどうしてか私はこの日常がいなくなるという未来がくつきりと頭のなかで浮かび上がってしまった。

こわい。意味のわからない事件にしんやが首を突っ込んでいることか。

こわい。その事件にしんやが巻き込まれてしまうことが

こわい。しんやがいなくなってしまふ未来が来てしまふのが。

こわい。ここまでしんやが理解できないことに命を懸けているの

か。

こわい。しんやがいなくなってしまふ未来を見てしまふ自分の頭

の、心の、意志の弱さが。

私を独りにするの？

「こわい。しんやのことをまったく理解できないことが、気が狂ったような人に見えてしまうことが。」

「大丈夫だ、はやて」

私を呼ぶ声が、思考の渦にのまれかけていた意識を一気に浮上させた。私を呼んだその声は、信じられないことに、しんやは私を見て無器用ながらも笑みを浮かべて私を見ていた。

「はやてと父さん、母さんは俺が守る」

滅多に、滅多にどころか初めて見たんやないかって思うぐらいに見えないしんやの笑顔は、口は笑っていても目が全く笑っていない、歪で不気味な笑みだった。

その笑みは私を安心させるためのものでもなく、威嚇するものでもなく。ただ自分を安心させるための、自分に言い聞かせるためだけのものにしか私には見えなかった。

この時、もつと必死になってしんやを止めておくべきやった。ここで必死に止めて、しんやがやって来たことを理解できたのなら、もしかしたらあの未来を止められたのかもしれない。

でも、私にはそれができなかった。力もなにもない、ただの病人の私には、どうすることもできなかった。

無印 1

「これですべてのジュエルシードの場所は判明していることになるわね……」

次元の狭間を航る船、アースラの一室。そこでアースラの艦長を務めている女性、リンデイ・ハラオウンは静かに現状を思い起こしていた。

魔法技術のない世界である地球。運搬事故によってジュエルシードが落とされ、それによる様々な事件が起きていた。要請から人員確保、作戦会議、世界情勢考慮までと時間をかけてしまったが、幸運にも現地協力者によって被害は大きくはなっていないかった。

しかし、同時にこちらと同じくジュエルシードを狙う少女、いや、少女に指示していた女性であるプレシア・テスタロツサのほうにもジュエルシードを持っていかれ、海の中にあつたジュエルシードすらも奪われてしまった。

後の戦いでプレシアの指示に従っていた少女、フェイト・テスタロツサの確保に成功したが、プレシアにとっては何も感じない手駒にしかなく、向こうからの一方的な通信でフェイトの心が壊れる寸前まで追い込まれていた。しかしリンデイはそう思いたくないが、そのおかげでどこにいるかを探知することができ、プレシアのいる場所が時の箱庭であることが判明した。

ジュエルシードをプレシアの願いである娘の死者蘇生に使うことに強く執着しているプレシアに、もはやこちらからの通告は意味のないものとなっていた。

アルハザードというありもしない空想都市にすがり付き、決して起こすべきではない死者蘇生にジュエルシードを使わせるわけにはいかない。尊敬する父を、愛する夫を失ったハラオウンは、愛する者を失った痛みを知りつつも同じく愛する者を失った者の歪んだ願いを阻止すべく彼女を止める準備していた。

しかし、リンデイは直に始まる大きくなるであろう戦闘に集中できずにいた。油断するわけにはいかない、地球の存在すらもかかっ

る戦いだというのに、どうしてか1度しか遭わずにいた少年が頭から離れずにいた。

「……今までの少年が現れていないことを幸運と思うべきか、それとも動向が読めていないことを嘆くべきか……」

思い出すのはフードを深く被った、背丈は現地協力者である高町なのはと同じぐらいだろうと予想がつくが、しかし血肉を滴らせていた全く子供らしくない少年だ。本来なら喜ぶべきであろうあの1件以来全く音沙汰もないことが、まるで嵐の静けさのような不気味さをリンディは感じていた。

あの少年はこの街の住人だと言うことはあのかのときの言葉から容易に予想がつく。しかし、どうしてこの街に住む少年が魔法を引き起こすことができたのか、という疑問が出てくるのだ。

まるで意思を持つかのように動く炎や正体不明の化け物を鑑みるに、おそらく少年の使う魔法は召喚魔法だろうとリンディは予測をたてる。もしかすると魔法ではなくレアスキルである可能性もある。姿を消したのも召喚魔法の応用でできたのかもしれない。

だが、少年のこと以上に分からないのはあの化け物だ。青い脳漿のような粘液を滴らせ、バリアジャケットを貫通する細長い針のようなものを持ち、まるで若さを吸いとるかのように突き刺した対象を老わせる力、そして次元の壁すら容易に移動できる、少年が獵犬と呼んだ存在。

これほどまでに危険な生物ならば危険指定種として情報がある。そのはずなのだ。しかしあの化け物はいくら調べても欠片も資料に出ることがない。老いさせる力を、次元を越える力を持つ存在がこんな魔法文明のない世界にいるとは思えなかった。念のためにとこの世界で化け物のことについて調べても資料は1つもでなかったのだ。

それだけではない。あの戦闘で残った僅かな粘液を採取して何かしらの手がかりを求めて成分を調べたのだが、その粘液には通常ならばありえない事実が存在していたのだ。生きる上で必要とされているはずの酵素。それが全く含まれていなかったのだ。この事実には粘

液を調べた乗員はありえないことだと顔を青ざめており、あれは本当に生物なのかとわめき散らすほどだった。

そんな化け物を、あの少年は操っていた。しかもあの化け物が現れる前に姿を消していた。

どうして姿を消したのかはわからない。確かに召喚者は自身が攻撃されないように遠くから操るのがセオリーだが、それは召喚者は姿を現さないからこそそのセオリーだ。無機物を召喚するなら操りやすいように近くにいたほうがいいが、それならば最後までいなければならぬのだ。

だが、あの少年は姿を現した。そして姿を消した。まるで自分達を見定めに来て、見放したかのように。

「……不気味ね……」

不気味だ。陳腐な言葉ではあるが、あまりにも不気味すぎる。手に血肉を滴らせ、魔法文明のない世界で魔法を使い、正体不明の化け物をも使役する。明らかに普通ではない。

だからこそ、リンディは彼の言葉を調べた。見たくもないおぞましい化け物が映っている映像の中に、少年の手がかりになるものはないかを探すために。

気にかかったのは『血と脂をつけていた』こと、『クリーチャー』と呼ぶ存在を知っていること、『あの子』なる存在、そして『黒い子山羊』なる存在だ。

血と脂をつけていた。つまり誰かを殺していた可能性が非常に高いということだ。いや、むしろ確定と言っても過言ではないだろう。

調べてみればここ最近夜中まで外にいた子供たちが何人も行方不明になっている事件がある。まず間違いなくあの少年が関わっていると見ていいだろう。

しかし、わからないのは行方不明になった子供たちが誰も見つかっていない点だ。一瞬にして姿をくrams魔法を使ったとしても、結局は死体が消えたわけではない。この世界の秩序を守る存在が無能でない限りどこかに捨てたとしても発見されるはずなのだ。しかも全国的にニュースで放送されるほど有名になった事件で、人数の規模か

らして搜索を打ち切るとは考えにくい。

つまり、あの少年は通常では考えられない方法で死体を片付けたということだ。こちらの追跡を振り切る移動手段を持っていると考えれば、ありえない話ではない。

いや。死体を消す方法はある。少年が使役していたあの炎。あれで死体を燃やし尽くせばあるいは見つからないかもしれない。だがあの炎は調べてみても死体を消すほどの温度はない。何かしらの方法で温度をあげることができれば、それなりの設備は必要としているはずだ。

結局のところ、あの少年が人を殺していたということには変わりない。だが、この世界では存在しないはずの魔法を使って人を殺している。到底赦されるべきではない。順次調べて捕まえなければならぬことは明白だ。

次に『クリーチャー』と口にしていたことについてだ。クリーチャーとはこの世界の言葉で考えるならば化け物という意味で間違いないだろう。それをあの少年は出したと言った。つまりクリーチャーは出すことのできる存在であることが窺える。現にあの猟犬と呼んだ化け物を出していたのだから召喚魔法を警戒していることは明白だ。

だが、なぜそれを警戒しているのかわからない。確かに魔法生物を使役する部族が存在しているから警戒するのもおかしくはないが、魔法文明もドラゴンと言った存在も架空の存在としてこの世界で警戒する意味がわからない。

あの必死さは間違いなくこの世界にいないであろう何かを知っていた。だからその原因と思われる自分達を襲ったのだろう。

どこでその存在を知ったのか。それがわかればあの少年の正体を知る手がかりになる可能性が高い。

次に『あの子』という存在。あの言葉からすれば『あの子』とは原因不明の何かに苦しめられている身内を指しているのだろう。そして原因不明の何かとはなんなのかを魔法、ひいてはジュエルシードのせいだと思い、それを奪い合っていたあの子たちと私たちが原因と判

断して襲いかかった。

あの子たちがそんなことをすると思えない以上、原因不明の何かに侵されたのはジュエルシードと考えられる。つまり移送事故があった日よりも後で病気、または怪我を負ったこの街に住む子供の身内である可能性が高いということになる。

そして、最もおかしいと感じてならないのが『黒い子山羊』の存在だ。

あの少年は『黒い子山羊』を召喚したと言った。これだけならば文字通り黒い子山羊がジュエルシードに願いを叶えてもらい、その被害を被ったと考えるだろう。だが調べてみてもこの街に山羊がいたという記録はない。それに山羊がいたとしても大抵は飼育されているもので、都市化が進んでいるこの街に生息するのはまずい上に野生でいるのは九州より南のほうだ。

つまり、この街で人目につかない山羊がいるというのはおかしいのだ。山羊がどうにかなったという噂もこの街にない以上、山羊が存在しないと云つても過言ではないのだ。

存在しないものを召喚したと憤っていた少年。高町なのはが今まで集めていたなかで山羊が存在したと聞いていないことから、本当に山羊のようなナニかがここにいた可能性が出てきたのだ。

総合して結論付ければ、あの少年は『身内が原因不明の病を患っている、魔法文明の存在を知るレアスキル持ちの殺人鬼』ということになる。レアスキルは追跡を振り切り、火の玉や化け物を出していたことからおそらく空間に作用するものだろう。

厄介だ。魔法技術がない世界でレアスキルを用いての殺人はこの世界の住人だけでは解決することはまず不可能だ。さらに『黒い子山羊』と呼んでいたナニかを呼び出す存在がいる可能性があることを鑑みると、アースラおよび管理局の局員を遣わせなければならない事案だ。

「……嫌な予感がするわね……」

今までいくつもの事件に関わり、かつ最悪の遺産で夫を亡くした経験が警笛を鳴らしているように、虫の知らせのようななにかをリン

デイは漠然と感じていた。

それが何なのかはわからない。少年が脅威になるのか、それとも別のナニかが脅威になるのか。だが、放っておけば良くないことが起きると、警鐘が鳴っているのを感じていた。

「艦長。時間です」

「……もうそんな時間ですか……。わかりました。すぐにいきます」
アースラの乗員に呼ばれ、もうすぐ作戦の時間であることに考えすぎたと反省しつつ頭を切り替えていく。

今は目の前の問題に取り組まなければならない。相手は強大な魔導師だ。下手をすればジュエルシードによって地球が滅んでしまう。そんなことにならないようにしなければならぬ。時空管理局の名に恥じぬよう、世界を守るために。

この時のリンデイは痼のように残っているそれを無視するように努めた。忘れる、とまでいかなくともそれに思考を囚われていては最悪の事態になりかねないからだ。

それは正しいことだった。だが、同時にそれは最悪の選択でもあった。のちにPT事件と呼ばれるようになった事件の後始末に追われて少年のことを後回しにしたことが、史上最悪と言われる事件を起すことになるのだった。

リンデイが予想した最悪の事態が正しかったと知ったときには、既に取り返しのできない災厄が降り立つことをこの時誰も知るよしもなかった。

あの少年をただの殺人鬼と認識してしまっただがゆえに。知るはずもない、人智を超えた、おぞましく、どうすることもできない存在を知らないがゆえに。狂った少年を知らないがゆえに。世界を滅ぼす神話が、音をたてずに忍び寄っていたことを、気付くことも知ることのできなかつたのだ。

無印12

なのはは考えていた。自分と戦っていた少女のこともそうだが、どうしてか頭にこびりつくかのように残り続けている名前に、わずかに思考してしまっていた。

「アルハザード……どこかで聞いたことあるような……」

うつすらとではあるが、なぜか聞いたことのあるはずのない名前がどこか既視感を覚える。どこで聞いたのか、あるいは目にしたのかすらも思い出せない。なのにどうしてかその名前は知っているような気がする。

知っている？いや、知っているんじゃない。凶鑑や新聞、ラジオでちらつと聞いただけのような、名前だけしか知らない状態だ。それがなんなのかは全く知らないし、どこで聞いたのかも覚えていない。たまたま耳にしたという程度の知識だ。

なのに、どうしてその名前を聞くと怖く思うのだろうか。どうしてなにかを思い出しそうになるのだろうか。

行動を共にするようになった仲間、クロノ・ハラウンはかつて栄華を誇り、最後には滅んだとされるはるか昔の都市の名前だと言っていた。

あらゆる知識が存在し、不老不死や死者蘇生すらも可能な技術を誇った万能の都市。大量のロストロギアが生まれ、同時にそれが理由で滅んだとされる自滅した都市。伝説でしか存在せず、本当に存在したのかすら疑われている幻の都市。

それを自分が知るはずがない。いや、もしかしたらどこかで聞いたことがあったのかもしれない。地球にもギリシャ神話や北歐神話、アーサー王伝説などといった魔法が存在する伝承や話は数多く存在する。その中にアルハザードという名前の何かがあったのかもしれない。幼い頃に怖いお話として聞いたのを思い出しただけなのかもしれない。

「……………」

しかし、そう思ってもなのははどうしてか不安を無くすことができ

なかった。最終決戦の場に行くことによる不安が思い出せない不安を助長させているだけなのかもしれない。勝たなきゃいけないというプレッシャーからくる不安を感じているだけなのかもしれない。

一抹の不安を抱えたまま、なのは戦地へ赴く。知らなかった世界へつれて行ってくれた少年と、使命を胸にした少年と、自分の家族を想った女性と、そして母を求めて立ち上がった少女とともにすべての元凶が存在する場所、時の箱庭へ。

箱庭での戦いは激しいものだった。機械と玉虫色の混ざった肌色の肉でできた兵たちにひたすらに魔法をぶつけ、攻撃をかわし、防ぐ。通常ならば対処することすらできないであろうその圧倒的な数の差を、たった5人で対処し続ける少女たちは敵を蹴散らして目的の場所へと移動する。

アースラからの援助もあり、なんとか敵を蹴散らしながら目的の場所へとたどり着いた5人は、警戒をしながら部屋のドアを開け、思わず言葉を失った。

「……来たのね」

そこはプレシアとアリシアの肉体、アリシアの肉体を劣化させないための装置、ジユエルシード、そしてなにかの肉片がある、広い空間だった。

千切れたような腕、原型を残していない手、軟体生物のごとく曲がった足、捻れた胴体。どれも玉虫色から人肌の色まで様々な状態で散らばっている空間に何事もないかのように振る舞うプレシアの精神に、しかし5人は怯むことはあっても逃げ出そうとはしなかった。

「……母さん」

フェイトは杖を握りしめ、母に対話を求める。自分の話を聞いてほしい。自分の声を聞いてほしい。ただそれだけの願いをこめた言葉は、しかしプレシアに届くことはなかった。

「黙りなさい。あなたは私の娘なんかじゃないわ」

他人の娘とすら思ってもいない、肉の塊を見るかのようなその態度にアルフは怒りのあまり突撃をしようと足を動かす。しかしそれをフェイトは視線で制し、アルフの気持ちに嬉しく思いながら自分の

「^想言葉

を口にする。

「母さんにとってはそうかもしれませんが、でも、それでもあなたは私にとつて、私の母さんなんです」

ひどい仕打ちを受けてきた。体だけでなく、心にも傷も負った。けど、それでも自分の母はあなただけだと真剣に伝えたいとしかフェイトは思わなかった。

「……なんとも言うっていればいい。私は、私のたった1人の娘を取り戻す。それだけのためにここまで来たのだから」

しかし、それでもプレシアの心にはなにも通じない。現実を見ようとせず、自分の想い以外は無価値だと言わんばかりのその態度に、アルフだけでなくクロノも激情に従った。

「そんな、自分の娘にも等しい人をそんな扱いをして、その子が喜ぶとも思っているのか!？」

「黙りなさい! 我が子を失ったこともない、その苦しみを知らないお前たちに何がわかるの!?! 私の望んだ子にもならないモノが私の娘だなんて、おぞましいことをいうんじゃないわ!」

しかし、激情に従って出したクロノの言葉に返ってきたのは、やはり激情に従っただけの、会話にもならないただの想いだけだった。

「あの事故のせいでアリシアが死んだ! 何度あの子と会いたいの思っただことか! 何度救えなかったことを後悔したことか! 何度あの子に会いたいの思っただことか! 何度アリシアと幸せに過ごす毎日を夢見たことか! 何度あの子の成長を見届けたと思ったことか!」

お前たちにながわかるの!?! あの事故のせいで私はすべてを失った! あの事故を止められたらと何度思った……ッ」

突然言葉を区切る。まるでなにかに気づいたかのように目を見開き、憎悪に溢れていた表情から一転して口角を徐々に上げていった。

「ふ、ふふふ……」

笑う。わらう。嗤う。さきほどもまでの様子は何だったのだと言うほどに変わった

「そう。そうよね。今あの子が蘇っても、私は病でもうすぐ死んでしまう。ここで蘇生させてもあの子の成長を見届けられない。」

死なせなければよかったのよ。ああ、なぜこんな簡単なことに気が付かなかったのかしら」

「なにを、する気だ？」

先程まで顔を怒りに染めていたとは思えないほどにケタケタと唾うプレシアに、クロノは恐怖した。考えが理解できないことに恐怖したのではない。クロノが恐怖したのはそのあまりにも大きすぎる感情の落差だ。

娘を取り戻したい。そのために大きな力を求めている。それこそおとぎ話のものを求めるほどに。自分も父を亡くし、求めるあまりにそういったことを考えなかったわけではない。

だからその気持ちはわかる。だが、あの感情の変わり様はなんだ。怒りからいきなり喜びに。そのあまりにも大きい感情の落差は、そしてプレシアの口から出た言葉はクロノから思考を奪うのに余りある混乱を生まれさせたのだ。

「私は過去に戻る。ジュエルシードの力を使って、時空間を歪ませて過去の入り口を作るのよ。過去に戻って、アリシアが死ぬという過去を変えるのよ！」

過去に戻る。誰もがそうしたいと願い、しかし夢物語だと笑って諦めるようなことを、目の前の狂人^{プレシア}は宣ったのだ。

「そんな、そんなことができるはずがない！過去を変えるなんて、そんなふざけたことができるはずがない！」

あまりにも現実離れしすぎている願いに、クロノは思ったままの言葉^葉を口にする。

クロノの言うことが当たり前なのだ。死者蘇生のことといい、人が夢物語だと笑うものを真剣に想うなど、まともな思考のできる人間では到底不可能だ。

そんなまともなことすらも考えることができている狂人は、笑顔のままかろうじて聞こえる程度の声で不気味なほどに明るい笑みを浮かべながら呟き続けた。

「アルハザードには死者蘇生の知識がある。それに、あの本には神との接触すらできると書いてあったんだから、過去を変える方法があつ

てもおかしくないわ。ジュエルシードは願いを叶える万能のロスト
ロギア。過去に行くことぐらいなんてことないはずよ。

そうよ。そうだわ。過去を変えればいいのよ。そうすれば私は幸
せな人生を送ることができる。アリシアとの平和で幸せな生活を過
ごすことができるのよ。

そうすればここまでくるのに苦しむことも、こんな見た目しか似て
いない人形を見ることもない」

嗤いながら恍惚とした表情を浮かべるプレシアの目には、もはや正
気はなかった。理性的な色が消え、ただドロドロに濁りきった狂気の
光がプレシアの目から溢れているかのようにすら感じる。

「ああ、さん……」

あまりにも豹変した姿にフェイトはただ悲しさしかなかった。自
分を娘と見てほしい。真剣に家族と見てほしい。そんなささやかな
願いを持ち続けているフェイトは、無力な子供のようになだ声をかけ
ることしかできなかった。

「黙りなさい。その顔で私を母と呼ぶんじゃないわ、化け物の血が混
ざった人擬きが」

「っ……!?!」

そして、それに返ってきたのは娘どころか人の扱ひもしなかった、
道端の石ころを蹴るかのような冷たいものだった。

「プレシア、お前ええええええええ！」

フェイトへのあまりの態度に、アルフは手の肉を破らんばかりに握
りしめてプレシアに向かって走る。しかし、アルフが近づくと前にプレ
シアは杖を構えるだけで多くの雷撃を作り出し、それらがアルフの体
を貫く。

「があ……!?!」

「アルフ！」

いたるところが焦げ、血を多く含んだ肉の焼ける嫌な臭いをわずか
に出しながら倒れるアルフの元に向かうフェイト。運よく致命傷に
は至らなかつたのか意識はあつたが、それでも命を落としていてもお
かしくない攻撃を受けたアルフは体を震わせてその場に立つことが

やっとの状態だった。

「おのれ……ッ！」

クロノは怒りで顔を歪め、すぐにでもプレシアを拘束するためにかろうとした。しかし既にジュエルシードを発動していたのか突然の魔力の激流に意識が逸れ、それが致命的な時間となってしまった。

「ここで見ていなさい！私がアリシアとの時間を取り戻す瞬間を！」

止めるために動こうとするが次々と出てくる攻撃に近づくことすらできない。

やめろ。それ以上は危険だ。クロノがその言葉を口にする前に、プレシアは狂気に満ちた笑みを浮かべた口を開いた。

「ジュエルシードよ！私の望みを！私をあの手まわしい事故があった時間へと連れていきなさい！」

ジュエルシードが妖しく光る。瞬間、空間が揺れたとすら感じる揺れをその場にいた全員が感じた。それは収まることなく、むしろ強さを増しながらジュエルシードから大量の魔力があふれでていく。

空間が歪む。大量の魔力が一点に集中していき、まるで空間をこじ開けようとしているかのごとく揺れが強くなる。

「マズイー…空間が……い！」

地面だけの揺れではない。空気が、その空間そのものが震えている今、魔法を使うことすらもできず、ただ立つことしかできない。

このままでは空間が崩壊し、あつてはならない空間が開かれる。その崩壊の最中に、それは起きた。

「へ？」

「なっ!？」

「そんな!？」

「あれは……っ！」

「ありえない……ッ！」

まるで真ん中から切り開いたかのように、空間に鋭角の切れ目が入って左右に開かれる。鋭角しか存在していなかった開き口が一瞬にして曲線へと変わり、その中に映し出されている空間を見てその場を見ていた全員が言葉を失った。

フェイトと生き写しの少女。何事もなく楽しそうに笑みを浮かべている少女のいるその場所は、どこかの研究機関の研究所と思わしきところで、機械がところ狭しと並んでいた。

「ああ……アリシア……私の、かわいい娘……！」

その姿を見たプレシアは涙した。自分が求めて止まないその姿に、その存在に心を奪われている最中に、それは突然現れた。

「……ッ!？」

全員に悪寒が走る。すべての悪意を集めて煮詰めたような、あまりにも不気味で気持ちの悪いそれを、プレシアを除くそこにいる全員は知っていた。

「この、感じ……！」

「間違いない！これはあの……！」

いや、忘れるはずもない。悪意と憎悪と殺意をドロドロになるまで煮詰めたような負の感情の集合を、友の未来を失ったあの屈辱を、なのはたちが忘れるはずがない。

どこから出てくる。人を常識外の手段で変わり果てた姿へと変える化け物に、恐怖故か意識を向ける。だから自分達の前にいる存在の行動を見逃してしまった。

「ああ、アリシア……。今からあなたを助けるからね……！」

人生を賭してまで待ち望んだ愛娘が目の前にいることに夢中になっているプレシアだけが、何が起きているのかわかっていない。否、わかろうともしていない。

ただ娘を助けるために。ただ娘に会いたい一心に。ただこれから起きる惨劇を無くすために。プレシアは周りのことなど目に入れることなく、ただ目の前の映像へと興奮で震える足を運ぶ。

「ッ！母さん！ダメー！」

襲いかかってくるであろう化け物を知っているフェイトは、その魔の手から母を助けるために手を伸ばす。機械人形をかわしての移動、しかしその腕がプレシアに届く前に、映像の中から現れた3つのナニカがプレシアの胸に突き刺さった。

「えっ?？」

その光景に誰も動くことはできなかつた。胸に突き刺さっているにも関わらず、痛みも大してないそれがなんなのかをプレシアが理解する前に、粘性のあるものを吸いとるかのような汚い音が辺りに響いた。

「か……あ……!?!」

ジュルリ、ジュルリと3本の触手がプレシアの何かを吸いとる。液体を吸いとっているようで、しかしそれが致命的な何かを吸いとっていることを証明するかのように、プレシアの様子が目に見えて変わってゆく。

妙齢の美人と言えたプレシアの肌の張りがなくなり、声に覇気がなくなり、顔から生気が失われていく。

「つああああああアアアアアア?!」

フェイトの叫び声が、部屋の中に満ちた。手に持ったバルディッシュを大鎌へと変え、非殺傷設定すらも解除してプレシアを苦しめている触手に電気の刃で斬り込んだ。

斬り込まれた触手は抵抗もなく、いとも容易く断ち切られ、電撃によつて焦げ付く嫌な臭いを発した。悲鳴のような唸り声とともに粘着質な液体をすすめるような不快な音をたてながら触手は過去の映像の奥へと消えていき、同時に悪意が消えていった。

そして、プレシアは立つ力すら残されてなかつたのか、胸に孔を空けたままその場に崩れ落ちる。

「母さんー」

倒れたプレシアを見てフェイトは急いでプレシアの側に行く。人形のごとく全身の力が抜けて重くなったプレシアの体をフェイトはなんとか上半身だけ抱き抱える。

しかし、プレシアの顔から生気を感じない。美しかった顔は一気に老けたかのように土気色となり、温かかったであろう体温も奪われたかのように冷たくなっていった。

その様子はまるで死んでいるかのように、プレシアは静かにフェイトになされるがままだった。

「母さんー母さん、母さんー母さん……ッ!」

フェイトは必死に母の身体を揺すり、呼んだ。どうすればいいかわからず、ただ母と呼び掛け続ける。

その姿を見たプレシアはなにを思ったのか。それともなにも思わず反射的な行動だったのか。震える手をフェイトの頬へ当て、なにかを話すかのように口をわずかに動かした。

「かあ、さん……」

しかし、それもすぐに力尽きたかのように床へと落ち、さっきまでとは比べ物にならないほどに、プレシアの体は重くなっていた。

「……かあ、さん……う……」

あまりにも急激に重く冷たくなった母の体は、幼い少女の細腕で支えるにはあまりにも重いものだった。

「母さん！母さん！」

フェイトは揺する。母だった肉体を現実を拒否するかのようになり死になって揺すった。しかし、それから返ってくるのは何もない。ただただなされるがままに動き、そして動かない。

ダラリと力なく眠る姿は、決して起きることのないそれは、幼い心を持つ少女に否応なしに現実を見せつけていた。

「あ、ああ……い……ああああああああああ!!」

少女の慟哭は、その場にいた誰もその心を揺さぶる悲しいものだった。喉が痛くなることに構うことなく、母の仇がすぐ近くにいることにも構うことなく。母を亡くした少女はたった一人の母を求めて泣き続けた。

これが、プレシア・テスタロッサの引き起こした事件、ジュエルシード事件の顛末だった。

その後も謎の生物が全員の前に現れたが、直後にジュエルシードの

暴走による爆発、およびそれによる次元震によって時の箱庭の崩壊が起きた。

この爆発によって本事件の首謀者の1人でもあり、同時に被害者でもあるフェイト・テストロッサは爆発に巻き込まれたものの、幸運にも本格的な爆発が起こる前に発生した小規模の爆発によって吹き飛ばされ、大爆発に巻き込まれることなく管理局達の元へと飛ばされた。そのおかげか、致命傷となる怪我はなく、痕がわずかに残る程度の全治1ヶ月の重傷で済んだ。さらに魔法を使うことで、1週間も経たずに、通常の生活を送ることが出来る程度には、体は回復した。

しかし、事件の真犯人であるプレシア・テストロッサの遺体は爆発に巻き込まれ、行方不明となった。爆発によって消えたプレシアとアリスアの遺体、およびジュエルシードをアースラが懸命に探すも、次元震による虚数空間に落ちてしまったのか結局は見つけることはできなかつた。

そして管理外世界でジュエルシードを奪い続けたフェイト・テストロッサとその使い魔アルフはクロノ・ハラオウンによって逮捕されたが、その傷と経緯いきさつからひとまずアースラにて心と体の療養することとなった。かのフェイト・テストロッサを心配した少女と、経緯と事実を知っているからか、それとも自らと同じく親を亡くしたからか、クロノ・ハラオウンは、彼女の罪を軽くするために奔走することとなった。

その甲斐あってか、少女はとても軽い罪に問われるだけとなった。さらに廃人になりかけていたフェイト・テストロッサの心が奇跡的に復活し、少女はその能力を以て社会に貢献すべく、クロノ・ハラオウンおよびリンディ・ハラオウンたち管理局の仕事を手伝うこととなった。

これがジュエルシード事件の軽い顛末である。残念ながらプレシア・テストロッサの持つジュエルシードは見つけることはできなかつたが、現場の状況から虚数空間に落ちたのだと判断され、捜索は打ち切られた。

心を壊しかけた少女も社会復帰ができ、さらに管理局の仕事に興味

を持つようになった地球の少女も管理局を手伝うこととなり、管理局としては損失を補える成果だと両手を上げることとなったのは、ごくわずかな人間しか知ることはなかった。

後日、奇跡的に残っていたプレシアのデバイスから情報を抜き出していた研究員がとある情報を見つけていた。多くの部分が傷つき、読み取れるデータもごくわずかなものだったが、それでもプレシアの研究の一端を発見できたこと喜びの声を上げるものもいたほどだった。

しかしそれは本のような紙媒体を撮影したものであり、その紙媒体が古すぎたせいか痛みがひどく、読み取ること自体が難しいものだった。さらにデバイスのデータがほとんど消えていたこともあり、あまりにも資料の少なさと、映像のみであることから、修復も推測も不可能であると判断され、そのうえでどこで使われていたのかすらわからない文字であったために、ほとんど解読できず仕舞いだった。

しかし、これを見つけた研究員はその紙媒体にひどく興味を引き付けられていた。それを見た瞬間、ゾクリと背筋になにかが走ったかのような感覚に襲われたのだ。

読めもしないそれにどうしてそう感じたのか。それは研究員にもわからなかったが、それでも解読しなければならぬという気持ち湧いて出てきたのは事実だった。

もしかしたら、プレシア・テストアロツサが狂信するほどのアルハザードの知識の出所が分かるかもしれない。そういう判断のもと解読を試みたが、しかし結果としてはほとんど解読できなかったという、期待はずれにも程があるというものだった。

唯一解読できた文字列で読み取れた言葉も表紙に書かれている固有名詞であったため、これ以上はたいした情報にならないと上層部の命令で解読は打ち切り、いつしか情報も無限書庫の奥深くに眠ることとなった。

唯一解読できた言葉である『シヨゴス』。それがどんな存在なのか、その単語に続く文字のことを知ることが、どんなことなのか。

それを知らずにいたことが不幸だったのか、それとも幸運だったのか。

か。それを知る機会があるということがどういふ事態なのかを知る者は、不幸幸運にもそこにはいなかった。

こどもものにつぎ

・三月α日

この日より神話的事象に関することをまとめるために手記に書いていくことにする。普段使用する用のため、自作暗号では怪しまれる可能性があるため、落書きに見せるためにシャーロック・ホームズの踊る人形を参考に暗号化する。

過去に行った実験等をここに記しておく。

魔術が使えるのかを実験。貯蓄の魔術はある程度の体積、密度がある金属がなければ使用できないため、人気のない森林で幽体の剃刀を使用。問題なく発動できた。まだ他の魔術に関しては実験は行っていないが、使用が可能ならば金属が集まり次第貯蓄の魔術を使い、空鬼の召喚のためにナイフに精神を入れる儀式を行う。

PS・感覚的なものではあるが、魔術を使用した時に何かが歪んだような感覚を覚えた。一瞬であり、2度目の使用以降で感じることもなく、わずかな違和感のようなものしか感じなかったが、念のために記しておく。

・Ω月ε日

父から純度の高い金属をもらった。もらった金属に貯蓄の魔術をかける。魔術は問題なく発動し、成功した。

しかし前世とは違い、使える金額が遥かに少ないことを考えれば金策を考えなくてはならない。

それに、はやてのことも気になる。筋ジストロフィーでもない、原因不明で徐々に体が動けなくなっていく現象なんて、通常はあり得るはずもない。ありえない、そうだ、ありえない。ありえないということとは、また腐れ外道の魔術師どもが何かしているに決まっている。

ふざけるな。また、俺の日常が壊されるのか。壊されてたまるか。また壊されるのなら、壊される前に、俺が殺してやる。

・X月了日

こちらを監視しているようにしか見えない猫を発見。こちらが警戒したのを確認するとどこかへ消えていくのを見るに、人並みの知能で以てこちらを監視しているように思える。

なぜ猫がこちらを確認しているのか。バースト神の化身として存在しているのか。そうであったとしてもその理由がわからない。ゾンビの目を使用していたとしても、人以外に目を埋め込むことは可能なのか。

引き続き調査をする必要がある。対象からこれ以上警戒されぬよう注意を払う必要がある。

・△月γ日

深き者とシ●●スの存在を確認。嫌だ。死にたくない。

・Γ月β日

対魔術師用に星の精を召喚。問題なく成功し、計3体を召喚。エサを与えるために廃工場や橋の下でたむろしている浮浪者や犯罪者と思われる者共を探してはエサとした。死骸は魔術により骨も残さず灰にした。食屍鬼の発見が急がれる。

・Λ月μ日

金策はチンピラを殺して奪うことでカバーする。夜中に家を抜け出すタイミングはいつでもある。普遍の魔術で補導される心配もない。

路地裏に入れば殺しても問題ないチンピラがゾロゾロ釣れる。星の精で全員血を抜き取り、金だけを奪って魔術で消して帰ればいい。P.S. ミⅡゴを召喚して生きたまま拉致してもらおう計画も立てたが、優秀でもない脳を抜き取るとは思えないため白紙にする。

・σ月ξ日

誘拐犯と思われる集団が廃工場に潜伏。儀式の生贄を集めていた可能性があり、星の精のエサが足りていなかったため、誘拐犯を全て

殺害。金のことしか聞かされていなかったのか、たいした情報は得られなかった。

誘拐された子供は気絶していた。この姿を見られるわけにもいかず、気温、室温、時間帯としては問題ないと判断し、縛っていた縄を切って放置する。

・Φ月Φ日

この街にも吸血鬼伝説があることを確認。隠しきれなかった星の精による吸血がニユースとなり、過去に吸血鬼伝説があったことが報道された。内容は眉唾物ではあったが、この地に伝説があったことは間違いないと思われる。後日調査をする。

P.S. この地に夜に暗躍する一族がいたことを記載していた文献を発見。詳細は載っていないが、昼でも活動していた記載も存在したため、おそらく表沙汰にできないことを夜と暗喩させたものと思われる。吸血鬼伝説の象徴でもある「夜」と混在したために生まれた伝説であると思われる。得られた情報は少なかつたため、優先度を下げて調査を続ける。

P.S. 夜に暗躍する一族に関する文献に目を合わせれば操られたとされる記述があったことを確認。魔術師が存在したことを確認。優先度を上げて調べなくては。

・Φ月Φ日

この街で原因不明の道路破損事件が発生。ニユースでは原因不明のガス爆発とされているが、あの壊れ方は内側からの破壊ではなく、明らかに外側から力が加わったことによる破壊なのは間違いないだろう。

力のある神話生物というくくりではいくらでもいる。ネット上の情報では少年のような声と黒い霧のようなもの、そして小学生ぐらいの少女が重要な手がかりとなるだろう。

黒い霧の正体はわからない。情報がなさすぎる。少年の声も何かしらの魔術で聞こえさせられていたと考えるのが妥当だろう。少女

の正体は、わからない。ピンク色のレーザーとはなんだ。何かの看板と間違えただけじゃないのか。

情報が少なすぎるが、少なくともこれで終わるはずがない。何を目的として街を破壊したのか、小学生の正体は何なのか、少年の声の正体は何なのか。やるべきことが増えた。星の精や屍食鬼どもに監視を任せるのが妥当か。

せめて、黒い霧、あるいは少年の声の正体がニャルラトホテプでないことを祈る。

・√月θ日

油断した。まさか、空を飛ぶこともできる魔術師が何人もいるとは思わなかった。中には隣席の高町なのはがいるとは思わなかった。

激昂してティンダロスの猟犬をけしかけたが、今思えば情報を捻り出すという点を考えれば失敗だった。だが、高町なのはが何事もなく学校に登校してくるのを見るにティンダロスの猟犬を撃退、かつ追跡を躲せるレベルでの魔術を使用できることには間違いない。

これではつきりした。この事件は間違いなく魔術師によるものだ。今まで俺が処分してきた連中は捨て駒か、あるいは関係なかったんだろう。だが、平穏のため、状況を判断するためには必要な犠牲だ。俺の知っている魔術師とは毛色が違うということが分かったのは大きな進歩だ。

だが、まだわからないことは大量にある。連中が使っている常に浮遊している魔術や、どこから魔力を供給しているのか、俺の知らない魔術はどの魔導書から得たものなのか。

高町なのはから情報を得なくてはならない。誰にもバレないように。

・Ⅱ月τ日

高町なのはから得た情報は10秒という短い時間の中では思った以上に有益なものだった。

『魔法 ジュエルシード 守る 次元世界 管理局』

これらの情報から、高町は魔術師ではあるが、俺と同類か、あるいは利用されているだけの魔術師であることはほぼ確定。

ジュエルシードはおそらく魔力のこもったアーティファクトであると予想。そして、今回の事件の目的は不老不死を求めてクアチル・ウタウスを召喚するための儀式をしていたのだろう。

次元世界については熟考する必要があると思われる。次元の違う世界、という意味ではティンダロスの猟犬の住む鋭角しかない世界を指すのか、外宇宙の邪神どもが住まう世界のことを指すのか、判断はできない。

情報が足りない。圧倒的に、必要な情報が。

・?月〇日

青山霊園にて食屍鬼と接触。子供の見た目をしているからか襲い掛かってくる屍食鬼もいたが、空鬼にて撃退。

予想していなかったことにキミタケと同じような存在がいることを確認。キミタケと同じように知性と理性を持つていることが判明。話し合いの末、お互いに必要のない場合は接触しないことを約束する。同時に行動範囲内という条件はあるものの、連絡を取れば死体を処理してくれるとのこと。範囲は狭いが、少なくともこれにて魔術で消炭にする回数はなくなった。

また、こちらにはSHILDなる組織は存在しておらず、この世界にも存在していた地下遺跡に侵入、および侵攻している存在はないとのこと。しかしいつ政府が神話生物の洗脳にかかるかわからないため、警戒は密に行う。

・▽月〇日

思った以上に吸血鬼伝説の内容が集まらない。この街は昔から様々な人種が入り乱れているからか決定的だと言える情報を見つめることができない。

知性のある神話生物に聞いてみたが、どれも不確かな情報しか出て

こない。いや、あれは恐れているが故にいうことができないのだろう。現にキミタケもどきからは何もしなければ安全であることを助言された。警戒して鬼を出す覚悟で情報を集めるか、何もしないと希望的観測で探るのを止めるのか。

警戒しなければ、対処できない。知らなければ、死ぬ。動けば、家族に危害が出るかもしれない。警戒しなければ、何も起きないかもしれない。知らなければ、死なないかもしれない。動かなければ、家族とそのまま過ごせる。

いやだ。しにたくない

・▽月ㄴ日

以前から監視していた猫を排除した。聞き間違いではなければあの猫から人の声が聞こえた。どのような魔術を使ったのかは不明だが、人の声を出せるほどのアーティファクトを破壊できたと判断できるだろう。

少なくとも魔術師に手痛い被害を与えられた。これで引き続き監視に来るようならば、違う手を使って排除する必要がある。

この地に根付く吸血鬼の情報については引き続き調査を行う。キミタケもどきから情報を引き出すために何かしらの行動をとらなければならぬ。

数少ない友好的になりえる神話生物だ。慎重に行動していかなければならない。

無知は死だ。

目を覚ましても全身の倦怠感を取れず、むしろ全身に鉛がついているかのような重みに思考の邪魔にならない程度の頭痛、手足の痺れ、そして息切れが止まらない。

「……ツチ」

今日はいつにもまして体がだるい。足もうまく上がらず、引きずるようにしか動かすことができない。ここまでつらい朝は前世を含めても初めてだ。

「なあ、大丈夫なん？ 顔色なんかいつも以上におかしいで？」

良くない状態だということがはたから見ても分かるのだろう。はやてが隣で心配そうな表情で俺を見ている。

「息も荒いし、体も震えとるやん。休んだ方がええんとちやう？」

隣でははやてが騒いでいる。けど、今はそんなことで止まっているわけにはいかない。まだやらないといけないことはいくらでもある。最近はやてが音沙汰がなくなっているが少し前にあった原因不明の事故や事件がまだ真相のわからないままだ。

あの時の事件のカギを握っていきそうなのは高町なのはと一緒だった連中だが、まだ確証があるわけではない。管理局という組織がどういった組織なのか、あの黒いガキがどういう存在なのか、それが分からない状態で動くことは今考えれば得策じゃなかった。あそこで激昂して姿を見せ、ティンダロスの猟犬をけしかけたのは間違いだったか。

「なあ、なあって！ フラフラしとるやん！ あかんでそんな状態で動いとったら！」

そろそろはやての声も煩わしく感じてくる。俺にはやることがある。なのに、どうして止めようとする。どうして体が動かない。どうして、力が抜けていくんだ。

「し、しんや！？ しんやーしんやー！」

目の前が暗くなっていく中、はやての声だけがやけに頭の中に響いた。

「……………」

目が覚めると、そこは白い部屋だった。シミも見当たらない白い壁、必要最低限にしかない家電、仕切りのためのカーテンにその下からは自分と同じようなベッドの足が見える。寝起きのためか思考も定まらない思考の中、開いた窓から清涼な風が入ってくる。

一瞬またどこかに飛ばされたのかと身構えたが、冷静になって周りを見てもただの病室。点滴と思われる管が腕についているのを見るに俺は運ばれたんだろう。

「あ、起きたん?」

車いす特有の擦れる音が部屋の中で静かに響く。そんな言葉と共に入ってきたはやての表情は心配そうなものだったが、その中に呆れと怒りが混ざっている。

「ここは……………」

「病院やで。昼間に倒れて運ばれたやん。丸一日寝とつたんやで。覚えとらんのか?」

次々と口に出される言葉はどこか刺々しく感じる。自分は怒っている、と言わんばかりに眉間にしわを寄せ、言葉を切るたびに何度もため息をついていく。

しかし、はやての小言を聞く余裕が俺にはなかった。

「……………倒れた……………」

俺は倒れた、らしい。はやてが言うには父さん曰く睡眠不足によるものだろう、とのことらしい。けど、俺には倒れたときの記憶がない。覚えているのは、夜遅くまで血の付いたナイフを磨いて、記憶にある魔術書の内容を書き写して、仮眠をとって、普段通りに……………普段通り?なんだ?記憶がない?俺はいつ起きていた?

「……………はやて、その時の俺は、どうだった?」

「どう?…どうって、どういう意味?」

「いつ俺は起きた?何かおかしなことをしていなかったか?何かを調

べているようだったとか、妙な事を呟いていたとかなかったか？」

「……そんなことなかったで？ただ、いつもより遅く起きてきたのと、いつにもまして目の隈が濃かったし、返事もあんませえへんかったり、歩いてるときフラフラしてたから調子悪そうやとはおもとったけど」

……特に、は、問題ないか？いや、記憶がないというのが引つかかる。なにかろくでもないことを口走っていたら、最悪はやての記憶を消さなくてはならないかもしれない。

「あ、でもなんやよくわからん言葉はしゃべっとつたな。なんとかのぜみがどうのとか、ねく……なんとかがどうのとか聞きにくい声でしゃべっとつたな」

……なんとかのぜみ？ねく？なんだ？俺は何について口走っていたんだ？

それについて確認しようと思ったが、はやてが思い出したかのようにそうや、と言い始める。

「特に問題はないやろうけど、3日間は入院やっていつとたで。突然気絶して1日も寝てたんやから頭や体の検査とかの検査入院も兼ねとるんやって」

……3日？3日もここにいなければならぬだど？そんなことしていたら対策が……、いや、だが、気絶するほどに疲労がたまっていたんだとすれば、ここで休んでおく必要があるか？

幸い、と言えるかはさておき意思のある屍食鬼たちとも接触できていて情報も集まりやすくなっている。ここ最近あの狂信者どもの動きも見られないというのがいささか疑問ではあるが、あいつらが起こしているであろう事件も見られないのを考えれば一時的に退却していると考えてもいいのかもしれない。

……いや、そんなことをしている暇はない。はやての足は治る傾向が見られない以上、原因がわからない今、まだあの連中を探す必要がある。

「……また変なこと考えとる。私は家に戻るけど、ちゃんと休まなあかんぞ？」

はやては呆れと心配が混ざった表情のため息を吐いて持っていた本を数冊置いて帰ろうとする。

「はやて」

しかし、絶対に確認しなければならないことがあるからはやてを呼び止める。はやてはその場で止まったが、車イスをこちらに向けることも返事をすることもなく、向けたのはなんとも言えないような表情を浮かべた顔だけだった。

「……何か、身の回りで変なことはなかったか？」

「……変なこと、って言われても私にはわからへんよ」

そういうはやての表情は、なぜか寂しげだった。俺はこれ以上何も言えず、病室から出ていくのを見送ることしかできなかった。

「起きたのか」

はやてと入れ替わるように入ってきたのは父さんだった。腕を組んで心配そうな表情の中に、確かな怒りがあるのが見てとれる。

「気を失うまでいったい何をやっていたんだ。症状を鑑みるに、寝不足や過労の時に出る症状に近いぞ」

「……………」

「だんまりは無しだ。入院するまで何かをやっているとすると、夜に何をしているのかはわからないけど、さすがにもう限界だ。話してもらうまでここから離れないからな」

本当に言うまで逃がすつもりはないのか、眉間にしわを寄せてこの場から離れる様子を見せない。このままでは時間が過ぎ去ったとしてもずっと追及を続けるのだろう。なら、騙さなくては。納得ができるように、騙さなくてはならない。

「……本を、作ってるんだ」

「……本を？」

騙すにしても、相手は父親であり、同時に医者だ。心理学を修めていてもおかしくはない。だから、嘘をついてはならない。嘘をつくのはダメだ。騙すんだ。今まで培ってきた技術を使って、幾度となく使ってきた騙し方で。

「あまり言いたくないんだけど、本を作っていたんだ。自分の知って

ることをまとめた本を。記憶の整理のために後から読み返せるものを自己満足で」

「……それで、夜遅くまで起きていると?」

「誰にも読ませる気はないし、楽しいから暗号文で作ってるんだ。だから文章を考えているとどうしても時間がかかってしまう」

事実を言う。子供っぽいと思われるもいい。むしろそう思わせれるなら両手を上げて喜んでもいい。見かけに騙されてくれるなら、いろいろと制限はあるがやりやすいことがあることも事実だ。子供だからと見逃されたことも多々あるのだから。

だから、ここで騙すしかない。俺たちの平穏が遠ざかる。俺たちの未来がなくなる。そうなる前に。

「……そう、か。なら、もう夜遅くまで作業をするのは禁止だ。これからは父さんと同じ布団で寝てもらおうからな」

納得のいかないような様子だったが、なんとか騙されてくれたのかしぶしぶと言った表情のため息をついた。けれど、さすがに同じ場所で寝るといのはまずい。ただでさえ原因の究明は何も進んでいないというのに、これ以上進みを遅くするのはまずい。

けれど反論できる材料は何もない。精神はともかく子供の姿をしているのに夜遅くまで起きている事実を咎められた以上、どうすることもできない。

どうすればいい。どうすれば、俺はみんなを救えるんだ。

部屋の中の明かりは、ベッドのすぐそばにある電灯のみだった。目を通して頭の中に入ることのない文字列を眺めていたはやては、深くため息を吐いて本を閉じる。

「……わからん。わからへんよ」

はやての頭の中にあるのは、今朝の信也の状態だった。いつも以上に顔色が悪く、フラフラと歩いていた信也は、ついには倒れてしまった。

『し、しんや!?!』

倒れた信也に驚いて病院へ電話をかける。急に倒れたと言って家まで救急車を手配してもらおうようにしてもらい、信也の様子を見ると、苦しそうな表情を浮かべながら口がもごもごと動いていたのが見えた。

いったい何を言っているのか。不安とともに耳を澄ませて聞いたそれは、しかし、倒れた信也の口から洩れていたのは果たしてなんのうわ言だったのか。

『……らなくちゃ、今日算数の宿題があつて、A社に営業行く必要があつて、就活5回目をやらなくちゃ、いや小学校を確認しなくちゃ、ああそうだあのバカまた教室にとんでもないものを持ってきてたなさつさと処分しないと、あの古典の先公とんでもないもの持ってきやがつて奪うのにどんだけ時間かかるんだ、あの猫どもどこで操られるんだ、修学旅行水族館行くから楽しみだな、なんでまた小学生からやり直すことになったんだ、あいつがしぬ、またあの邪神の仕業なのか、もうやめてくれ、しにたくない……』

『……しん、や?』

どういふことなのか、どうしてあんなうわ言が漏れていたのかはわからない。どうしてあんな言葉が出てきたのか。どうして小学生のはずなのにあんな言葉が出てきたのか。救急車が来ることにはすでにうわ言もなくなった信也に聞くすべは、もうなくなったのかかもしれない。

「……もうすぐ、今日も終わるんやな」

ふと時計を見ると、針はもうすぐ12時を指すぐらいの時間だった。次の日は自分の誕生日だ。いつもならしんやのお父さんとお母さん、しんやが祝ってくれていたが、しんやは入院、しんやのお父さんとお母さんは仕事で帰ってこられるかわからない。

「……1人になるのも、久しぶりやな」

今ここにいるのは、たった1人。そう実感した瞬間、体が震える。呼吸も荒くなってくる。怖い。恐い。こわい。いやだ、1人はいやだ。

「……我慢や。我慢しやんとあかんのや」

自分に言い聞かせるように、震えを止めるために自分の体を抱きしめる。しかし、そうしたところで何も変化が起こるはずもなく、時計の針が進む音が静かな部屋の中で響き渡るだけだった。

そして、時計の針が12時を指した時、それは突然起こった。

「……えっ?」

戸棚から光が漏れ始める。そしてその光は独りでに動き始め、それが鎖のついた本だとわかったのは自分の前まで浮いてきたときだった。

「なんっ……!?!」

何が起きているのかを理解する前に、鎖が千切れとんだ。白い粉のような何かが4つ、本から吐き出される。様々な大きさの白い山が作り上げられ、それを囲むようにして光る何かが回り始める。

何か聞こえる。まるで歌うように聞こえてくるそれがなんの言語なのか、どこから聞こえてきているのかわからなかったが、ただ1つ感じるのは、この音がただただ疎ましいものだけだった。いや、疎ましいなんてものじゃない。この声は、この歌は、この音は、この世にあつていいものではない。

動くことができない。足が動かすことができないこともあるが、それ以上に目の前で起きている現象が理解を超えていて動くという発想に、未知という恐怖から逃げるといふ発想にたどり着かない。

そして目の前の白い山が人の形を作っていく、そして音が聞こえない

くなつたころには3人の女と少女、1人の男がはやてに向かつてひざまついていた。

「夢より我ら夜天の主の元に集いし騎士」

「主在る限り我らの魂尽きることなし」

「この身に命在る限り我らは御身の元に在り」

「我らが主、夜天の王、その大いなる使者の下に」

はやてはなんとなく理解した。これまでの変わらなかつた日常は、ここで終わるんだということ。そしてはやては気づかなかつた。この出会いが今までのものすべてを壊す失きつかけとなるということに気づかないまま、ただ家族が増えたということをはんの少しだけ理解していた。